

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

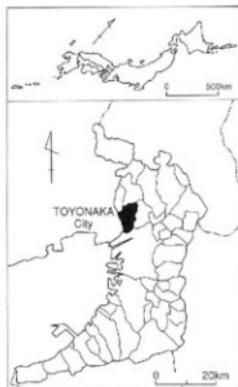
平成24・25年度(2012・2013年度)

平成26年(2014年)3月

豊中市教育委員会

# 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 24・25 年度（2012・2013 年度）



平成 26 年（2014 年）3 月

豊中市教育委員会

## 序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、西は兵庫県と接しています。千里丘陵にかつて広大な森林を控えたこの地は、神崎川や猪名川から常に豊かな水がもたらされ、古くから人々の生活の場が育まれてきた結果、多くの歴史的遺産が受け継がれてきました。その一方、商都大阪に隣接する関係により、早くから大阪北郊のベッドタウンとしての開発が進められてきた結果、すみやかに埋蔵文化財の保護に取り組む必要がありました。近年になって開発の勢いは落ちingいてきたものの、土地利用の形態が変化してきたことを受けて小規模開発が急増し、住宅の老朽化に伴う建て替えも依然として多く、埋蔵文化財の保護について迅速な対応が求められています。

本書は郷土の文化財としての埋蔵文化財の重要性を踏まえ、国の補助を受けて実施した緊急発掘調査の概要報告です。今回は、平成24・25年度に調査を実施した本町遺跡、新免遺跡、曾根遺跡、ならびに各遺跡における確認調査に加え、平成23年度後期に実施した内田遺跡、各遺跡における確認調査も掲載いたしました。本町遺跡では弥生時代後期～古墳時代後期の集落跡、新免遺跡では弥生時代中期～古墳時代後期、曾根遺跡では弥生時代後期の集落跡が確認され、内田遺跡では古墳時代後期の集落跡に加え縄文時代後期の土坑が検出されるなど、各遺跡において新たな知見が得られました。

永きにわたって受け継がれてきた貴重な歴史的遺産は、わたしたち現代に暮らす人間にとっても大切な知識をもたらしてくれます。本書が、郷土豊中の豊かな未来形成のために役立つことを願ってやみません。

調査の実施にあたっては、土地所有者、施工関係者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を賜りました。また文化庁、大阪府教育委員会ならびに関係諸機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が推進できましたことを、ここに厚く感謝いたしますとともに、今後ともより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成26年(2014年)3月31日

豊中市教育委員会  
教育長 大源文造

## 例　　言

1. 本書は、平成 24・25 年度国庫補助事業（いずれも総額 7,000,000 円、国庫 50%、市費 50%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。また平成 23 年度 1～3 月に国庫補助事業として実施した内田遺跡第 10 次調査と確認調査の成果も併せて収録した。
2. 平成 24・25 年度事業として、平成 24 年 4 月 26 日から平成 26 年 3 月 31 日までの間、発掘調査ならびに整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会事務局地域教育振興室文化財保護チームが実施した。
4. 本書のうち、第 I・III 章は陣内高志が、第 II・IV・V 章を清水篤が、第 VI 章を服部聰志が執筆した。また、第 VII・VIII 章は各調査担当者の見解をもとに、浅田尚子が執筆した。なお、全体の編集は陣内が行なった。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M. N. は磁北、また表記のないものは国土座標系（第 VI 系）に基づく座標北を示す。
6. 挿図・本文中の上色表記の基準は、『新版標準上色帖 2010 年版』に基づく。
7. 插図に掲載した出土遺物の縮尺は原則 1：3 または 1：4 とする。
8. 各調査地の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財の保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、深謝いたします。

本書掲載本発掘調査一覧

遺跡名	次数	調査地	調査面積	担当者	調査期間
内田遺跡	第 10 次	豊中市櫻の町 3 丁目 75-1・76	327 m <sup>2</sup>	清水 篤	平成 23 年 12 月 12 日 ～平成 24 年 2 月 12 日
曾根遺跡	第 12 次	豊中市曾根西町 3 丁目 17-5	59.37 m <sup>2</sup>	陣内高志	平成 24 年 5 月 7 日 ～5 月 31 日
新免遺跡	第 65 次	豊中市玉井町 3 丁目 46	70.5 m <sup>2</sup>	清水 篤	平成 24 年 5 月 21 日 ～6 月 30 日
新免遺跡	第 66 次	豊中市玉井町 3 丁目 24-1・2	123 m <sup>2</sup>	清水 篤	平成 25 年 6 月 3 日 ～8 月 10 日
本町遺跡	第 39 次	豊中市本町 2 丁目 108 の一部	37.4 m <sup>2</sup>	服部聰志	平成 24 年 11 月 1 日 ～12 月 4 日

# 目 次

第Ⅰ章 位置と環境	(陣内)
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 内出遺跡第10次調査	(清水)
1. 調査の経緯	5
2. 調査の成果	5
(1) 遺跡の概要	5
(2) 基本層序	6
(3) 検出した遺構と遺物	6
3.まとめ	14
第Ⅲ章 曾根遺跡第12次調査	(陣内)
1. 調査の経緯	17
2. 調査の成果	17
(1) 基本層序	17
(2) 検出した遺構と遺物	19
3.まとめ	24
第Ⅳ章 新免遺跡第65次調査	(清水)
1. 調査の経緯	25
2. 調査の成果	25
(1) 遺跡の概要	25
(2) 基本層序	26
(3) 検出した遺構と遺物	26
3.まとめ	33
第Ⅴ章 新免遺跡第66次調査	(清水)
1. 調査の経緯	37
2. 調査の成果	37
(1) 遺跡の概要	37
(2) 基本層序	38
(3) 検出した遺構と遺物	38
3.まとめ	44

第VI章 本町遺跡第39次調査	(服部)
1. 調査の経緯	45
2. 調査の成果	45
(1) 基本層序	45
(2) 遺構面の状況	46
(3) 検出した遺構と遺物	46
3.まとめ	50
第VII章 確認調査の成果（平成24年度）	(浅田)
確認調査の概要	51
第VIII章 確認調査の成果（平成25年度）	(浅田)
確認調査の概要	69

## 挿図・表目次

(第I章 位置と環境)	
第1図 市内遺跡分布図	2
第2図 調査地点と周辺の地形	4
(第II章 内田遺跡第10次調査)	
第3図 調査範囲図 (1:600)	5
第4図 調査地位置図 (1:5,000)	5
第5図 調査区 平面・断面図 (1:80)	7・8
第6図 土坑4・5 平面・断面図 (1:20)	9
第7図 土坑4・5 出土繩文土器 (1:2)	9
第8図 出上石器 (1:1)	10
第9図 竪穴住居1・2 平面・断面図 (1:40)	12
第10図 竪穴住居1・2 出土遺物 (1:3)	13
第11図 溝10 出土カマド (1:3)	14
第12図 土坑2 平面・断面図 (1:30)	14
第13図 上坑2・3・6 出土遺物 (1:3)	15
第14図 溝 出土遺物 (1:3)	16
第15図 SP 出土遺物 (1:3)	16

(第Ⅲ章 曽根遺跡第12次調査)

第16図 調査範囲図 (1:200) .....	17
第17図 調査位置図 (1:5,000) .....	17
第18図 調査区 平面・断面図 (1:50) .....	18
第19図 溝1 平面・断面図 (1:20) .....	19
第20図 溝2 平面・断面図 (1:20) .....	20
第21図 溝4 平面・断面図 (1:20) .....	21
第22図 土坑1 平面・断面図 (1:20) .....	22
第23図 土坑2 平面・断面図 (1:20) .....	22
第24図 出土遺物 (1:4) .....	23
第25図 土坑3 平面・断面図 (1:20) .....	24

(第Ⅳ章 新免遺跡第65次調査)

第26図 調査範囲図 (1:300) .....	25
第27図 調査位置図 (1:5,000) .....	25
第28図 調査区 平面・断面図 (1:40) .....	27・28
第29図 土坑11 平面・断面図 (1:30) .....	29
第30図 土坑17 平面・断面図 (1:30) .....	30
第31図 土坑11 出土遺物 (1:4) .....	31
第32図 土坑17 出土遺物 (1:4) .....	32
第33図 土坑20 平面・断面図 (1:20) .....	33
第34図 穫穴住居他 出土遺物 (1:4) .....	33
第35図 出土石器1 (1:1) .....	34
第36図 出土石器2 (1:1) .....	35
第37図 出土石器3 (1:1) .....	36

(第Ⅴ章 新免遺跡第66次調査)

第38図 調査範囲図 (1:300) .....	37
第39図 調査位置図 (1:5,000) .....	37
第40図 調査区 平面・断面図 (1:50) .....	39・40
第41図 穫穴住居 出土遺物 (1:3) .....	41
第42図 土坑 出土遺物 (1:3) .....	41
第43図 SP 出土遺物 (1:3) .....	42
第44図 出土石器 (1:1) .....	43

(第VI章 本町遺跡第39次調査)

第45図 調査範囲図(1:200) .....	45
第46図 調査地位置図(1:5,000) .....	45
第47図 調査区 平面・断面図(1:60) .....	47
第48図 出土遺物(1:4) .....	48
第49図 風倒木痕 断面図(1:40) .....	49
第50図 出土遺物(1:4) .....	50

(第VII章 確認調査の成果(平成24年度))

第1表 平成24年(2012年)確認調査一覧表 .....	51・52
第51図 確認調査地点位置図 .....	53
第52図 トレンチ掘削状況 .....	54
第53図 トレンチ断面図 .....	54
第54図 トレンチ掘削状況 .....	54
第55図 トレンチ断面図 .....	54
第56図 トレンチ掘削状況 .....	54
第57図 トレンチ断面図 .....	54
第58図 トレンチ掘削状況 .....	54
第59図 トレンチ断面図 .....	54
第60図 トレンチ掘削状況 .....	55
第61図 トレンチ断面図 .....	55
第62図 トレンチ掘削状況 .....	55
第63図 トレンチ断面図 .....	55
第64図 トレンチ掘削状況 .....	55
第65図 トレンチ断面図 .....	55
第66図 トレンチ掘削状況 .....	55
第67図 トレンチ断面図 .....	55
第68図 トレンチ掘削状況 .....	56
第69図 トレンチ断面図 .....	56
第70図 トレンチ掘削状況 .....	56
第71図 トレンチ断面図 .....	56
第72図 トレンチ掘削状況 .....	56
第73図 トレンチ断面図 .....	56
第74図 トレンチ掘削状況 .....	56
第75図 トレンチ断面図 .....	56

第 76 図	トレンチ掘削状況	57
第 77 図	トレンチ断面図	57
第 78 図	トレンチ掘削状況	57
第 79 図	トレンチ断面図	57
第 80 図	トレンチ掘削状況	57
第 81 図	トレンチ断面図	57
第 82 図	トレンチ掘削状況	57
第 83 図	トレンチ断面図	57
第 84 図	トレンチ配置図	58
第 85 図	トレンチ断面図	58
第 86 図	トレンチ配置図	58
第 87 図	トレンチ断面図	58
第 88 図	トレンチ配置図	58
第 89 図	トレンチ断面図	58
第 90 図	トレンチ配置図	58
第 91 図	トレンチ断面図	58
第 92 図	トレンチ配置図	59
第 93 図	トレンチ断面図	59
第 94 図	トレンチ配置図	59
第 95 図	トレンチ断面図	59
第 96 図	トレンチ配置図	59
第 97 図	トレンチ断面図	59
第 98 図	トレンチ配置図	59
第 99 図	トレンチ断面図	59
第 100 図	トレンチ掘削状況	60
第 101 図	トレンチ断面図	60
第 102 図	トレンチ掘削状況	60
第 103 図	トレンチ断面図	60
第 104 図	トレンチ掘削状況	60
第 105 図	トレンチ断面図	60
第 106 図	トレンチ掘削状況	60
第 107 図	トレンチ断面図	60
第 108 図	トレンチ掘削状況	61
第 109 図	トレンチ断面図	61
第 110 図	トレンチ掘削状況	61
第 111 図	トレンチ断面図	61
第 112 図	トレンチ掘削状況	61

第113図	トレンチ断面図	61
第114図	トレンチ掘削状況	61
第115図	トレンチ断面図	61
第116図	トレンチ掘削状況	62
第117図	トレンチ断面図	62
第118図	トレンチ掘削状況	62
第119図	トレンチ断面図	62
第120図	トレンチ掘削状況	62
第121図	トレンチ断面図	62
第122図	トレンチ掘削状況	62
第123図	トレンチ断面図	62
第124図	トレンチ掘削状況	63
第125図	トレンチ断面図	63
第126図	トレンチ掘削状況	63
第127図	トレンチ断面図	63
第128図	トレンチ掘削状況	63
第129図	トレンチ断面図	63
第130図	トレンチ掘削状況	63
第131図	トレンチ断面図	63
第132図	トレンチ掘削状況	64
第133図	トレンチ断面図	64
第134図	トレンチ掘削状況	64
第135図	トレンチ断面図	64
第136図	トレンチ掘削状況	64
第137図	トレンチ断面図	64
第138図	トレンチ掘削状況	64
第139図	トレンチ断面図	64
第140図	トレンチ掘削状況	65
第141図	トレンチ断面図	65
第142図	トレンチ掘削状況	65
第143図	トレンチ断面図	65
第144図	トレンチ掘削状況	65
第145図	トレンチ断面図	65
第146図	トレンチ掘削状況	65
第147図	トレンチ断面図	65
第148図	トレンチ掘削状況	66
第149図	トレンチ断面図	66

第 150 図	トレンチ掘削状況	66
第 151 図	トレンチ断面図	66
第 152 図	トレンチ掘削状況	66
第 153 図	トレンチ断面図	66
第 154 図	トレンチ掘削状況	66
第 155 図	トレンチ断面図	66
第 156 図	トレンチ掘削状況	67
第 157 図	トレンチ断面図	67
第 158 図	トレンチ掘削状況	67
第 159 図	トレンチ断面図	67
第 160 図	トレンチ掘削状況	67
第 161 図	トレンチ断面図	67
第 162 図	トレンチ掘削状況	67
第 163 図	トレンチ断面図	67
第 164 図	トレンチ掘削状況	68
第 165 図	トレンチ断面図	68
第 166 図	トレンチ掘削状況	68
第 167 図	トレンチ断面図	68

#### (第Ⅷ章 確認調査の成果（平成 25 年度）)

第 2 表	平成 25 年（2013 年）確認調査一覧表	69
第 168 図	確認調査地点位置図	70
第 169 図	トレンチ掘削状況	71
第 170 図	トレンチ断面図	71
第 171 図	トレンチ掘削状況	71
第 172 図	トレンチ断面図	71
第 173 図	トレンチ掘削状況	71
第 174 図	トレンチ断面図	71
第 175 図	トレンチ掘削状況	71
第 176 図	トレンチ断面図	71
第 177 図	トレンチ掘削状況	72
第 178 図	トレンチ断面図	72
第 179 図	トレンチ掘削状況	72
第 180 図	トレンチ断面図	72
第 181 図	トレンチ掘削状況	72
第 182 図	トレンチ断面図	72
第 183 図	トレンチ掘削状況	72

第 184 図	トレンチ断面図	72
第 185 図	トレンチ掘削状況	73
第 186 図	トレンチ断面図	73
第 187 図	トレンチ掘削状況	73
第 188 図	トレンチ断面図	73
第 189 図	トレンチ掘削状況	73
第 190 図	トレンチ断面図	73
第 191 図	トレンチ掘削状況	73
第 192 図	トレンチ断面図	73
第 193 図	トレンチ掘削状況	74
第 194 図	トレンチ断面図	74
第 195 図	トレンチ掘削状況	74
第 196 図	トレンチ断面図	74
第 197 図	トレンチ掘削状況	74
第 198 図	トレンチ断面図	74
第 199 図	トレンチ掘削状況	74
第 200 図	トレンチ断面図	74
第 201 図	トレンチ掘削状況	75
第 202 図	トレンチ断面図	75
第 203 図	トレンチ掘削状況	75
第 204 図	トレンチ断面図	75
第 205 図	トレンチ掘削状況	75
第 206 図	トレンチ断面図	75
第 207 図	トレンチ掘削状況	75
第 208 図	トレンチ断面図	75
第 209 図	トレンチ掘削状況	76
第 210 図	トレンチ断面図	76
第 211 図	トレンチ掘削状況	76
第 212 図	トレンチ断面図	76
第 213 図	トレンチ掘削状況	76
第 214 図	トレンチ断面図	76
第 215 図	トレンチ掘削状況	76
第 216 図	トレンチ断面図	76
第 217 図	トレンチ掘削状況	77
第 218 図	トレンチ断面図	77
第 219 図	トレンチ配置図	77
第 220 図	トレンチ断面図	77

第 221 図	トレンチ掘削状況	77
第 222 図	トレンチ断面図	77
第 223 図	トレンチ掘削状況	77
第 224 図	トレンチ断面図	77
第 225 図	トレンチ掘削状況	78
第 226 図	トレンチ断面図	78
第 227 図	トレンチ掘削状況	78
第 228 図	トレンチ断面図	78
第 229 図	トレンチ掘削状況	78
第 230 図	トレンチ断面図	78
第 231 図	トレンチ掘削状況	78
第 232 図	トレンチ断面図	78
第 233 図	トレンチ掘削状況	79
第 234 図	トレンチ断面図	79
第 235 図	トレンチ掘削状況	79
第 236 図	トレンチ断面図	79
第 237 図	トレンチ掘削状況	79
第 238 図	トレンチ断面図	79

## 写真図版目次

図版 1 内田遺跡第 10 次調査

- (1) 遺構検出状況（南から）
- (2) 遺構完掘状況（南から）

図版 2 内田遺跡第 10 次調査

- (1) 窪穴住居 1・2 完掘状況（西から）
- (2) 窪穴住居 2 床面遺物出土状況

図版 3 内田遺跡第 10 次調査

- (1) 掘立柱建物 1 完掘状況（北から）
- (2) 土坑 2 土器出土状況（北西から）

図版 4 内田遺跡第 10 次調査

- (1) 土坑 4 完掘状況（北から）
- (2) 土坑 4 繩文土器出土状況（北から）

図版 5 内田遺跡第 10 次調査 出土遺物

- (1) 土坑 4・5 出土繩文土器（第 7 図）
- (2) 出土石器（第 8 図）
- (3) 出土石器（裏面）（第 8 図）

図版 6 内田遺跡第 10 次調査 出土遺物

- (1) 窪穴住居 1 出土遺物（第 10 図）
- (2) 窪穴住居 2 出土遺物（第 10 図）



図版 25 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物

- (1) 土坑 17 出土遺物 (第 32 図)
- (2) 上坑 17 出土遺物 (第 32 図)

図版 26 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物

- (1) 壁穴住居 11 出土遺物 (第 34 図)
- (2) 壁穴住居 11 出土遺物 (第 34 図)

図版 27 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物

- (1) 出土石器 (第 35 ~ 37 図)
- (2) 出土石器 (裏面) (第 35 ~ 37 図)

図版 28 新免遺跡第 66 次調査

- (1) 西半部遺構検出状況 (南から)
- (2) 西半部完掘状況 (南から)

図版 29 新免遺跡第 66 次調査

- (1) 東半部遺構検出状況 (西から)
- (2) 東半部完掘状況 (西から)

図版 30 新免遺跡第 66 次調査

- (1) 壁穴住居 2 床面遺物出土状況 (西から)
- (2) 壁穴住居 2 炉完掘状況 (東から)

図版 31 新免遺跡第 66 次調査 出土遺物

- (1) 壁穴住居 1・2 出土遺物 (第 41 図)
- (2) 壁穴住居 2 出土遺物 (第 41 図)

図版 32 新免遺跡第 66 次調査 出土遺物

- (1) SP 出土遺物 (第 43 図)
- (2) SP 出土遺物 (第 43 図)

図版 33 新免遺跡第 66 次調査 出土遺物

- (1) 土坑出土遺物 (第 42 図)
- (2) 出土石器 (第 44 図)
- (3) 出土石器 (裏面) (第 44 図)

図版 34 本町遺跡第 39 次調査

- (1) 西区遺構検出状況 (南から)
- (2) 西区遺構完掘状況 (南から)

図版 35 本町遺跡第 39 次調査

- (1) 東区遺構検出状況 (南から)
- (2) 東区遺構完掘状況 (南から)

図版 36 本町遺跡第 39 次調査

- (1) 壁穴住居検出状況 (南から)
- (2) SP - 3 断面
- (3) 上坑断面
- (4) 風倒木痕 (a - a' 断面)
- (5) 風倒木痕 (b - b' 断面)

図版 37 本町遺跡第 39 次調査 出土遺物

- (1) 壁穴住居出土遺物 (第 48 図)
- (2) 風倒木痕出土遺物 (第 50 図)



# 第Ⅰ章 位置と環境

## 1. 地理的環境

豊中市は大阪市の北方に位置し、西は猪名川を介して兵庫県と接しており、旧国名では摂津国に属する。近世以前は大都市近郊の農村であったが、明治43年箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に宅地化が進み、現在では市域面積約37km<sup>2</sup>中に39万人もの人口を擁する北摂最大の住宅都市へと発展している。ここに到った背景としては、大阪市近郊であることに加え、名神高速道路や阪神高速道路などの自動車専用道路や、阪急電鉄や北大阪急行、大阪モノレールによる電車網、さらには大阪国際空港に示される陸空交通による利便性の高さが挙げられる。

一方、地形に目を転じると、豊中市は巨視的にみて北から南に向かって標高が徐々に低くなる穏やかな地形を呈しており、市内最高地点である島熊山（海拔約100m）から最も低い大島町付近（海拔1m以下）にかけての比高差はおよそ100mである。ここで地形的特徴を細かく区分していくと、おおよそ北部・中部・南部という三区分が可能であろう。北部一帯は千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる2つの丘陵地からなる。前者の千里丘陵は大阪層群でその名が知られている通りである。続いて中部一帯は主に千里丘陵から派生する中・低位段丘を中心とした通称豊中台地、最後に南部一帯は猪名川水系、天竺川、高川の沖積作用によって形成された平野部という見方ができる。

今回報告する第Ⅱ章内田遺跡は千里川上流域右岸の低位段丘上、第Ⅲ章の曾根遺跡は豊中台地南西端部にあたる開析谷に挟まれた浸食地形、南北に細長い尾根上、第Ⅳ・V章新免遺跡ならびに第VI章の本町遺跡は豊中台地北部の低位段丘上にそれぞれ立地する。

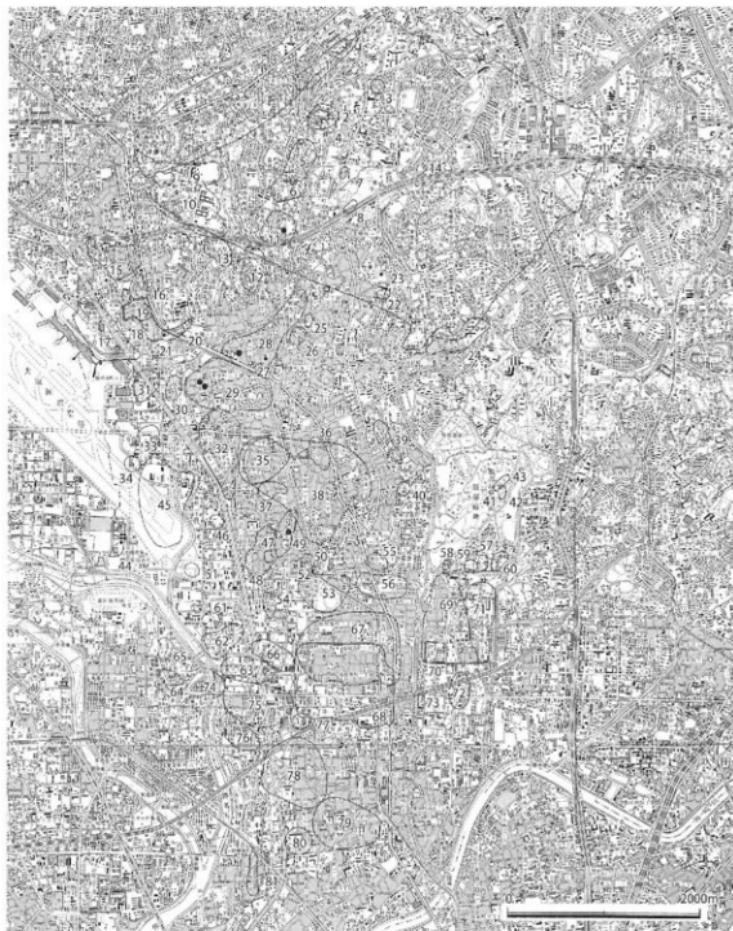
## 2. 歴史的環境

ここでは今回報告する遺跡の動向を中心に述べていく。

**内田遺跡** 内田遺跡における最古の遺構は現在のところ縄文時代中期にまで遡り、市内で縄文時代の遺構・遺物を確認した8遺跡の一つである。その後、弥生時代の遺構・遺物は確認されていないが、古墳時代後期後半（6世紀後半）に突如集落が出現する。この集落は当時千里川上流域で操業されていた桜井谷窯跡群との関連が推察されており、7世紀初頭頃、桜井谷窯跡群における須恵器生産の衰退に同調するかのように廃絶するようである。近年、第8次調査において中世の居館跡が新たに確認されたことで、内田遺跡に中世集落が所在する可能性が出てきた。今回の第10次調査地では付近の調査成果から古墳時代後期後半段階における集落関連遺構の検出が見込まれる。

**曾根遺跡** 曾根遺跡は、その初現は弥生時代中期～後期とみられ、以後中世までほぼ間断なく継続的に営まれた集落遺跡であり、千里川流域に所在する新免遺跡、本町遺跡などと同様の様相を呈する。なかでも今回の調査地点の南方約250mに位置する第1次調査地点では、弥生時代後期の竪穴住居のほか奈良時代ないし平安時代の大規模建物を含む掘立柱建物群が確認され、これ

## 2. 歷史的環境



1. 太鼓塚古墳群  
2. 野地春日古跡群  
3. 野地遺跡  
4. 有馬遺跡  
5. 有馬遺跡  
6. 氏族氏族別築安那代  
板井洋野原跡  
7. 安井谷石器點跡  
8. 利根川源流跡  
9. 開発工事跡  
10. 内田跡  
11. 丹波跡  
12. 丹波跡  
13. 北方原山山跡  
14. 板井洋野原跡  
15. 霧毛北(霧の森)遺跡  
16. 霧毛東遺跡  
17. 霧毛西遺跡  
18. 霧毛南遺跡  
19. 霧毛中遺跡  
20. 霧毛中遺跡  
21. 霧毛山古墳  
22. 霧毛山古墳  
23. 吉井古墳  
24. 墓田遺跡  
25. 全力山遺跡  
26. 新光留山古墳群  
27. 新光留山古墳群  
28. 村山遺跡  
29. 新光留跡  
30. 貴敷賀遺跡  
31. 真船遺跡  
32. 山ノ上御跡  
33. 佐野山遺跡  
34. 佐野山遺跡  
35. 佐野山遺跡  
36. 佐野山遺跡  
37. 佐野山遺跡  
38. 佐野山遺跡  
39. 佐野山遺跡  
40. 佐野山遺跡  
41. 佐野山遺跡  
42. 佐野山遺跡  
43. 大野城筑城行次配  
44. 摂田西遺跡  
45. 摂田道跡  
46. 摂田東遺跡  
47. 摂田東(大)跡  
48. 摂田東(中)跡  
49. 摂田道跡  
50. 摂田東遺跡  
51. 摂田中(大)跡  
52. 摂田東遺跡  
53. 摂田北遺跡  
54. 摂田東遺跡  
55. 摂田東遺跡  
56. 摂田道跡  
57. 摂田東遺跡  
58. 石造寺南寺  
59. 石造寺北跡  
60. 石内御跡  
61. 石内御跡  
62. 石内御跡  
63. 石内御跡  
64. 石内御跡  
65. 石内御跡  
66. 石内御跡  
67. 石内御跡  
68. 石内御跡  
69. 石内御跡  
70. 石内御跡  
71. 石内御跡  
72. 小笠原南遺跡  
73. 小笠原北跡  
74. 三井山遺跡  
75. 三井山遺跡  
76. 上津島山遺跡  
77. 上津島山遺跡  
78. 三井山跡  
79. 丹内御跡  
80. 丹江御跡  
81. 住木御跡  
82. 住木御跡  
83. 住木御跡  
84. 住木御跡  
85. 住木御跡  
86. 住木御跡  
87. 住木御跡  
88. 住木御跡  
89. 住木御跡  
90. 小笠原御跡  
91. 小笠原御跡  
92. 今内天知里  
93. 北条御跡

第1図 市内遺跡分布図

ら大型建物群は官衙または在地の富豪層の居宅とみられ、空間的に限定された立地条件にもかかわらず特異な状況が看取される。

第Ⅲ章で報告する第12次調査地は、遺跡北西部に位置し、既往の調査成果に基づくならば遺跡中心部からやや離れた弥生集落縁辺部の検出が見込まれる。

**新免遺跡** 新免遺跡は弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式期）に勝部遺跡の分村として誕生したとみられる。一般に豊中市域における弥生遺跡の動態は弥生時代中期に低地から台地上に進出する傾向がうかがえ、新免遺跡は千里川流域における好例といえる。

同遺跡は弥生時代中期と古墳時代中～後期にそれぞれ盛期を迎えるが、なかでも弥生時代中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式期）は最盛期とみられ、多数の竪穴住居と方形周溝墓からなる北摂地域有数の拠点集落が形成される。続いて古墳時代中期後葉～後期前半に迎える盛期には、遺跡中央～北部一帯に展開する居住地とともに、遺跡南部一帯には古墳群（新免古墳群）が形成される。これらの背景として、千里川上流域に展開する桜井谷窯跡群との関連が考えられ、同遺跡から確認される須恵器不良品を含んだ廃棄土坑・溝の存在は、両者の強い関連性を推察せらる。

第Ⅳ章・第Ⅴ章で報告する調査地はいずれも遺跡北西部に位置し、一帯は弥生時代中期から古墳時代にわたっての集落関連遺構が多数確認されているエリアである。

**本町遺跡** 千里川中流域に立地する本町遺跡は、弥生時代中期、隣接する新免遺跡よりやや遅れて誕生するとみられ、以後近世まで続く集落遺跡である。遺跡の盛期は古墳時代後期～奈良時代であり、古墳時代後期の集落からは須恵器不良品が多数出土することから、新免遺跡と同様に千里川上流の桜井谷窯跡群における須恵器生産との関連が考えられる。奈良時代には遺跡北中部を中心に掘立柱建物群からなる集落が確認されており、これは遺跡東方に建立され飛鳥時代（7世紀代）～平安時代にわたって営まれたとされる金寺山廃寺と何らかの関わりを有したと考えられる。

今回、第Ⅵ章で報告する第39次調査地は遺跡中央付近に所在し、調査地一帯では主に古墳時代後期の集落関連遺構が検出されている。

## 2. 歴史的環境



第2図 調査地点と周辺の地形

## 第Ⅱ章 内田遺跡第10次調査

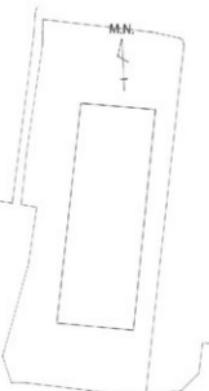
### 1. 調査の経緯

平成23年10月12日、豊中市桜の町3丁目75-1・76における共同住宅建築にかかる埋蔵文化財発掘届が提出され、同年10月26日確認調査を実施した結果、良好に遺構が残存していることが確認された。今回の建築計画により遺跡の損壊は免れないことから、事業者と協議の結果、基礎工事の範囲約327m<sup>2</sup>を対象に、平成23年12月12日から平成24年2月12日までの期間で発掘調査を実施することとなった。なお、事業者が個人であるため、一部を補助事業として実施した。

### 2. 調査の成果

#### (1) 遺跡の概要

内田遺跡は千里川西岸の中～低位段丘上、標高35～38mのなだらかな地形上に立地する集落跡を中心とした遺跡である。昭和62年(1987)の遺跡発見からこれまでに9件の本発掘調査が行われ、その結果遺跡の盛期は古墳時代後期～飛鳥時代(6世紀後半～7世紀初頭頃)であったことが判明している。府道箕面農園線よりも東方に展開する古墳時代後期～飛鳥時代の集落は、堅穴住居と掘立柱建物で構成され、千里川流域における該期の集落としては本町遺跡に次ぐ規模であったと



第3図 調査範囲図  
(1:600)



第4図 調査地位置図 (1:5,000)

## 2. 調査の成果

みられる。また、5世紀後半～8世紀代にかけて、千里川上流域一帯に展開した桜井谷窯跡群における須恵器生産に直接関与した集落であった可能性が高い。

この他に遺跡東端部の河岸段丘末端付近で実施された第2次調査では縄文時代後期の遺構と遺物が、同西端部（柴原町3丁目地内）で実施された第8次調査では幅約3mの堀を伴う中世後期段階（15～16世紀）の居館跡とみられる施設の一部が検出されるなど、他時期の集落関連遺構の存在も最近の調査によって明らかになってきている。

今回の調査地は同遺跡中央付近に位置し、付近で行われた第5次～7次調査では主として古墳時代後期～飛鳥時代の集落跡が確認されている。したがって、今回も同時期の集落跡が検出されるものと予想された。

### （2）基本層序

当該調査地における基本層序は概ね4種に大別できる。まず、現地表下の整地土を除くと、灰色系の砂質シルトが複数層存在する。これらには鉄分沈着による褐色変化、マンガン点状結核の蓄積等による耕作土特有の特徴が見られ、周辺状況や出土遺物から近世以降の耕作土であると推定される。また、調査地の一部に灰白色系の粘質シルトがあり、これらにも耕作土の特徴が認められるが、近世以降の大規模耕起時に削剥された状況が看取され、中世頃の開発にかかる堆積層と考えておきたい。

これら中～近世の開発により削平され、それ以前の堆積としてはほとんど各遺構内にのみ残存する黒褐色系のシルトであり、全体に広がる遺物包含層状の堆積は認められない。

基盤層となるのは黄灰色系の砂礫混じりシルト（～粘土）で、均質かつ堅緻である。洪積層の最上部を構成するもので、検出面の標高はT.P.+36m付近、周辺でも全ての人为的痕跡はこの基盤層上で検出されている。当該調査地内では基盤層上部は粘土質であるが数十cm下に拳大の礫を中心とした砂礫層があり、深い遺構でもその砂礫層に到達するまでの深度であることから、古代以前の耕具では掘削が困難であったことが容易に推測できる。

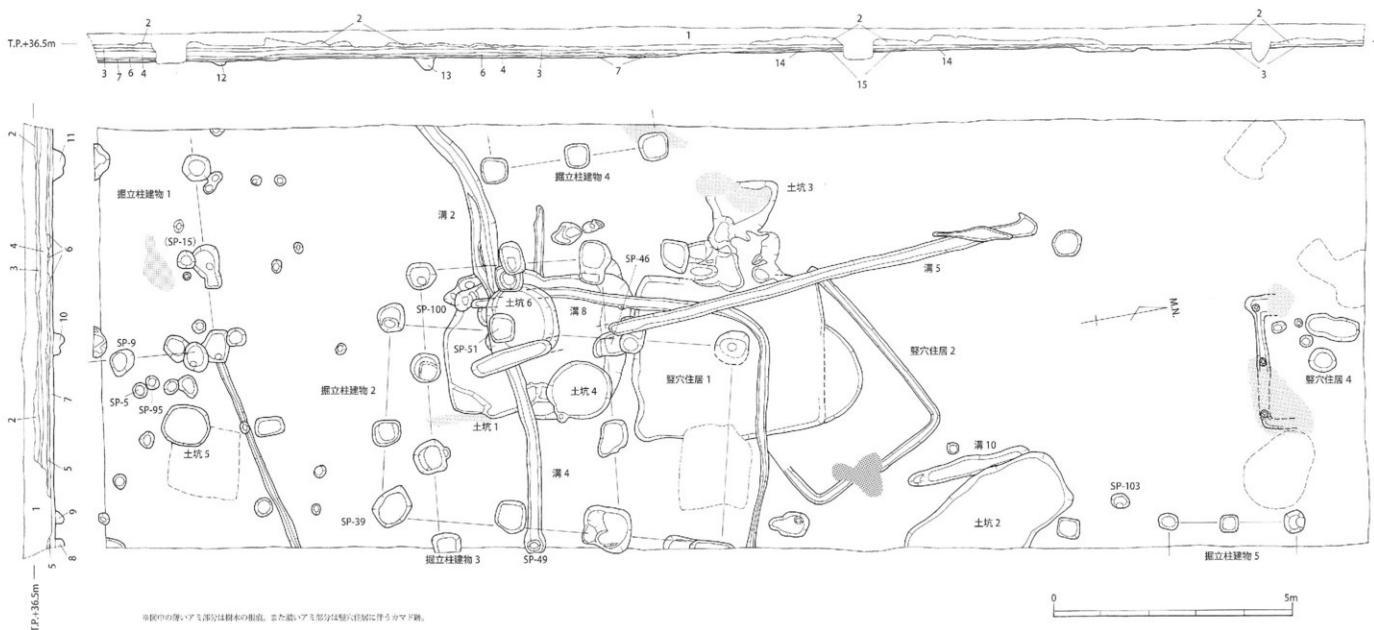
また、基盤層面には多くの樹木根の痕跡が認められ、各遺構がそれに重複して掘削されていることから、少なくとも古墳時代後期以前にはかなりの樹木が繁茂していたことがわかる。

### （3）検出した遺構と遺物

#### 縄文時代 今回の調査では土坑2基を検出した。

土坑4は調査区中央付近で検出した。直径約1.2m、深度約15cmで平面は円形を呈する。一方土坑5は調査区南端付近で検出した。直径約1mでほぼ平面円形の形状を呈し、遺存した深度約20cm程度である。両土坑ともに底面は平坦に近い状況である。土坑4埋土はにぶい黄褐色系のシルトで、基盤層の小ブロックを含む。また埋土下層からは縄文時代後期（北白川上層式併行）の深鉢が検出された（第7図）。その規模、堆積状況から廐窓土坑であろうと考えられるが、当該調査地の東側で実施された第2次調査でも同規模、同時期の土坑が検出されており、縄文時代後期に周辺が居住域となっていた可能性が高い。

また、古墳時代の遺構埋土に混入して定型的なトゥールとしての石鎌の他、ビエス・エスキエ、



## 1. 表土。

2. 褐灰色 (N3/) シルト。暗灰色 (N3/) 中～粗粒砂を 20% 程度含む。現代の耕作土。
3. 褐灰色 (10YR6/1) 梅雨期砂。褐灰色 (10YR6/1) 中～粗粒砂を 10% 程度含む。
4. 褐灰色 (10YR6/1) 梅雨期砂（シルト）。褐灰色 (10YR6/1) 中～粗粒砂と ø 5 ~ 10 mm の礫を 10% 程度含む。
5. 褐灰色 (10YR6/1) 梅雨期砂（シルト）。褐灰色 (10YR6/1) 中～粗粒砂と ø 1 ~ 5 mm の礫を 5% 程度含む。
6. 褐灰色 (10YR6/1) 梅雨期砂（シルト）。褐灰色 (10YR6/1) 中～粗粒砂を複数含む。

7. 黄褐色 (10YR7/1) ～褐灰色 (10YR6/1) シルト（～梅雨期砂）。灰白色 (10YR7/1) ～褐灰色 (10YR6/1) 中粒砂を 5% 程度含む。土器片を微量含む。羽黄褐色 (10YR6/8) に変色。

\* 3 ~ 7 は近世以前の耕作土である。

8. 褐灰色 (10YR5/1) シルト（～梅雨期砂）。褐灰色 (10YR5/1) 中～粗粒砂を 15% 程度、ø 5 ~ 10 mm のマンガン粒を 15% 程度、ø 5 ~ 15 mm の礫を 5% 程度含む。SP-1 墓土。

9. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト。褐灰色 (7.5YR4/1) 中～粗粒砂を 10% 程度含む。土器片を複数含む。SP-84 墓土。

10. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト。褐灰色 (7.5YR4/1) 中～粗粒砂を 15% 程度含む。ø 5 ~ 10 mm の基盤層ブロックとマンガン粒を 5% 程度、ø 1 ~ 5 mm の炭化土と土器片を複数含む。SP-94 墓土。

11. 褐灰色 (7.5YR4/1) シルト。褐灰色 (7.5YR4/1) 中～粗粒砂を 15% 程度含む。ø 5 ~ 10 mm の基盤層ブロックとマンガン粒を 5% 程度含む。SP-90 墓土。

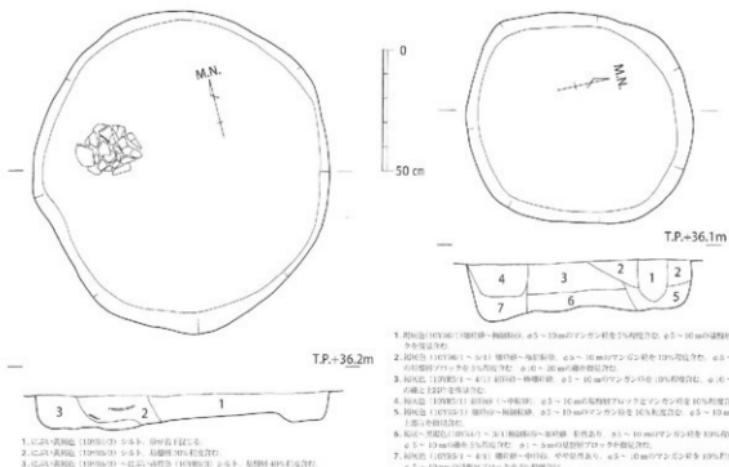
12. 褐灰色 (10YR5/1) シルト。褐灰色 (10YR5/1) 中～粗粒砂を 5% 程度含む。土器片を微量含む。SP-22 墓土。

13. 褐灰色 (10YR4/1 ～ 5/1) 梅雨期砂（シルト）。褐灰色 (10YR4/1 ～ 5/1) 中～粗粒砂を 10% 程度、ø 5 ~ 10 mm のマンガン粒と礫を 5% 程度、ø 1 ~ 5 mm の基盤層ブロックを 5% 程度含む。溝 2 墓土。

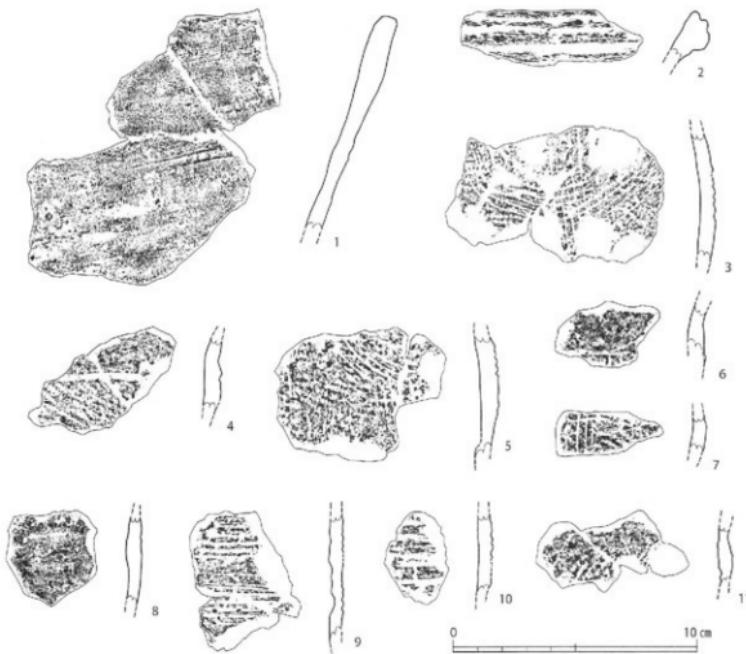
14. 底色不明。黄色 (2.5Y6/6) シルト。粗粒砂含む。耕作土。

15. 明瞭な黄色 (2.5Y6/6) シルト。粗粒砂含む。耕作土。

第5図 調査区 平面・断面図 (1:80)

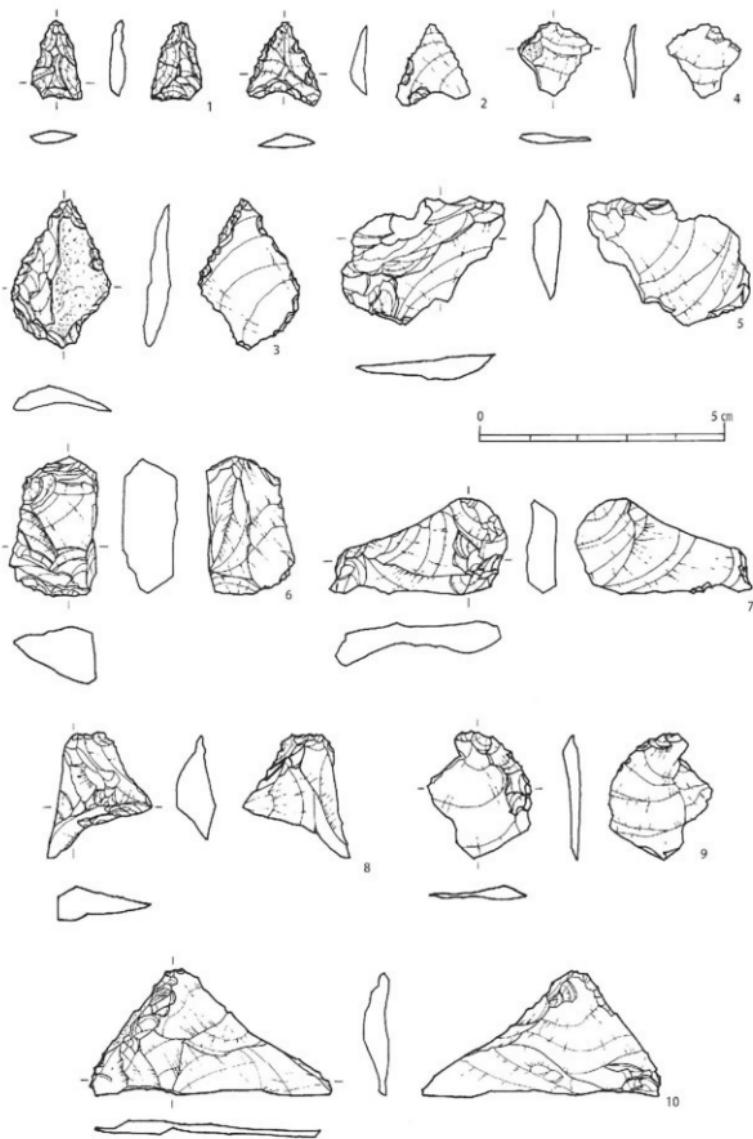


第6図 土坑4・5 平面・断面図(1:20)



第7図 土坑4・5 出土縄文土器(1:2)

2. 調査の成果



第8図 出土石器 (1 : 1)

二次加工のある剥片（第8図）が多く出土していることから、現地で石器製作が行われていたことがわかる。ビエス・エスキエは木材や骨角器等の加工に利用された可能性もあるため、竪穴住居等の建物が検出されていないものの、一定期間の定住を示唆するものとも考えられる。

**古墳時代** 今回の調査では、竪穴住居4棟、掘立柱建物5棟、土坑、溝等を検出した。

竪穴住居は耕作による削平が著しいため、遺存した深度が浅く輪郭も不鮮明なものが多かった。整形された住居の底面が耕具による凹凸をもち、基盤層表面が一様ではない部分をその範囲としてとらえると、一辺5m以下の小形住居であったと考えられる。

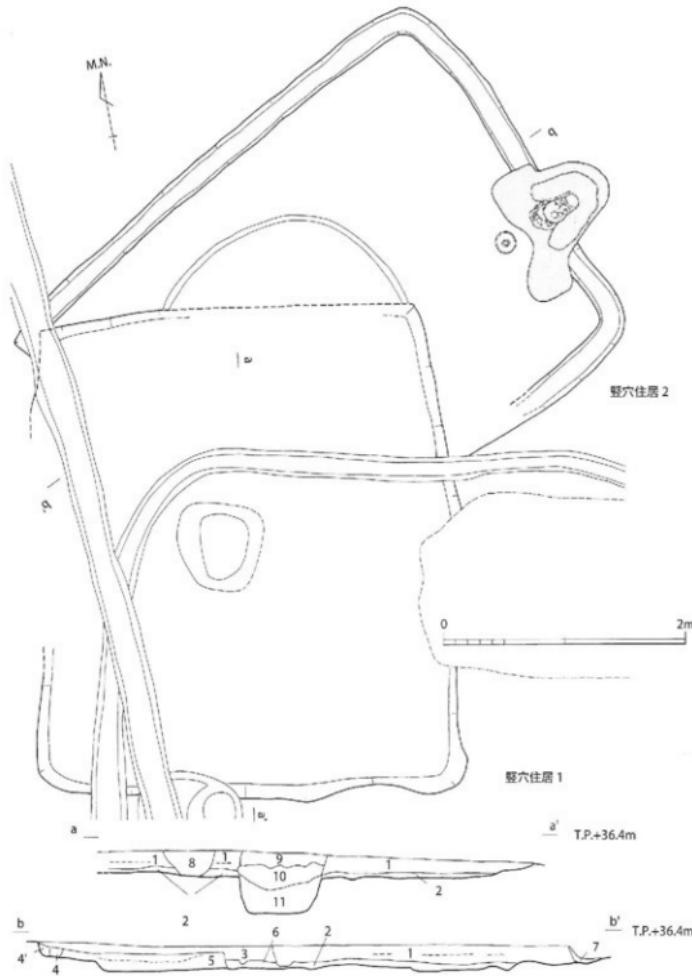
竪穴住居1は長辺ほぼ4m、短辺3.2～3.5mを測る平面長方形であり、検出面から住居基底面までの深度は15～20cmであった。主柱穴や壁溝など当該住居に帰属する施設等は確認されていない。一方、比較的遺存状況の良好であった竪穴住居2も長方形をなし、短辺3.4m、長辺4.4mを測る。住居検出面から16～22cmまで基底面に達する。竪穴住居の外郭内側には幅20cm程度の壁溝が回り、北東辺中央には造りつけのカマド（第9図スクリントーン部分）を備えている。このカマドは耕作による削平により基部付近が残存するのみでカマド上半部や煙道部分の状況は不明だが、両袖の在り方から一つ掛けのカマドとみられる（杉井健「窓の地域性とその背景」『考古学研究』第40巻第1号 1993年）。調査区北端部で検出された竪穴住居4は限られた検出範囲のため詳細は不明であるが、住居の一辺が2.9m程度しかなく、他の竪穴住居よりもはるかに小型であった。周囲に壁溝を巡らすようだが、通常の竪穴住居とは異なる機能が想定されうる。

主な出土遺物は、第10図に掲載した。1～12が竪穴住居1、14～21が竪穴住居2出土遺物である。このうち18の高環環部片は外面の一部が被熱し、竪穴住居2の造りつけカマドの手前で伏せた状態で出土していることから、もともとはカマドに据えた煮炊き具を支えるための支柱あるいは支脚として用いられていた可能性が高い。12の把手付きの土師器は竪穴住居1床面直上からほぼまとまつた状態での出土であった。11は竪穴住居1出土のハソウ、13は復元口縁部直径約8cmの短頸壺であり、竪穴住居1または同2埋上中からの出土である。19は竪穴住居2から出土した須恵器蓋のつまみ部分であり、頂部に何らかの線刻がみとめられる。ところで、第11図は移動式カマドの底部分とみられるが、竪穴住居でなく溝10からの出土であった。ただし、このカマド片が出土した溝10は竪穴住居2造りつけカマドと非常に近接した位置関係にあることは注目される。竪穴住居埋土中の出土遺物は、全体的に須恵器の割合が非常に高く、特に环身に着目すると、たちあがり高が低く、受け部付近で内側に鋭く屈曲する特徴などを有する（第10図4、6～8）ことから6世紀後半に帰属するものと考えられ、周辺での集落が盛期を迎える時期とよく一致している。

掘立柱建物は少なくとも5棟確認している。調査区南端部で検出された掘立柱建物1は2間×2間以上、調査区中央付近で検出された掘立柱建物2は梁間2間、桁行3間、同じく調査区中央付近で検出の掘立柱建物3は梁間2間、桁行3間、掘立柱建物4は2間×1間以上、調査区北端付近で検出された掘立柱建物5は2間×1間以上という状況であった。これらは竪穴住居が廃絶したのちに重複して建てられており、1辺50cmを超える方形の柱穴によって構成され、大半が掘立柱建物2と同様の梁間2間、桁行3間の建物であったと推定される。

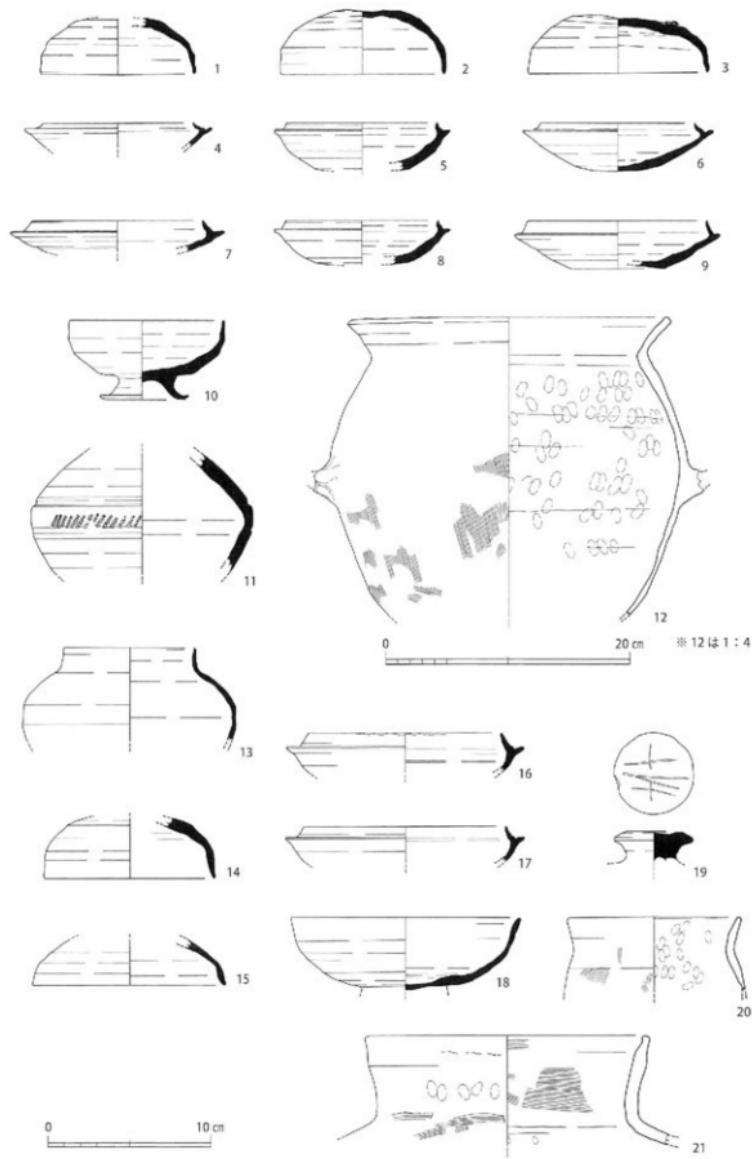
溝8は検出幅30～40cm、深度15～20cmをはかるもので、検出位置からして掘立柱建物2に伴うものと考えられる。建物を構成する柱穴の出土遺物から考えると竪穴住居廃絶とほとんど時期

## 2. 調査の成果

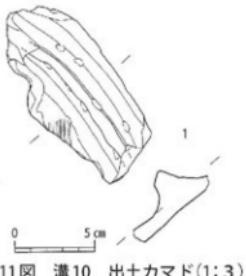


1. 周辺地 (490mE/1) シートト「～縦断面」、前田村～490mE以下の輪郭線右下付近。マンボンが周囲を多く含む。表面より上層は表面からワッカを多く含む。表面より黄褐色の(0.05mE)を2層ある。底の層は1層。
2. 周辺地 (490mE/1) 地中33cm ( $\sim$ シートト)、490mE以下の輪郭線左下付近。表面層ワッカを30%程度含む。壁は1m以上ある。
3. 和歌山地 (397mE/2) 周辺地 (397mE/2) シートト「～縦断面」、シートト以下の輪郭線右下付近。6の上部から中間部で厚い、底は薄い白岩層 (1937mE) を含む。表面層ワッカを多く含む。壁は2層ある。
4. 和歌山地 (397mE/2) 周辺地 (397mE/2) シートト「～縦断面」、シートト以下の輪郭線右下付近。6の上部から中間部で厚い、底は薄い白岩層 (1937mE) を含む。表面層ワッカを多く含む。壁は2層ある。
5. 和歌山地 (397mE/2) シートト「～縦断面」、和歌山地右下付近。底層はワッカを多く含む。表面層は白岩層 (1937mE) シートトワッカが発達している。壁は2層ある。
6. 和歌山地 (397mE/2) 周辺地 ( $\sim$ シートト)、63m～70mの標高でくわね。底層はワッカを多く含む。表面層は白岩層 (1937mE) シートトワッカが発達している。壁は2層ある。
7. にごり山地の (397mE/3) シートト「～縦断面」、490mE以下の輪郭線右下付近。薄い。
8. 和歌山地 (397mE/3) シートト「～縦断面」、490mE以下の輪郭線右下付近。表面層ワッカを多く含む。上部2箇所 (1935mE) をする。厚さ8cm。
9. 和歌山地 (397mE/3) シートト「～縦断面」、490mE以下の輪郭線右下付近。表面層の輪郭線右下付近。厚さ8cm。
10. 和歌山地 (397mE/1) シートト「～縦断面」、490mE以下の輪郭線右下付近。SP 30cm。
11. 和歌山地 (397mE/1) シートト「～縦断面」、490mE以下の輪郭線右下付近。表面層ワッカを30%程度含む。SP 30cm。

第9図 豊穴住居1・2 平面・断面図 (1:40)



第10図 壁穴住居1・2 出土遺物 (1:3)



第11図 溝10 出土カマド(1:3)

差は認められない。第14図1は溝2、同2・3は溝4、同4~6は溝5、同7~9は溝8、同10・11は溝10からそれぞれ出土した。

土坑2は調査区北側で検出された短軸約1.5m、長軸3m以上をはかる長方形の土坑であり、10~15cmの深度を有する(第12図)。埋土は褐色細粒砂を主体とし少量ながら砾・炭化物・基盤層ブロックを含むものであったが、これらとともに焼け歪んだり焼成不良の須恵器が大量に廃棄されたような状態で検出された。このことは当該時期の内田遺跡は、千里川両岸に展開する桜井谷窯跡群での須恵器生産活動と密接に関連のある集落であり、出土須恵器間に大きな時期差がみとめられることから、比較的短期間に消滅したことがわかる。図化可能な出土遺物は第13図1~10に掲載した。环身の特徴などから竪穴住居や溝など他遺構との時期差はほとんどなくほぼ同時期に営まれていたと推察される。なお第13図11・12は土坑3、13・14は土坑6出土である。

古代以降 古墳時代の遺構群に重複して、ピットや溝等が検出されている。SP-5・15・95などのピットは柱列を構成していない。また、溝5や10が掘削された方向は古墳時代建物群と異なり、やや北西方向に傾斜していて、溝間が広いことなどから、居住域ではなく耕地として利用されていた可能性が高いが、周辺での資料が未だ乏しく、古代以降の状況を明確にはできなかった。

なお、今回の報告では調査時の遺構検出番号をそのまま使用している。

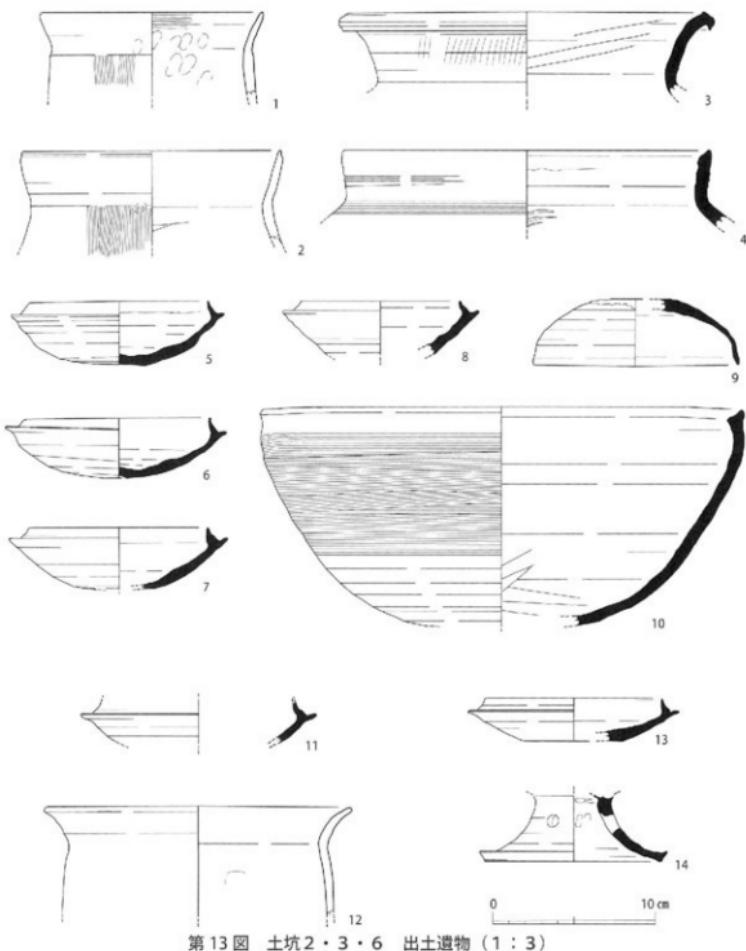
### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の集落の状況を周辺での調査成果(第5~7次調査など)を追認し、桜井谷窯跡群の生産活動の動向にあわせて集落が成立、消滅した実態を明らかにできた。

また縄文時代後期の土坑(土坑4・5)が

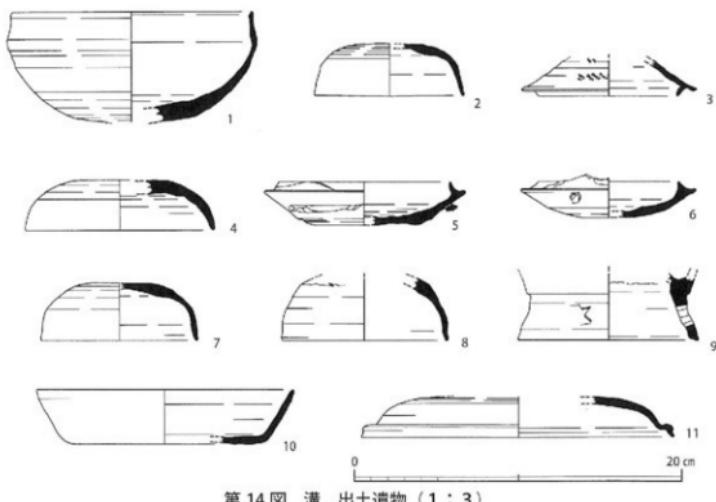


第12図 土坑2 平面・断面図(1:30)

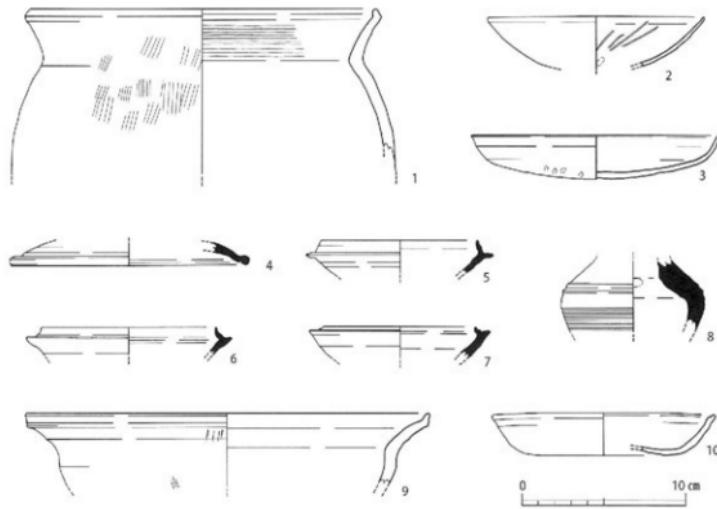


第13図 土坑2・3・6 出土遺物 (1:3)

確認されたことは、第2次調査の成果に加えて、市域北部での縄文時代集落の動向を考察する上で貴重な資料をえることができた。野畠周辺にある集落域に加えて、当該調査地周辺にも比較的広い範囲に集落が営まれていた可能性を考えられたことは大きな成果である。周辺では旧石器時代後期のナイフ形石器も採集されており、今後、千里川段丘平坦面端部での調査においては、縄文時代以前の人間活動の痕跡に留意する必要があろう。



第14図 溝 出土遺物 (1 : 3)



第15図 SP 出土遺物 (1 : 3)

## 第Ⅲ章 曽根遺跡第12次調査

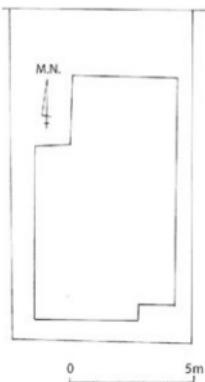
### 1. 調査の経緯

当調査地は豊中市曽根西町3丁目17-5に所在する。平成24年2月8日に提出された埋蔵文化財包蔵地の発掘届出に基づいて、平成24年3月22日に確認調査を実施したところ、地表下30cmで基盤層を検出したその上面で遺構を確認した。今回予定されている柱状地盤改良工事は地表下2mに達することから遺構面の破壊は免れないことが判明したため、事業主側と協議の結果、本発掘調査を実施することになった。調査期間は平成24年5月7日～同5月31日、調査面積は59.37m<sup>2</sup>である。調査は廃土スペースを確保するため、場内反転調査を実施した。

### 2. 調査の成果

#### (1) 基本層序

当調査地は、第1層である現代の盛土が約30～40cm堆積する。続く第2層で基盤層（橙色7.5Y6/8）シルト～極細粒砂）、遺構検出面に達することから、当調査区において基本層序は残存せず、かつ基盤層上面も削平を受けている可能性が高い。現代の盛土中から弥生時代後期・古墳時代後期の土器碎片が含まれることから、調査地はかつて弥生時代後期～古墳時代後期の遺構が存在したと推察される。当調査地点の基盤層は橙色シルト～極細粒砂であり、北側に向かって徐々にシルトか

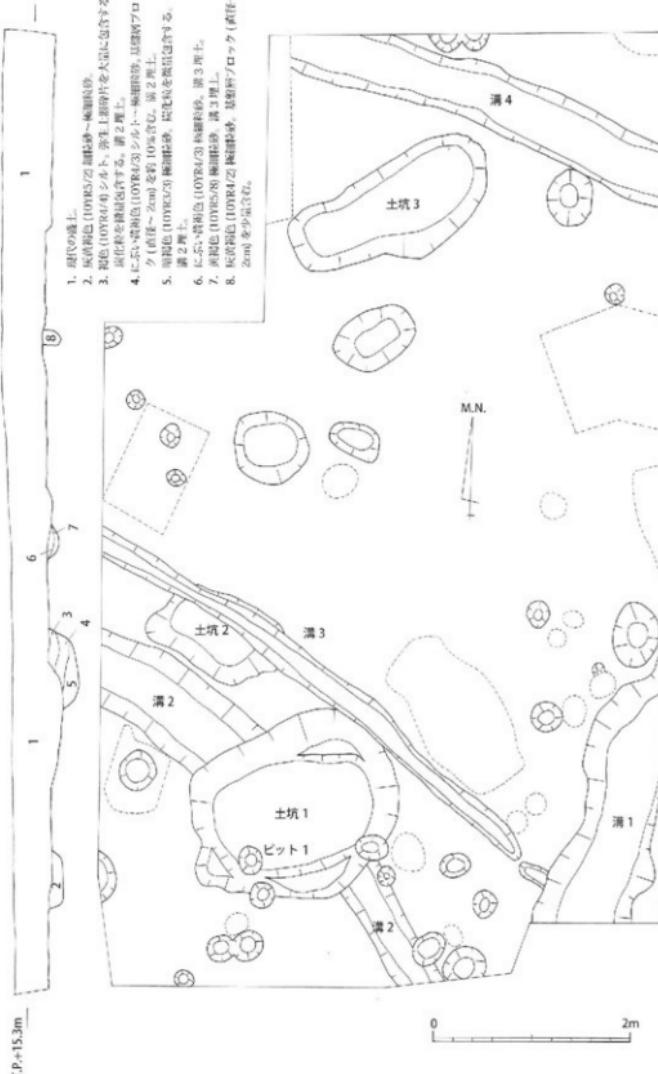


第16図 調査範囲図(1:200)



第17図 調査位置図(1:5,000)

## 2. 調査の成果



第 18 図 調査区 平面・断面図 (1:50)

ら砂質へと変化する。

## (2) 検出した遺構と遺物

今回の調査区は約 60 m<sup>2</sup> (59.37 m<sup>2</sup>) という限られた調査面積であったにもかかわらず、溝、土坑、柱穴などの遺構を検出するとともに、遺物収納箱 6 箱分の出土遺物があった。

以下では主要な遺構と出土遺物について報告する。

**溝 1** 調査区南東隅で検出した南西から北東方向にのびる溝である。検出幅 1 ~ 1.2 m、深度約 0.1 ~ 0.15 m を有し、幅約 50 cm 程度の平坦な基底面を形成する。基底面はほぼ平坦である。埋土は主に基盤層ブロックを含んだ黒褐色シルト～極細粒砂で構成される。出土遺物は散在的かつ表面が磨滅状態のものが主で、出土状況も大半が溝基底面からやや浮いた状態であったことから、これらの上器碎片は溝廃絶後の投棄あるいは流れ込みによるものとみられる。第 24 図 28 は彫形土器口縁部とみられ、口縁部直径は不明だが端部外間に刻み目を施すものである。今回図化し得なかったが、弥生時代後期の彫形土器底部片を含むことから、溝 1 の機能時期は弥生時代後期と考えられる。

**溝 2** 調査区南西部で検出した北西から南東方向にむかう溝である。溝の一部が上坑 2 の影響を受けているものの全体として弧状の形状を呈する。溝 2 の検出幅と深度は東西で様相が異なり、土坑 1 より西側で約 0.8 m・深度 0.3 m 程度、同東側で検出幅 0.45 m・深度約 0.15 m と西側へ下がっていき、かつ規模・深度ともに大きくなる。溝埋土は基本的に褐色～暗褐色極細粒砂～シルトに基盤層ブロックを含むものであり、基盤層ブロックの混入度合いの差による分層である。

溝埋土中から多量の弥生土器が碎片状で出土しており、今回の全出土量 (6 箱) のうちおよそ半数 (3 箱) が溝 2 出土であり、第 24 図 1 ~ 12 はこのうち図化し得たものである。これらの土器群は溝の基底面から約 5 ~ 15 cm 上位の深度からまとめて出土しており、溝 2 が機能停止をして埋没が始まって以降に一気に投棄された状況が考えられる。出土土器の内訳は彫形土器の割合が非常に高く全体の 8 割を超える印象を受ける。その彫形土器は外縁最終調整としてタタキを施すもの (第 24 図 1 ~ 3 など) とハケ目 (第 24 図 5) との 2 者が確認できるが、ハケ目を有するタイ



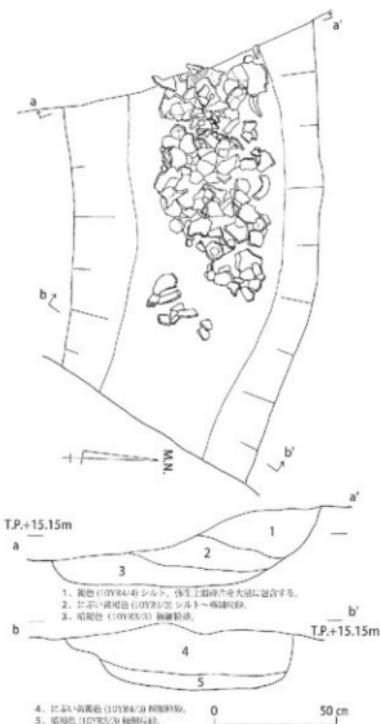
第 19 図 溝 1 平面・断面図 (1 : 20)

ブはわずかである。一方内面はナデとハケによる調整が主である。第24図10は口縁部の形状は不明であるが小型の壺形土器であり、外面は非常に丁寧なミガキによる仕上げであるとともに頸部直下に直径1~2mmの列点文を一周巡らす。11・12は高杯の脚部であり、11は幅が大きく聞くタイプであろう。溝2の機能時期は、出土遺物の特徴から弥生時代後期と考えられる。

**溝3** 調査区南部で検出した検出幅約0.15~0.2m、深度0.1m程度の溝状遺構であり、わずかに弧状の形態を呈する。溝3は溝1付近で一旦途切れるかのような検出状況であるが、溝1の影響により以東の状況は不明である。当該溝3の類例は曾根遺跡第1次調査検出の溝1・2にみられ、そこでは何らかの区画溝としての機能を想定している。また溝3の形状・規模は竪穴住居の壁溝である可能性も考えられ、その場合は両端部が未検出であるものの一辺6m以上の方形竪穴住居、または溝3が非常にゆるやかな弧状であることを考慮すれば円形竪穴住居に伴う壁溝とみることも可能だが、その場合住居の直径は10mを超える大型竪穴住居になる。いずれにせよ限られた検出状況であったため可能性の指摘にとどめておく。埋土中から弥生土器胸部片等が少量出土したが、碎片のため図化しえなかった。他遺構との重複関係から溝3の機能時期は溝1以前と考えられ、弥生時代後期またはそれ以前ということになるが、今回弥生時代中期以前の出土遺物が未確認であることから、弥生時代後期の所産とみる。

**溝4** 調査区北部で検出した検出幅0.7~1.0m、深度0.1~0.15mの溝状遺構であり、北西から南東方向にのびる溝である。埋土中から頸部に刻み目突帯を有する広口壺の一部（第24図29）、楕円形の高杯脚部片（第24図30）などが出土しており、その特徴から溝4の機能時期も弥生時代後期とみられる。なお溝4は、溝の規模や溝内における土器の出土状況とその時期が先述の溝1と似ており、しかも両溝は直交する位置関係にあることが双方の検出状況から推察されることなど、溝1・溝4は有機的関連を有していた可能性が高い。

**土坑1** 調査区南部で検出した直径2m前後の平面円形の土坑であり、最深で35cm程度の深度を有する。土坑北側と南側に段を有する。埋土は上中下の3層に区分されるが、すべて基本的に灰黄褐色極細粒砂～シルトを主体に基盤層ブロックを若干含むものであり、これら埋土間に大きな時期差や土質の差異は認められない。土坑1廃絶後は比較的短期間で埋没したとみられる。



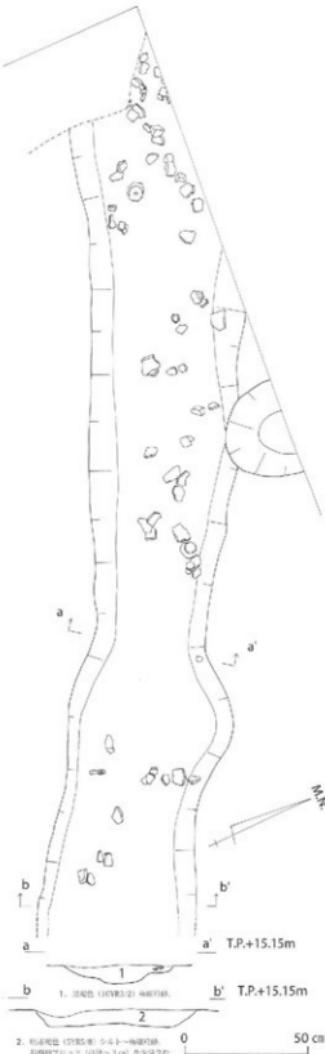
第20図 溝2 平面・断面図 (1:20)

出土遺物は土坑1南半部から弥生土器片がややまとった状態で出土しており、主な出土土器は第24図19~24に掲載した。19の口縁部片は、傾きや口縁部直径の復元にやや疑問を残すが器台の一部とみられる。20の鉢は口縁部が内湾する形状とみられ、肩部には櫛描文が施される。21~23はすべて壺形土器の底部であるが、22のように脚部を有するタイプの壺形土器（以後、「台付甕」と呼ぶ）が少数存在する。台付甕の出土例は近隣では尼崎市東浦遺跡で報告されており、それによると弥生時代後期の各種遺構から出土している（注1）。24は高杯または小型器台の脚部であろう。土坑1出土遺物は概ね弥生時代後期の範疇で捉えることが可能だが、小型器台の可能性を有する器種（第24図24）がみとめられる点は注目される。

**土坑2** 調査区中央付近、溝2と溝3の間で検出された長軸約1.4m、短軸約0.7mの平面不整形の土坑であり、約25cmの深度を有する。土坑北側は溝3と重複しているが、断面観察の結果、当該土坑が先に形成されたとみる。埋土は基本的に暗褐色シルトに基盤層ブロックを少量含むことから、機能停止後、人為的に埋め戻されたと考えられる。出土土器（第24図25~27）は基底面からやや上位のところでまとめて出土しており、観察の結果大半が壺形土器片であった。出土土器は弥生時代後期の特徴を有するため、当該土坑の機能時期も同様の時期とみられる。

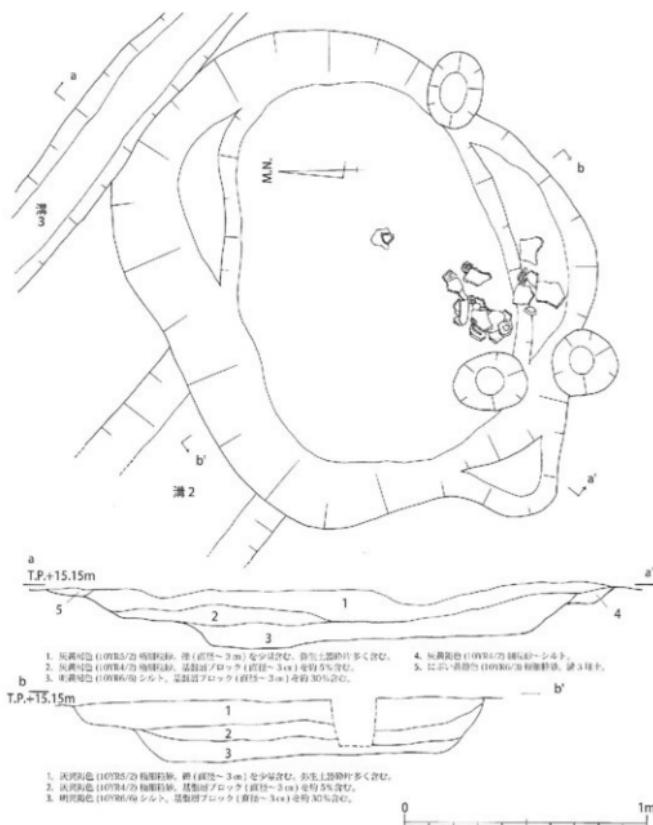
土坑2は溝2と非常に近接した位置関係にあるものの重複せず、その一方で土器群の出土状況は類似し出土土器に明確な時期差がみとめられない。このことは双方の遺構は同時期に營まれ、廃絶後もほぼ同様の埋没過程を辿ったと推察される。

**土坑3** 調査区北部、溝4の南側で検出した全長約2.2m、最大幅1.2mで、南西から北東方向に長軸を有する長楕円形の土坑である。南側の幅が拡大している箇所は観察の結果、肩が削れた結果とみられるところから土坑3本来の形状は圓丸の長方形であった可能性が高い。検出面から基底面までの深度は最大で15cm程度である。土坑3の埋土は基本的に暗褐色極細粒砂に少量の基盤層ブロックが含まれる。基底面からやや上位のところで弥生土器片が多数出

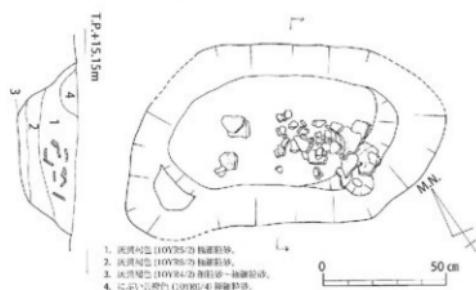


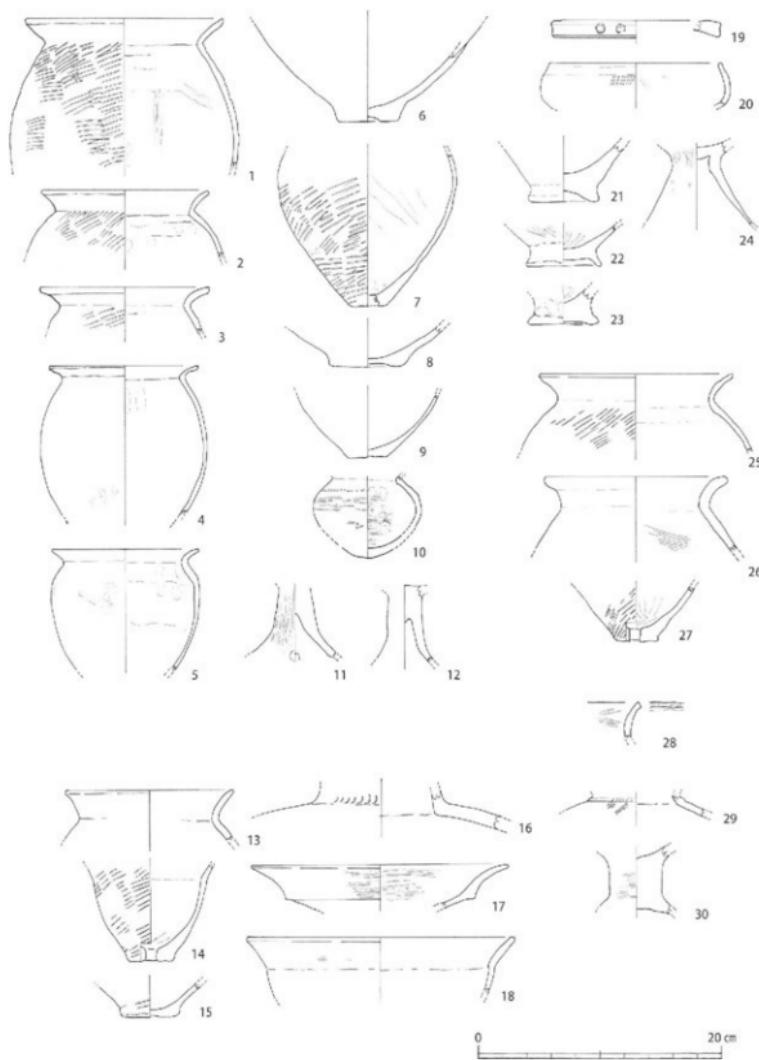
第21図 溝4 平面・断面図（1：20）  
Trench 4 Plan and Cross-section Diagram (Scale 1:20)

## 2. 調査の成果



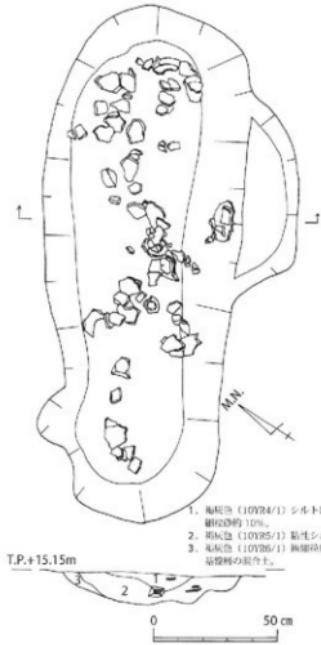
第22図 土坑1 平面・断面図 (1:20)





第24図 出土遺物 (1:4)

### 3.まとめ



第25図 土坑3 平面・断面図（1:20）

土しており、これらの碎片は土坑3が廃絶し埋没する過程で投棄されたものとみられる。

主な出土遺物は第24図13～18に図示した。13～15は壺形土器、16は広口壺の肩部～頸部とみられる。但し、その傾きや頸部の形状、肩部の厚みに違和感を覚えないわけではない。17は杯部上縁部が外反するタイプの高杯、18は鉢の大型品であろう。

なお、土坑1～3のような土器の投棄場所とみられる遺構は、既往の調査でも第1次（土坑2・5）、第3次（土坑1）、第4次（土坑2・3・6）など複数事例確認されており、弥生時代後～終末期の曾根遺跡においては通常の遺構のようである。

その他の遺構 上述の溝・土坑の他に柱穴・ピットを合計30基程度検出した。このうち柱穴は調査区南西部を中心に確認しているが、調査範囲のなかで同一建物とみられる柱穴の抽出はできず、これらは調査区外に対応する柱穴が存在するとみられる。柱穴・ピットの大半は弥生時代後期とみられるが、このうち調査区南端付近検出のピット1では埋土中に古墳時代後期頃の須恵器片を含んでおり、調査区内に少数ながら古墳時代後期の遺構が存在することも確認された。なお今回調査で古墳時代の遺構は当該ピットのみであった。

### 3.まとめ

今回の調査では限られた調査面積であったにもかかわらず主に弥生時代後期の遺構とともに各種遺構から弥生土器が豊富に出土した。なかでも溝2・土坑2出土土器群はその出土状況から同時期の産物とみてよく、曾根遺跡における当該時期の良好な一括資料が提供されたとみる。今回検出された各遺構の時期は概ね弥生時代後期の範疇に収まるが、そのなかで第24図24のような小型器台のような土器の出土は注目される。一般に小型器台は庄内式期から登場する器種であり、土器群の大半が弥生時代後期の所産のなかにこうした庄内式期の特徴がわずかながらもみとめられるということは庄内式期の兆候が認められる時期、つまり今回検出の各種遺構は弥生時代後期の後半段階、庄内式期直前段階という時期的な評価が可能ではないか。

注意すべきもう一点は、今回はピット1基だったとはいえ古墳時代後期の遺構を検出したことである。これに重機掘削中に古墳時代後期の須恵器片が確認されている事実も考慮するならば、調査地一帯に当該時期の集落関連遺構も存在する可能性が非常に高い。

以上のことから今後周辺の確認調査、本発掘調査の際には上記課題を踏まえる必要があろう。  
(注1)『2 東浦遺跡』『尼崎市埋蔵文化財調査年報 平成18年度一塚口城跡第130次調査、東浦遺跡第17次調査の概要』2012尼崎市教育委員会

## 第IV章 新免遺跡第65次調査

### 1. 調査の経緯

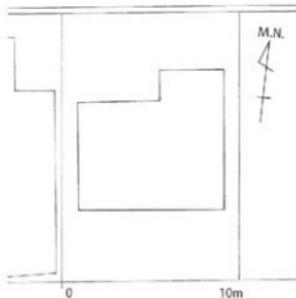
平成24年4月16日、豊中市玉井町3丁目46における個人住宅建築にかかる発掘届が提出され、同年4月19日確認調査を実施した結果、良好に遺構が残存していることが確認された。今回の建築計画により遺跡の損壊は免れないことから、事業者と協議の結果、基礎工事の範囲約70.5m<sup>2</sup>を対象に、平成24年5月21日から平成24年6月30日までの期間で発掘調査を実施することとなった。

### 2. 調査の成果

#### (1) 遺跡の概要

新免遺跡は阪急宝塚線豊中駅の西～南西側一帯に広がる弥生～古墳時代の集落を中心とした遺跡であり、東西約800m、南北400m以上の規模を有する。過去に実施された64件の本発掘調査では、縄文時代早期から近世に至る複合遺跡であることが判明している。遺跡の盛期は弥生時代中～後期、古墳時代後期の2時期みられ、なかでも弥生時代中期集落は竪穴住居20基以上、方形周溝墓を20基程度検出しており、その検出状況からして千里川流域における中核的な弥生集落（拠点集落）とみられている。

しかしながら、既往の調査の大半は個人住宅新築工事を契機とする小規模調査のため調査面積が



第26図 調査範囲図 (1:300)



第27図 調査地位置図 (1:5,000)

## 2. 調査の成果

狭小であり、しかも現在市内最多の本発掘調査件数の割には環濠の有無など、弥生時代の拠点集落としては不明瞭な点が多い。

今回の調査地は千早川の河岸段丘を控えた遺跡西側に位置し、既往の調査により付近では弥生時代中～後期、古墳時代後期とともに遺構が濃密に分布するエリアであることが判明しており、今回の調査地も同様の成果が見込まれた。

### (2) 基本層序

当該調査地における基本層序は概ね4種に大別できる。まず、現地表下の整地土、搅乱土を除くと、灰色系の砂質シルトがあり、焼土の小塊や炭化物を多く含む。調査地が旧豊中グラウンドの跡地であり、市域でも初期の住宅地に該当することから、第二次世界大戦前の開発時前後の整地層であろうと考えられる。また、この直下には灰褐色系の砂質土層があり、近世～近代にいたる耕作土と推定できる。平面図には図化していないが耕作直下に同様の埋土を持つ浅い溝が一定の間隔をあけて並行するのを検出しており、出土遺物から中世に遡る可能性がある。

遺構検出面の直上には遺構埋土同様の黒褐色系シルトが被覆しており、弥生時代の遺物を包含している。しかしながら、段丘平坦面での自然の営為による遺物包含層の形成は想定し難く、竪穴住居等、何らかの遺構が重複していて識別が困難なため、単一の層序として認識してしまった可能性が高い。

基盤層は黄灰色系のシルト及び砂礫で構成され、洪積層上部のシルト層である。他の段丘平坦面に展開する遺跡群同様、各遺構の底面は深くても概ねこの砂礫上面にとどまっている。基盤層面は標高T.P. + 20.7m前後である。

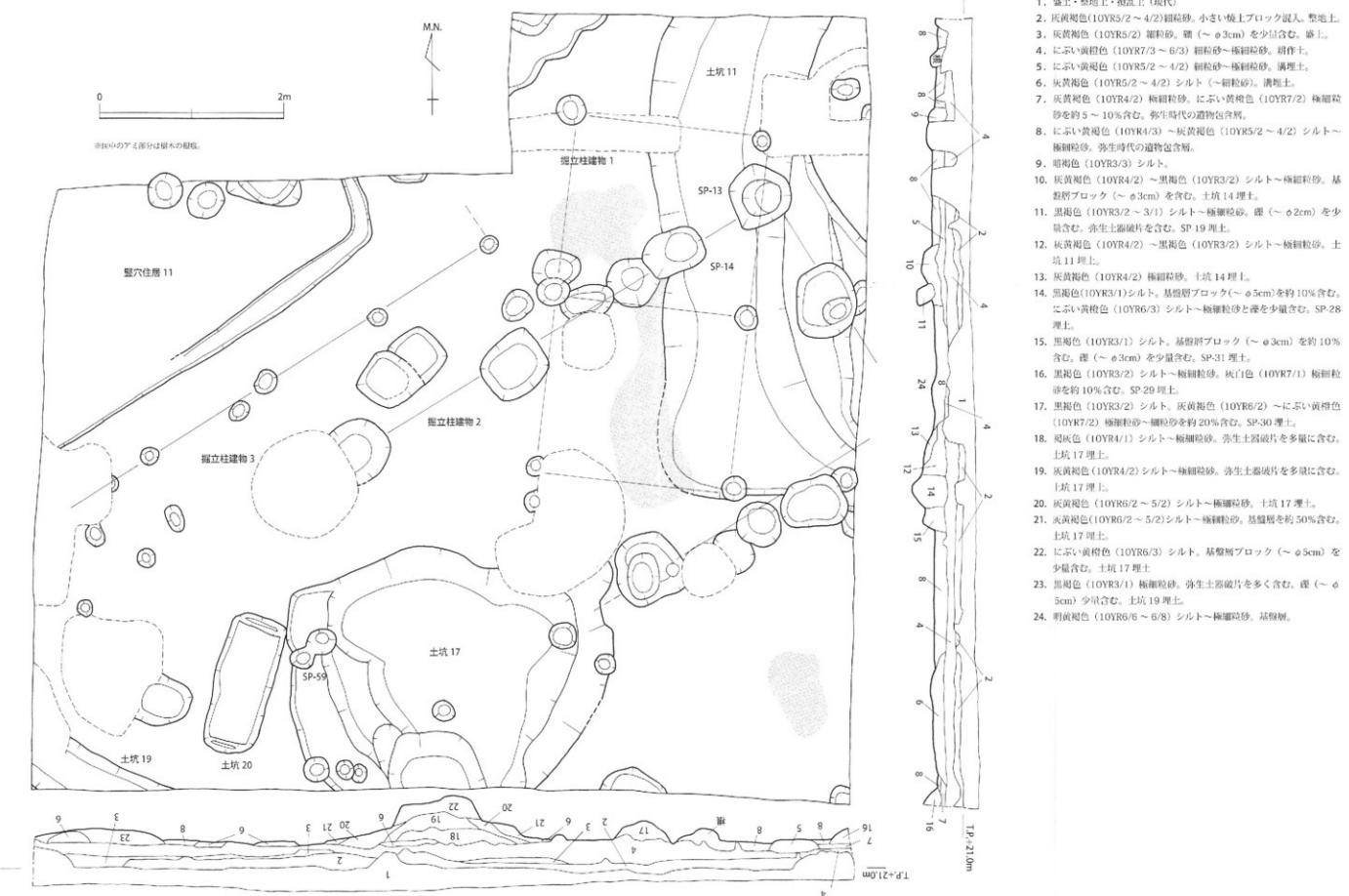
### (3) 検出した遺構と遺物

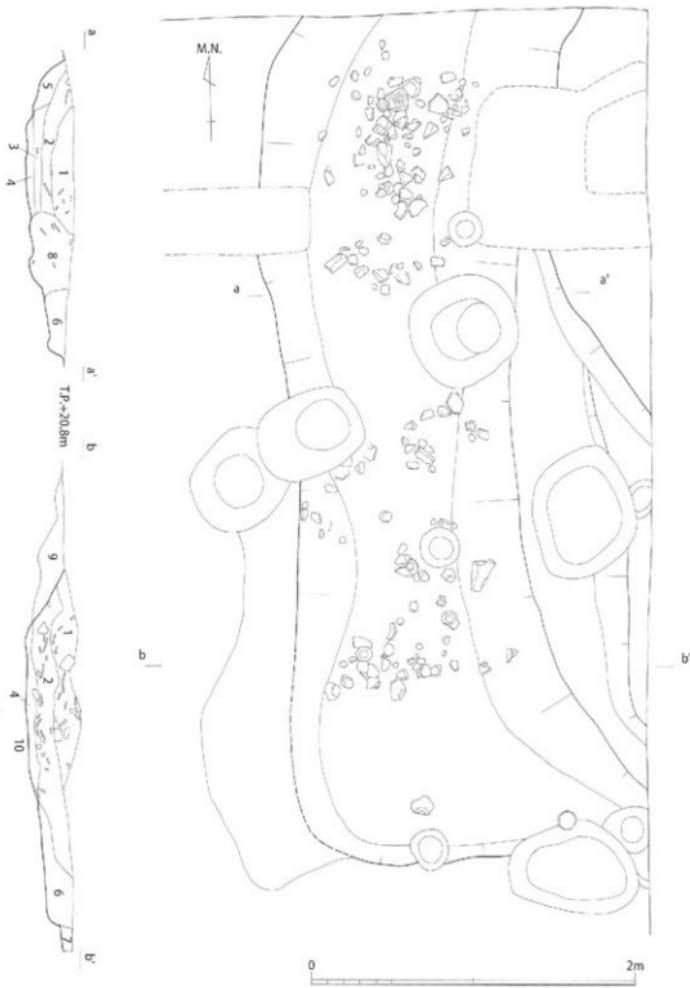
**弥生時代** 今回の調査では、形状や想定される機能は一定ではないが、土坑状の遺構を検出した。出土遺物から各土坑とも概ね畿内第IV様式期に該当するものと考えられる。

まず、調査区西部で検出された土坑11（第29図）であるが、当初は複数の遺構が重複しているように看取されたため土坑としたが、調査の進捗にしたがって溝状の形状を呈することがわかった。幅は2m前後、遺存した深さは約30cmを測る。やや円弧を描きながら東へ屈曲するが、円弧の内側は数段に落ち込む複雑な形状になっていて、あるいは数次にわたる再掘削が行われている可能性がある。また、南西角が直角に近い形状となっているのは、基盤層上面にあった樹木根の痕跡を遺構埋土と認めたものと考えられ、本来の遺構としてはもう少し素直に円弧を描いて東進していたとする方が妥当かもしれない。周辺での調査で同時期の方形周溝墓が検出されているので墓の周溝とも考えられるが、土器の出土状況は集落内の廐棄土坑と同様の状況であり、特殊な状況は看取できない。ここでは竪穴住居周囲の溝あるいは周溝墓いずれの可能性も考えておきたい。主な出土遺物は第31図に掲載しており、先述の通り畿内第IV様式期の土器が多数出土している。

土坑19も調査地南西端で検出された溝状の遺構であるが、詳細は不明である。

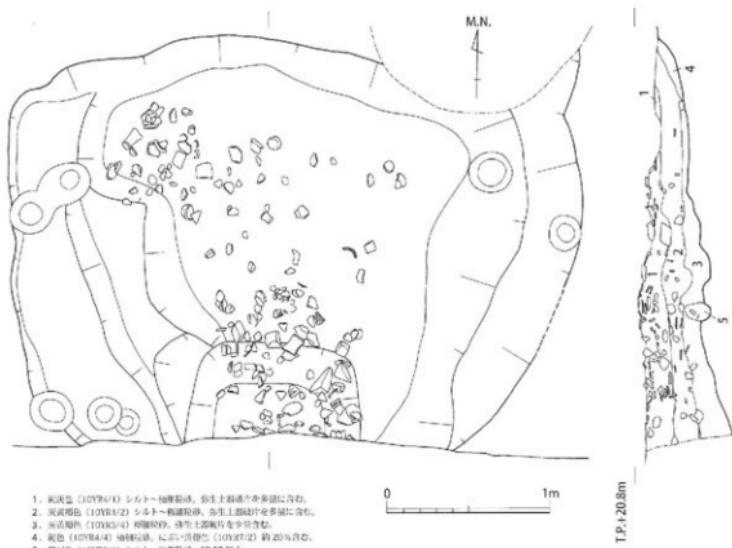
土坑17（第30図）はその一部が調査区外に達するものの検出状況からすり鉢状の形状が考えられる。遺構埋土の上層から下層にいたるまで時間の経過とともに土器等が破片となって廐棄され、





1. 黒褐色 (10YR3/1) シルト、灰岩混色 (10YR4/2) 砂礫層を含む約20%含む。砂生土砂礫層を多量に含む。SK-11 壁上。
2. 黒褐色 (10YR3/2) シルト、灰岩混色 (10YR5/2～4/2) 砂礫層を含む25%含む。壁 (~ 6.5 m) と砂生土砂礫層を含む。(より少なし) SK-11 壁上。
3. 黒褐色 (10YR3/2) シルト、灰岩混色 (10YR5/2～4/2) 砂礫層を含む25%含む。壁 (~ 6.5 m) と砂生土砂礫層を含む。(より少なし) SK-11 壁上。
4. 黄褐色 (10YR4/2) 砂礫層。砂質層を含む約25%含む。壁 (~ 6.5 m) SK-11 壁上。
5. 黄褐色 (10YR3/2) 砂礫層～シルト、灰岩混色 (10YR7/2) 砂礫層を含む約50%含む。壁 (~ 6.5 m) 少量含む。SK-11 壁上。
6. 二回目 (10YR3/2) シルト～細粒砂層。壁 (~ 6.5 m) 少量含む。SK-11 壁上。
7. 細粒砂 (10YR3/2) シルト～細粒砂層。灰岩混色を含む約5%含む。SK-11 壁上。
8. 黄褐色 (10YR3/1～3/2) 砂礫層、灰岩混色 (約 6.5 m) 少量含む。灰岩混色を含む。SK-13 壁上。
9. 砂の層。
10. 灰岩混色～黄褐色 (10YR6/6～5/6) シルト。大小様々な砂礫層を含む。粘性層。

第29図 土坑11 平面・断面図 (1:30)



第30図 土坑17 平面・断面図 (1:30)

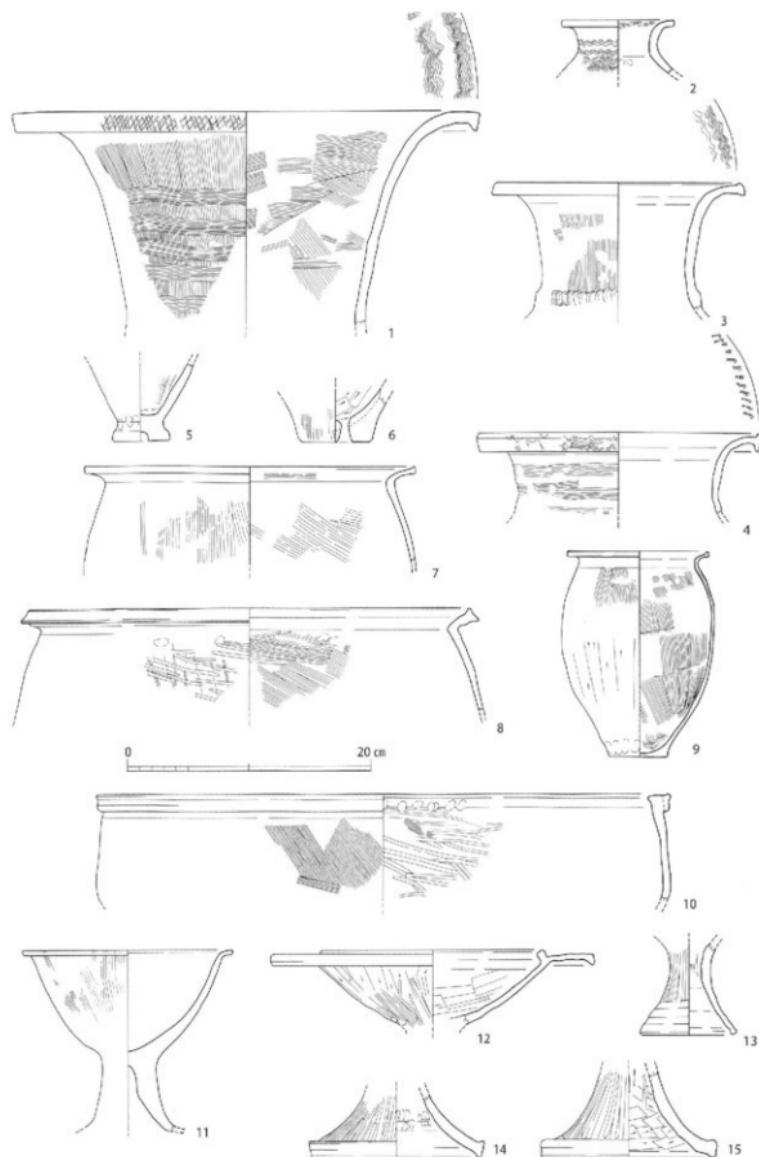
最終的に一気に埋め戻された状況が確認された。この廃棄土坑としての土坑17の存在が直近にある先述した土坑11を住居の周囲の溝と考える根拠とすることができるかもしれない。主な出土遺物は第32図に掲載した。

土坑20(第33図)は長方形で短辺60cm長辺1.5m、遺存した深さ15cmを測る。底面には底板を水平に置くための整地層が薄く認められ、また底面の短辺側にはそれぞれ細い溝が掘りこまれておらず、小口板をはめこむための窪みであろうと考えられる。その形状からおそらく木棺を伴う墓坑であることが推定できるが、単独であり周囲を溝で囲まれていないために周溝墓の主体部とは考え難い。周辺での類例の蓄積を待ってその機能を再考したい。

出土遺物については各構造や遺物包含層等から、土器とともに石器が出土している。中期に特徴的な形態をもつ石鏸4点(第35図1~4)のほか、ピエス・エスキエや剥片が多い。市内の他の遺跡でも縄文時代から弥生時代にかけてかなりの量が出土するピエス・エスキエについては、対向する辺に階段状剥離を伴うことから、木材等の加工に挟み込むくさびとしての機能が推定されているが、あまり注目されていないトゥールであり、今後の研究の進捗が期待される。

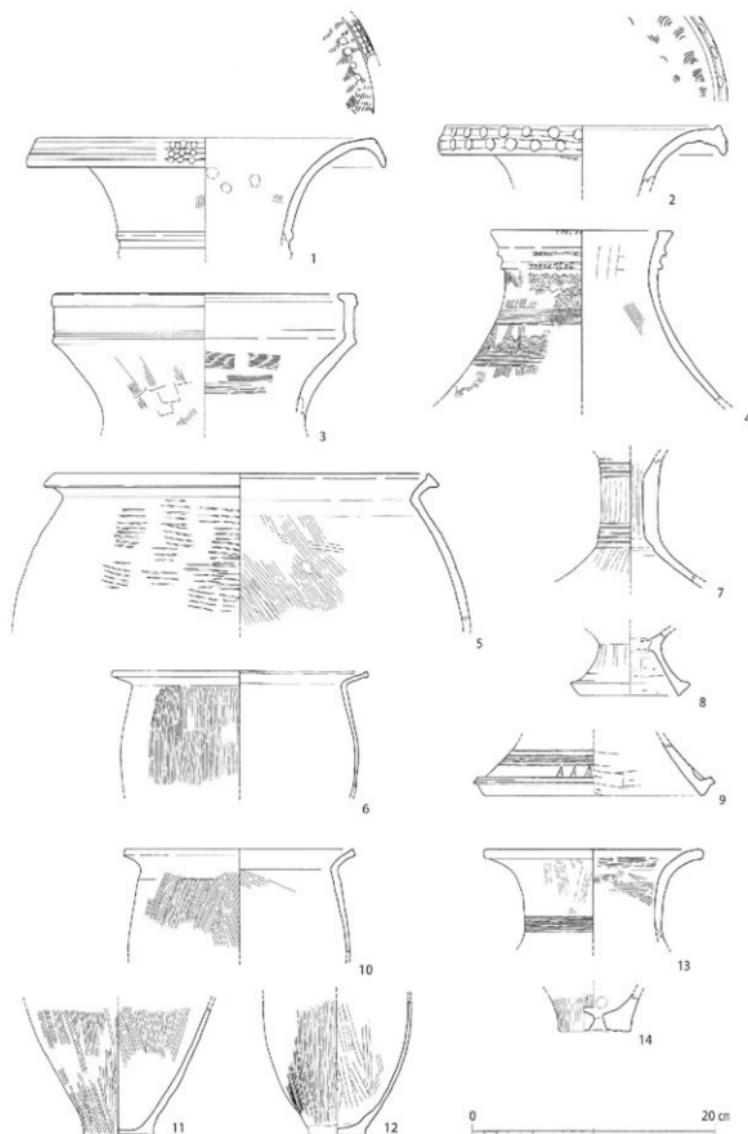
また、今回の調査では石庖丁も4点(第37図)出土しており、段丘直下に水稲耕作地を営んでいたことを示唆している。石材は北摂山地や猪名川流域以西で産出される堆積岩である。

**古墳時代** 今回の調査では竪穴住居1棟、掘立柱建物3棟を検出した。出土した須恵器からいすれも6世紀前半の時期に該当するものと考えられるが、竪穴住居が掘立柱建物にやや先行する。



第31図 土坑11 出土遺物（1：4）

2. 調査の成果



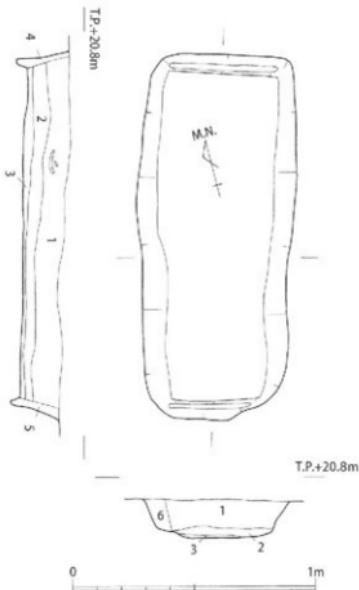
第32図 土坑17 出土遺物 (1:4)

調査区東部で検出した掘立柱建物1は梁間1間、桁行2間の小形建物である。同じく調査区東部検出の掘立柱建物2は掘立柱建物1と重複関係であるが両者は主軸が異なる。梁間2間、桁行3間以上で、柱穴の規模が1辺60cmを超える大規模なものである。柱穴埋土の状況から、建て替えが行われている可能性も考えられる。竪穴住居11は方形住居で壁溝を伴う。その外郭に並行して検出された掘立柱建物3は、柱列のみが検出されていて、建物の角を特定できていない。竪穴住居との距離(約60cm)、柱穴が小規模であることを勘案すると、竪穴住居11が壁を持つ上部構造で、その軒を支える柱列として捉えることができる。竪穴住居11の埋土からは完形の須恵器環(第34図1・3)が出土している。

なお、今回の報告では調査時の遺構検出番号をそのまま使用している。

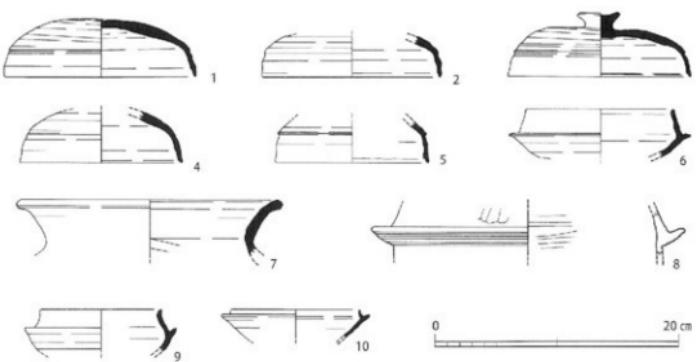
### 3.まとめ

今回の調査では、古墳時代後期の集落の状況を周辺同様に確認できたことに加えて、弥生時代中期の遺構・遺物を数多く検出できた。ただし、土坑11の機能や土坑20に見られる墓坑の存在は特異であり、今後の周辺での調査成果を注視しながら、考察していく必要があろう。

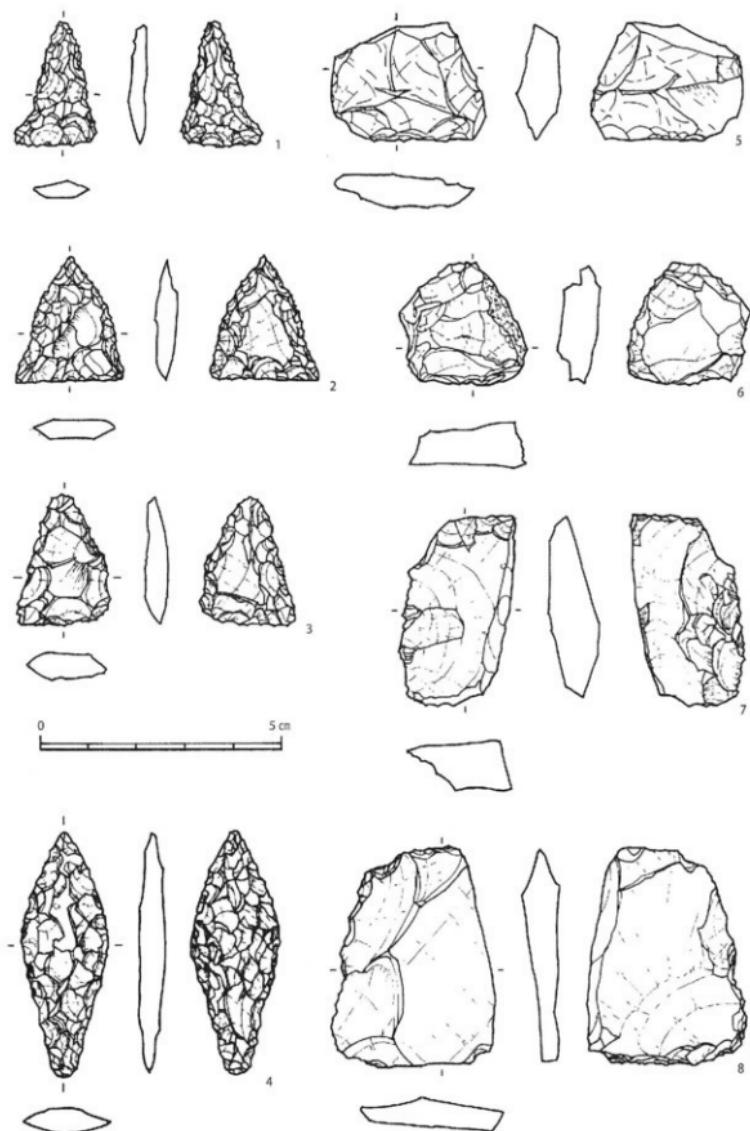


1. 黒褐色(10YR4/2)シルト、黒褐色(10YR3/1)粘土鉱物含む20%、灰・黄褐色(10YR6/3)細砂含む(25%:C)、厚さ5cm) 少量で、表面付近。
2. 黄褐色(10YR4/2) 黃褐色(10YR3/1) 黃褐色シルト、粘土鉱物含む、薄い層で、厚さ2cm) 多くある。
3. 黑褐色(10YR4/2) 黃褐色シルト、粘土鉱物含む、薄い層で、厚さ2cm) 多くある。
4. 黄褐色(10YR4/2) シルト、粘土鉱物シロッパック(1~2cm) 西壁に含む、粘土鉱物含む。
5. 黑褐色(10YR4/2)~3/2) シルト、粘土鉱物シロッパック(1~2cm) 白色に含む、粘土鉱物含む。
6. 黑褐色(10YR4/3) シルト・粘土鉱物、ビニール黒褐色(10YR3/2) 黃褐色含む約15%含む。

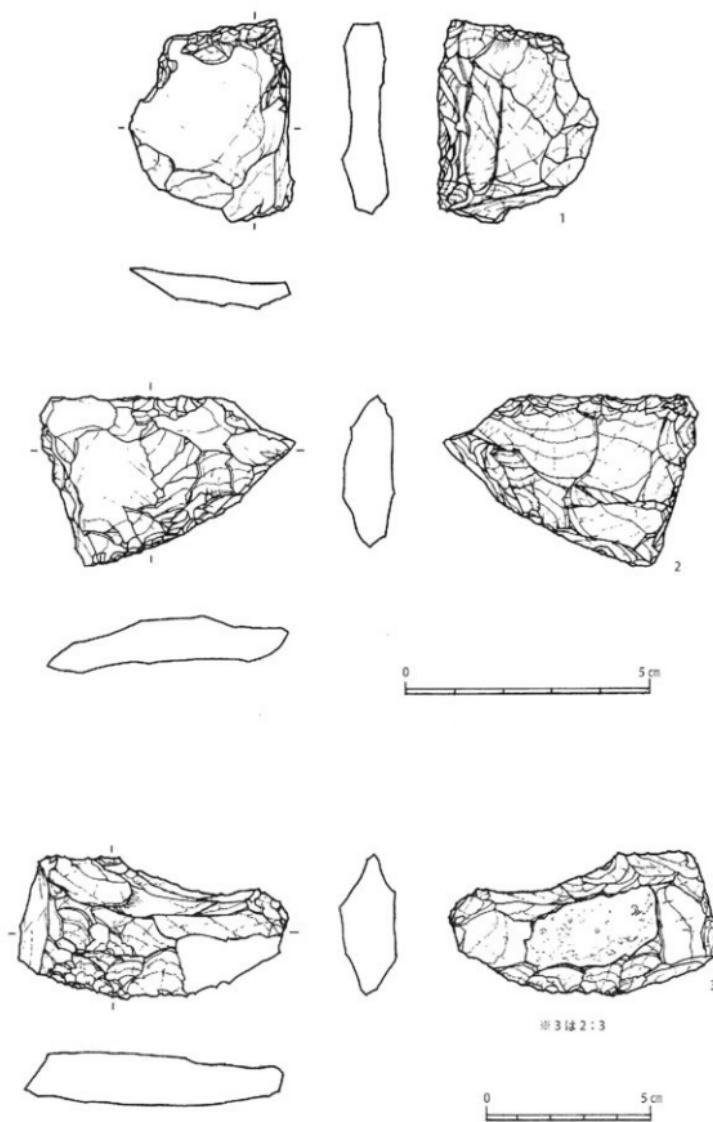
第33図 土坑20 平面・断面図(1:20)



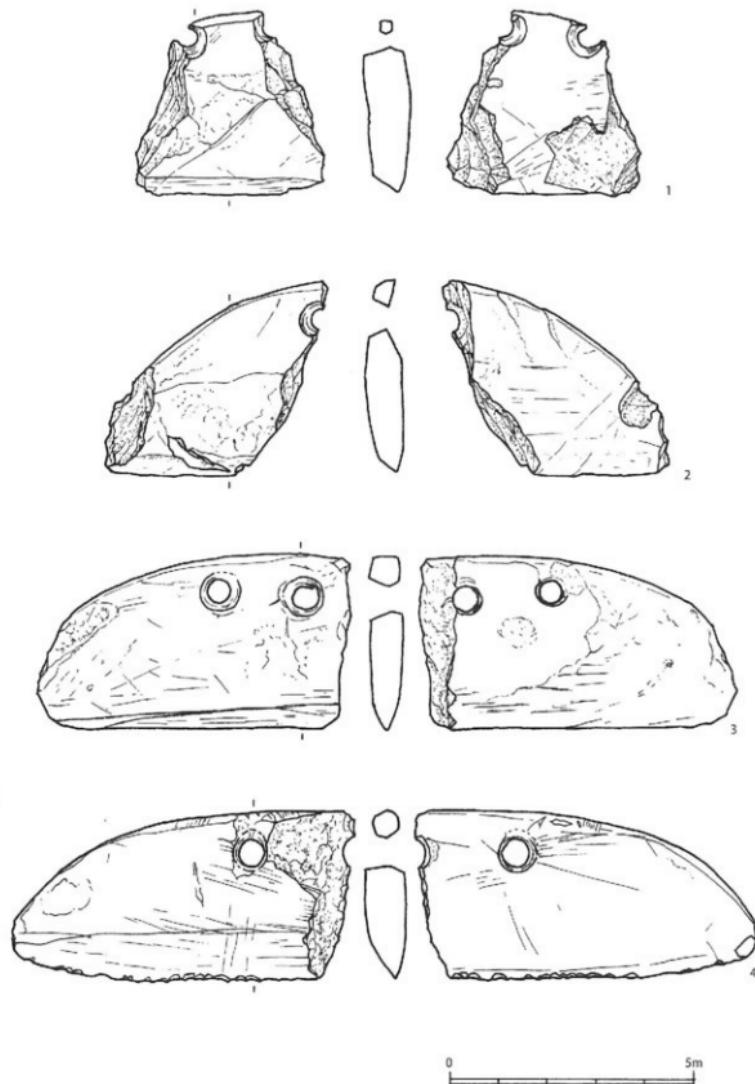
第34図 竪穴住居他 出土遺物(1:4)



第35図 出土石器1 (1:1)



第36図 出土石器2 (1:1)



第37図 出土石器3 (1:1)

## 第V章 新免遺跡第 66 次調査

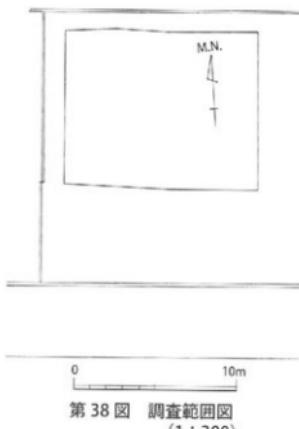
### 1. 調査の経緯

平成 24 年 12 月 4 日、豊中市玉井町 3 丁目 24-1・24-2 における個人住宅建築にかかる発掘届が提出され、同年 12 月 13 日確認調査を実施した結果、良好に遺構が残存していることが確認された。今回の建築計画により遺跡の損壊は免れないことから、事業者と協議の結果、基礎工事の範囲約 120 m<sup>2</sup>を対象に、平成 25 年 6 月 3 日から平成 25 年 8 月 10 日までの期間で発掘調査を実施することとなった。

### 2. 調査の成果

#### (1) 遺跡の概要

新免遺跡は阪急宝塚線豊中駅の西～南西側一帯に広がる弥生～古墳時代の集落を中心とした遺跡であり、東西約 800 m、南北 400 m 以上の規模を有する。過去に実施された 65 件の本発掘調査では、縄文時代早期から近世に至る複合遺跡であることが判明している。遺跡の盛期は弥生時代中～後期、古墳時代後期の 2 時期みられ、なかでも弥生時代中期集落は堅穴住居 20 基以上、方形周溝墓を 20 基程度検出しており、その検出状況からして千里川流域における中核的な弥生集落（拠点集落）とみられている。



第 38 図 調査範囲図  
(1 : 300)



第 39 図 調査地位置図 (1 : 5,000)

## 2. 調査の成果

しかしながら、既往の調査の大半は個人住宅新築工事を契機とする小規模調査のため調査面積が狭小であり、現在市内最多の本発掘調査次数の割には環濠の有無など、弥生時代の拠点集落としては不明瞭な点が多い。

今回の調査地は千里川の河岸段丘を控えた遺跡西側に位置し、既往の調査により付近では弥生中～後期、古墳後期ともに遺構が濃密に分布するエリアであることが判明しており、今回の調査地も同様の成果が見込まれた。

### (2) 基本層序

当該調査地における基本層序は概ね 3 種に大別できる。現地表下の整地上、搅乱土を除くと、直下に灰黄褐色系の砂質シルトがあり、近世～近代の耕作土と考えられる。当該調査地は、第 65 次調査同様に旧豊中グランド跡地、その後、初期の住宅地として開発された範囲内にあり、その当時の造成にかかる堆積土も存在したと考えられるが、旧建物の解体時に搅乱されて層序として特定することができなかった。

また、第 65 次調査同様に黒褐色系のシルトに遺物を包含する層序が認められるが、遺構として認識できなかっただけで、自然の営為によるものとは考え難い。古墳時代の開発行為による整地層と考えることも可能ではあるが、現状では不明である。

基盤層は段丘平坦面に特徴的な黄灰色系のシルト及び砂礫で構成され、洪積層上部のシルト層である。ここでも他の段丘平坦面に展開する遺跡群同様、各遺構の深度は概ねこの砂礫上面にとどまっている。基盤層面は標高 T.P. + 20.6m 前後である。

### (3) 検出した遺構と遺物

**弥生時代** 今回の調査では明確な遺構としては竪穴住居 1 棟（竪穴住居 2）を検出した。

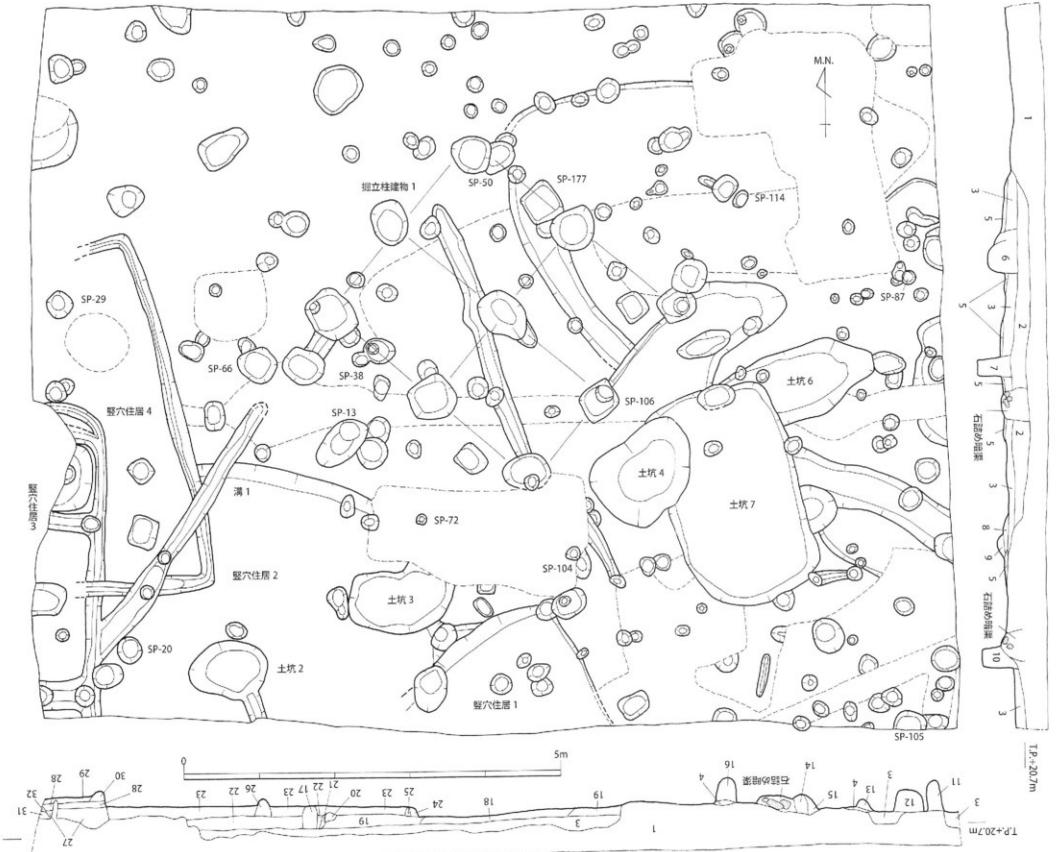
現代の搅乱や古墳時代の遺構によって外形が乱され、明瞭ではないが直径 6m 弱の円形住居と考えられる。中央に長径約 1m を測るか（土坑 2）を備える。かには南東方向へ伸びる排水溝が付随し、直近には床面に直立した状態で粗製の甕（第 41 図 4）が据えられていた。まっすぐ立ち上がる胴部とゆるやかに外反する口縁部を有し、畿内第Ⅳ様式期に該当するものと考えられる。他に第 41 図 3・5～7 が出土している。

他にも同時期の遺物が出土しているが、確実に該期の遺構と特定できるものはなかった。SP - 20 はこの住居の主柱穴の可能性がある。

土器の他に、第 44 図に示すような石器が出土している。第 44 図 1 は竪穴住居 3、同 2 は竪穴住居 2、同 3 は SP - 64、同 4 は SP - 104、同 5 は土坑 2、同 6 は土坑 6 からそれぞれ出土した。

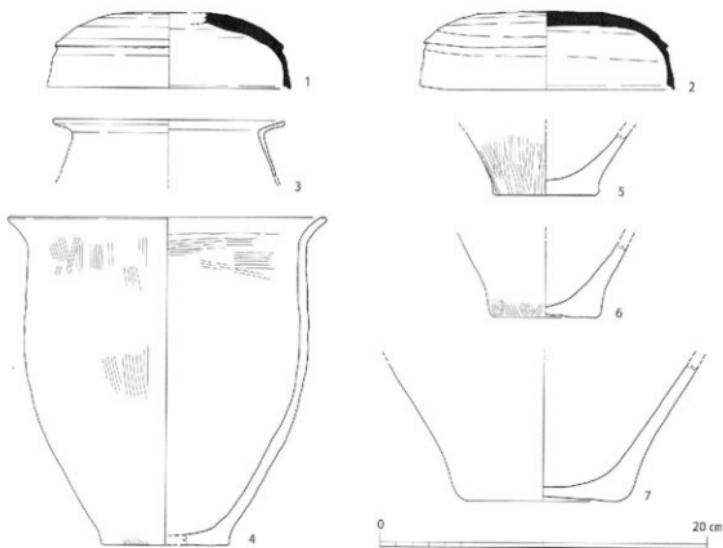
**古墳時代** 今回の調査では、竪穴住居 3 棟、掘立柱建物 1 棟、溝、土坑等を検出した。

竪穴住居 3 は一辺 4 m 以上の方形住居とみられ、埋土に須恵器を伴わず、壁溝に直交して間仕切りとも考えられる溝が検出されている。周辺の調査でも同様の間仕切りを伴う竪穴住居が検出されており、須恵器を作っていないことから、これらは古墳時代前期に建てられた住居であろうと推定される。間仕切り部分の検出幅は約 20 cm、深度は最も深いところで検出面から約 10 cm であった。竪穴住居 1 や 4 は埋土中出土の須恵器の特徴（第 41 図 1・2）から 6 世紀前半に建てられたもの

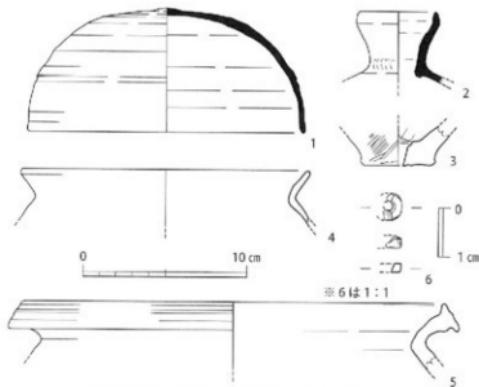


第40図 調査区 平面・断面図 (1:50)

1. 剥離・堅土。
2. 黒褐色(10YR4/2) シルト (～細粒砂)。ø2cm未満の礫を多く含む。耕作。
3. 黒褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)。ø2cm未満の礫と褐灰色(10YR4/1)シルト (～細粒砂)のブロックを若干含む。甃石か?
4. 黑褐色(10YR3/2) シルト。礫礫を若干含む。比較的均質。遺構埋没時の最終地盤形と考えられる。
5. 黑褐色(10YR3/3～4/1) シルト (～細粒砂)。
6. 黑褐色(10YR3/1) シルト (～細粒砂)。褐灰色(10YR4/1) シルト (～細粒砂)と基盤層ブロックを10%程度含む。SP-82 壤土。
7. 黑褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)。ø5～20cmの基盤層ブロックを10%程度含む。ø2cm以下の礫を少量含む。SP-124 壤土。
8. 褐灰色(10YR5/1～4/1) シルト (～細粒砂)。ø5～10cmの基盤層ブロックを5%程度含む。ø1cm以下の礫を少量含む。溝5埋土。
9. 黑褐色(10YR3/1～2/2) シルト (～細粒砂)。細粒砂を若干含む。比較的均質。SP-136 壤土。
10. 黑褐色(10YR4/1) シルト。基盤層ブロックを50%以上含む。SP-141 壤土。
11. 黑褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)。基盤層ブロックを30%程度含む。SP-144 壤土。
12. 黑褐色(10YR4/2)～黒褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)。細礫及び基盤層ブロックを若干含む。SP-105 壹土。
13. 褐黃褐色(10YR4/1)～褐黃褐色(10YR4/2) シルト。細礫を若干含む。均質。SP-130 壹土の可能性あり。
14. 黑褐色(10YR3/1) シルト (～板状砂)。網縞及び基盤層ブロックを若干含む。SP-113 壱土。
15. 褐黃褐色(10YR4/2) シルト。黒褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)を20%程度含む。SP-113 壱土。
16. 褐黃褐色(10YR4/1)～褐黃褐色(10YR4/2) シルト及び基盤層ブロックを20%程度含む。粗砂や細礫を多く含む。SP-109 壱土。
17. 黑褐色(10YR3/1) シルト (～細粒砂)。灰色土の沙質土上に含む。SP-99 壹土。
18. 褐灰色(10YR4/1)～黒褐色(10YR3/1) シルト。黄褐色(10YR5/6) シルト (～細粒砂)を50%程度含む。堅穴住居1床面整理土。
19. 黑褐色(10YR4/2)～黒褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)。堅穴住居2床面整理土。
20. 細粒砂(10YR4/1) シルト。堅穴住居1壁標識。
21. 黑褐色(10YR3/1) シルト (～細粒砂)。堅穴住居2壁標識。
22. 黑褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)。堅穴住居2土器片を多く含む。堅穴住居2壁標識。
23. 黑褐色(10YR4/2) シルト (～細粒砂)。基盤層ブロックを10%程度含む。礫礫を含む。堅穴住居2床面整理土。
24. 黑褐色(10YR3/2) シルト。基盤層ブロックを20%程度含む。堅穴住居2土器溝土。
25. 黑褐色(10YR3/1) シルト。堅穴住居2壁標識。
26. 黑褐色(10YR3/2) シルト (～中粒砂)。堅穴住居2からの耕作地壁。
27. 黑褐色(10YR4/1) シルト (～粗粒砂)。礫礫を多く含む。堅穴住居3壁。
28. 黑褐色(10YR4/1) シルト (～粗粒砂)。基盤層ブロックを5%程度含む。礫礫を多く含む。今や粘土質堅穴住居3壁。
29. 黑褐色(10YR4/1) シルト (～粗粒砂)。馬糞堆 (ø40cm) ブロックを40%程度含む。礫礫を多く含む。堅穴住居3床面整理土。
30. 黑褐色(10YR4/1) シルト (～粗粒砂)。基盤層ブロックを40%程度含む。礫礫を多く含む。堅穴住居3壁溝。
31. 黑褐色(10YR5/1～4/1) シルト (～粗粒砂)。礫礫を多く含む。SP-141 壁土。
32. 黑褐色(10YR4/1)～黑褐色(10YR3/2) シルト (～細粒砂)。細粒砂を多く含む。溝1埋土下層。

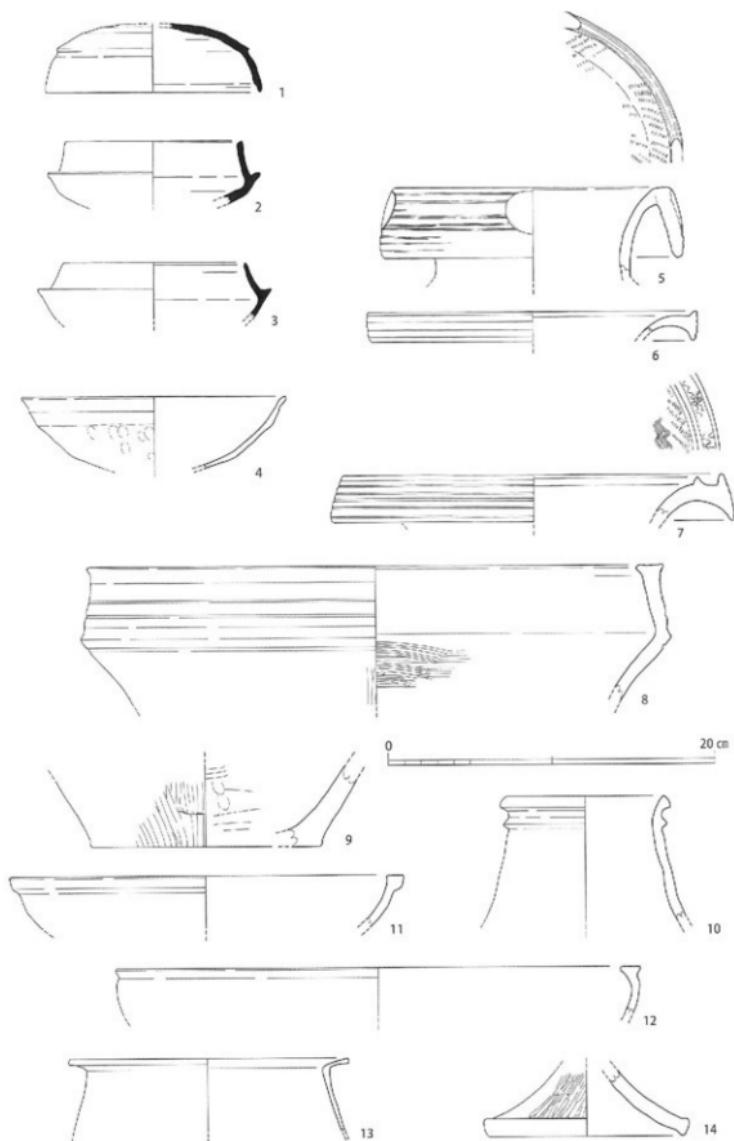


第41図 壁穴住居 出土遺物 (1:3)

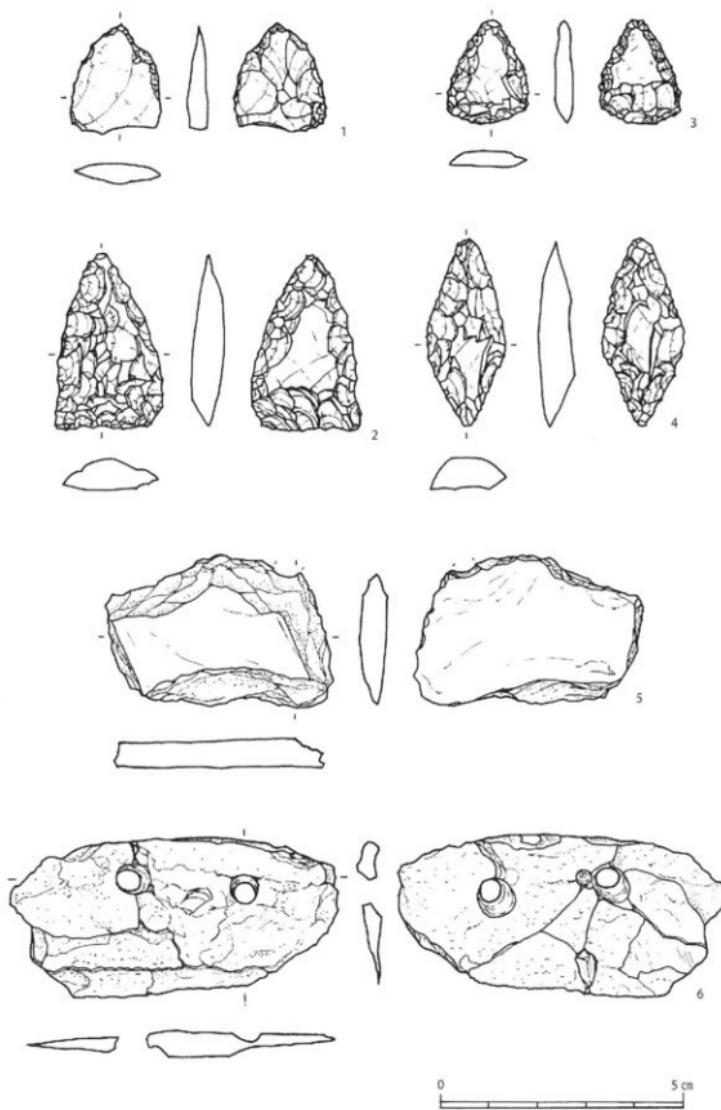


第42図 土坑 出土遺物 (1:3)

2. 調査の成果



第43図 SP 出土遺物 (1 : 3)



第44図 出土石器 (1:1)

### 3.まとめ

とみられ、ともに1辺5m前後の方形住居である。

その他にも同時期の竪穴住居と考えられる黒褐色系の埋土が分布する範囲が認められたが、遺存した深度が極めて浅く、住居掘削時に耕起された基底面の痕跡を残すのみで、明瞭な輪郭を特定できなかった。

掘立柱建物1は2間×2間の総柱構造で、各柱穴の深度は20～30cmとばらつきはあるものの他遺構の柱穴と比較して深く、倉庫の機能を推定できる。各柱穴の規模は隅丸方形タイプで一辺60cm前後であり、他の柱穴も平面円・楕円形など多少差異はあるものの同程度の規模であった。掘立柱建物1は円形竪穴住居1や4と併存したものと考えられる。

土坑は様々な規模があるものの、新免遺跡北部や本町遺跡に特徴的な不良品の須恵器を大量廃棄するような性格のものではなかった。土坑7は長軸約2.8m、短軸約1.6mを測る比較的大規模なもので平坦な底面をもち、南東方向から伸びる溝と併存していた。埋土の下層には須恵器を含まないため、古墳時代前期に掘削されたものと考えられるが、白玉（第42図6）が出土するなど特殊な性格を持つ土坑であった可能性が高い。

古代以降 当該調査地周辺は古代以降の遺構が明確に検出されることは少ない。今回の調査でもSP-50から瓦器焼（第43図4）が出土しているが建物を構成するものではなく、一帯が耕作地となっていたと考えられる。

### 3.まとめ

今回の調査では、第65次調査や周辺での成果と同様、弥生時代中期の円形住居、古墳時代前期から後期にかけての集落の様相について知見を得ることができた。現在までの調査では、たとえば弥生時代中期の円形住居は遺跡北部に多く検出されていて、今回の円形住居はその分布の南限になる可能性がある。今後、各時代の竪穴住居、掘立柱建物の形状や規模、主軸の方向等を面的に検討することで、遺跡全体に広がる住居、建物の変遷を追え、地形利用や集落の拡大がより詳細にわかつてくるものと考えられる。

## 第VI章 本町遺跡第39次調査

### 1. 調査の経緯

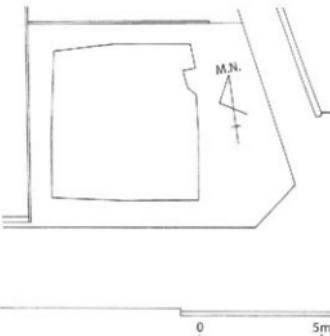
平成24年9月24日、豊中市本町2丁目108の一部における個人住宅建築にかかる発掘届が提出された。同年10月15日、遺跡の存否を確認するための確認調査を実施した結果、いずれのトレンチからも、地表下40cm以下において厚さ20cm以上に及ぶ遺物包含層の存在が確認され、下部に遺構の存在も想定された。以上の結果を踏まえ、今回の基礎工事では地表下約80cmの表層地盤改良が予定されていることを勘案し、施工側との協議のもと、遺跡の損壊が免れない基礎掘削範囲37.4m<sup>2</sup>を対象に、平成24年11月1日から12月4日まで34日間

の調査期間を得て、発掘調査を実施することとなった。なお、調査区の敷地は狭小で残土置き場の確保が難しいため、調査区を便宜上東西の2区に分け、西区終了後、東区の調査にかかるものとした。

### 2. 調査の成果

#### (1) 基本層序

当調査区における基本層序は概ね4層に大別できる。第1層は現代の盛土もしくは既存建物解体



第45図 調査範囲図(1:200)



第46図 調査位置図(1:5,000)

時の搅乱土である。第2層は黒褐色シルト～粘土で、層厚は平均15cmを測り、多くの弥生土器、須恵器片を含む。第3層は層厚10～20cmで、弥生土器、須恵器を多く含む黒色シルト～粘土である。第2層、第3層は、比較的粒子の細かい柔らかい土質であり、礫、砂などをほとんど含まず、クロボク様の有機質土壤である。その中に弥生土器と須恵器が混在する。第3層には比較的弥生土器の混入が多いものの、若干の須恵器が混じる状況から、古墳時代後期の遺構が上部から切り合った状況も想定された。しかし包含層掘削時および壁面の土層断面の観察からは、明確に遺構の重複を示す状況は認められなかった。ただ調査区西南部で出土した弥生土器の出土位置が竪穴住居と見られる壁溝の直上にあることから、これを住居に伴う遺物とみなせば、第3層の形成後に住居の掘削が行なわれた可能性も考えられる。いずれにせよ地山面に貼り付くように微量の須恵器片が出土する状況も認められ、層序の形成に関する詳細については、周辺部における今後の調査の進展に待ちたい。

### (2) 遺構面の状況

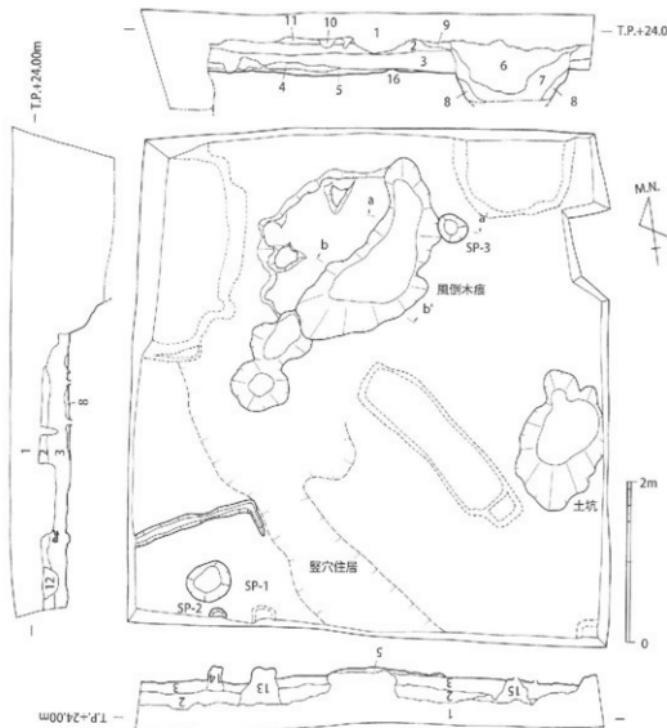
当調査区を含む通称豊中台地を形成する中位段丘は、段丘縄、砂、シルト、粘土などの河成堆積物が層厚数10cm～数mの層厚をもって繰り返し堆積する。今回の調査区は、砂を含む浅黄色のシルト～粘土を主体とするが、この地山上面において無数の亀裂（ひび割れ）が観察された。亀裂の幅は3～10cmで、内部は上部の第3層と同じ黒色シルトで一様に充たされている。亀裂の方向に規則性はなく、それに囲まれた範囲は多くが5～20cm四方で、遺構面全体が細かな亀裂で覆われる状況である。深度は30～40cmに達するものもあるが、概ね表面において顕著で、下部に行くほど不明瞭になる傾向がある。

亀裂の多さや深度から見る限り、地震由来の液状化にともなう地割れの痕跡である可能性は低い。また植物の根等による搅乱とも考え難い。ただちに答えは見出しがたいが、検出遺構の希薄さから、当地点が居住域の縁辺付近に相当する可能性が高いこと、当調査区内の地山に高低差が存在することから、当地点並びに周辺に一部滯水をともなう低湿な環境が存在した可能性が考えられる。今回検出した無数の亀裂に関しては、このような地形条件と、滯水と乾燥が繰り返されることにより、地表面にひび割れが生じ、そこに上部の黒色シルトが流入したという状況を想定しておきたい。

### (3) 検出した遺構と遺物

今回の調査は小規模な面積にも関わらず、包含層は比較的厚く、出土遺物も多かったのに対し、検出遺構は非常に少ない。わずかに竪穴住居1、ピット3を数えるのみである。その他上坑状に土質が異なる部分は、いわゆる風倒木や植物の浸食など自然営為にともなうものとみられる。

**竪穴住居** 調査区の南西部で検出した方形プランを有する住居跡である。全体の規模は不明であるが、検出された壁溝の長さ1.5mを測る。壁溝は幅20cm、検出された深さ10cm未満で、北東部で直角に折れ曲がり、コーナーを形成する。東側の壁溝は残存しない。この壁溝の内側から2基のピットを検出した。SP-1は東西55cm、南北47cm、深さ約10cmで、西に偏して幅15cmの柱痕らしき土質の違いを断面で観察した。掘形は掘り込み角度がやや緩やかで、竪穴住居の柱穴としてはやや規模が大きい。SP-2はSP-1の南側の壁面直下から検出した。直径20cm、深さ16cmで、掘り込みの角度は急である。柱痕は確認できず、土層断面の観察から掘り込み面は第3



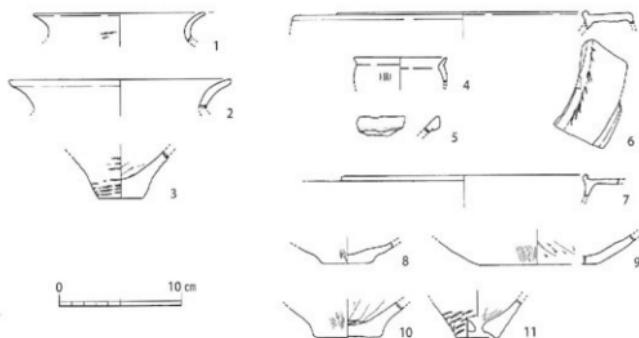
1. 褐土：に赤い斑点（2.5Y4/4）含む  
 2. 黄褐色（7.5YR2/2）シルト～軟土（発生、粘土質含む）  
 3. 黒色（7.5YR2/1）シルト～軟土（発生、粘土質含む）  
 4. 黑褐色（10YR3/1）粘土  
 5. 8号地山ブロック含む  
 6. に赤い斑点（10YR4/4）細～中粒砂（水平葉理発達）  
 7. 6に3、3のブロックを含む  
 8. 黄褐色（10YR4/4）シルト～軟土（3、4のブロック含む）  
 9. に赤い斑点（2.5Y4/4）含む  
 10. 黄褐色（10YR5/2）砂土  
 11. に赤い斑点（10YR4/4）シルト  
 12. 黄褐色（10YR4/1）シルトに繊など多く含む。周囲の一部  
 13. 黑褐色（7.5Y2/2）シルト～軟土に赤い斑点（2.5Y8/3）含む  
 14. 黑色（7.5Y1.7/1）シルト（発生、粘土質）  
 15. 3、4に暗紅色、径5cm未満の很多く混じる。周囲の一部  
 16. 黄褐色（2.5Y7/3）シルト～軟土（地山：鉛鉱層）

第47図 調査区 平面・断面図 (1:60)

層上面の可能性が高い。各々の帰属を明らかにするのは困難だが、検出位置については両ピットとも当住居の主柱穴として問題のない位置にある。

なお、当住居跡西端部、壁溝直上より土器がまとまって出土した。壁面の土層観察の結果、住居跡覆土中の土器を見て大過ない位置にある。ただし入念な観察にもかかわらず、住居の掘形を土層断面で確認することはできなかった。

住居跡西端部の壁溝上より出土した土器群は、須恵器を全く伴わず、弥生時代後期から終末期に



第48図 出土遺物（1:4）

属するもので占められる。確実ではないが、出土位置から当住居跡に伴う可能性が考えられる。

1、2は甕の口縁部である。いずれも端部に向かって大きく外反する。2は口径約18cmで、端部外面にやや幅広の鈍い面をなす。1は口径13.8cmで、狭い端面をなし、頸部直下にタタキの痕跡を認める。色調はいずれも内外ともに橙色（7.5 YR 7/6）を呈する。3は甕の底部である。底部径3.5cmで、粗いタタキが施され、とくに底部外面は再調整のためのタタキが施される。色調は1、2と同様で、いずれかと同一個体をなすものと見られる。

**S P - 3** 風倒木痕の横で検出したピットで、直径26cm、深さ35cmを測る。中央に直径15cmの柱痕とも見られる土質の違いが認められ、その直下に地山の浅黄色粘土ブロックが検出された。建物の柱穴とも見られるが、調査区内においてこれと関連する他のピットは検出されていない。

**風倒木痕** 調査区の北側から検出した風倒木痕を見られるものである。長径2.5m、短径1mの半月型の弧状を呈し、内部は一様に有機質の黒褐色シルトで覆われる。この痕跡は、検出手面での輪郭は比較的明瞭であるが、下部に掘り下げるに従って地山との境界は不明瞭となる。この点が人為的な造構と大きく異なる点である。有機質の上質に覆われた部分を掘削したあとの地山の形状を見ると、東側はやや緩い傾斜であるのに対し、西側は急角度に立ち上がり、下部の黒褐色シルトがさらに西側の地山中にくい込んでいく状況が看取された。第49図の断面図に示した各層は、いずれも土質、上色ともに截然と区別できるものではなく、漸移的に移行する。また、通常見られる土坑などと異なり、各層は必ずしも物理的な堆積状況を示さず、層の変わり目が垂直方向、あるいは同質の部分が一部枝分かれするような部分も認められた。なお、埋上からの出土遺物は皆無であった。

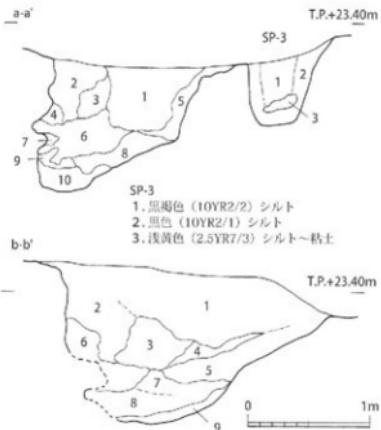
この風倒木痕の北西側地山面において、やや特異な状況が観察された。風倒木とほぼ同規模の長径2.3m、短径1mの範囲において周囲よりも地山が約10cm程度盛り上がり、周縁部に不規則な起伏が見られたことである。風倒木痕とこの部分の連続的な位置関係から、その生成は本来一体的に生じたものと理解すべきである。土層の状況とも勘案すると、風倒木痕の位置に生育した樹木が、何らかの原因で南東方向に倒れた際、根のくい込んだ北西側の地山を下から持ち上げ、地山面を隆起させた可能性が高い。これと同様な、風倒木痕に付随して周囲の地山に変化が生じている例は、野畑春日町遺跡第2次調査等でも確認されている。

また、調査区東側で検出した長径 1.75 m、短径 1.15 m の不定形土坑も、上の風倒木痕と比べると地山との境界はやや明瞭であるが、土色や土質の状況、さらに全く遺物をともなわないことから、植物など自然の営為によるものと推定する。

**第2層・第3層の出土遺物（第48図4～11・第50図）** 上記の通り、包含層である第2層、第3層にはとともに弥生土器、須恵器を含む。出土遺物から見る限り、層位の上下と時代にはとくに対応関係は認められない。

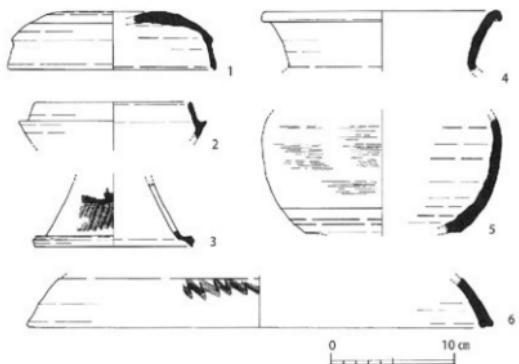
第48図4は小形鉢の破片で、復元口径7.6cm。口縁部は短く屈曲して外反し、体部外面にはかすかに垂直方向のタタキ痕を残す。5は壺口縁部と見られ、端部は大きく玉縁状に折り返して肥厚する。6、7は水平口縁を持つ高杯で、いずれも垂下部を欠失する。6は復元口径 20.4cm で、水平口縁と体部が接する下面に鋭利な工具痕が連続して見られる。7は復元口径 20.0cm を測る。8は底径 3.4cm、10は底径 5.0cm で、いずれも壺の底部と見られ、外面にミガキが施される。9は壺か甕の底部と見られ、復元底径 9.6cm、内面は赤褐色で、2mm以下の小礫を混じる粗い胎土は他の弥生土器と異なる。底部内面に粗いケズリを施すことにより、底部としては比較的薄く作られる。外面の棱も鈍く丸底への志向を窺わせることから、庄内式以降に属する可能性も考えられる。11は底径 3.4cm で、直径 6 mm の孔をもつ有孔鉢の底部である。外面には粗いタタキが施される。

須恵器には杯蓋、杯身、高杯脚部、甕口縁部、壺体部、器台脚部の破片がある。第50図1の杯蓋は口径 16.8cm、器高 4.75cm で、体部の約 4 分の 3 に回転ヘラケズリが施される。口縁部との棱は鈍く、口縁端部内面には段を有する。2の杯身は推定口径 12.8cm で、口縁部は内傾し、端部内面にわずかに段が残る。受部と体部は連続的で上面はほぼ水平である。3は高杯脚部の破片で、推定底径 12.8cm、真っ直ぐに開く脚の裾部は大きく外反し、端部は肥厚して外面に段をなし装飾性に富む。透かし孔を有し、外面には非常に細かい櫛描き波状文が施される。4は復元口径 18.2cm、口縁端部は外側に短く折り曲げている。5は壺の体部で、最大径 19.4cm、底部付近に回転ヘラケ



- 風倒木 a-a'
1. 黒褐色 (10YR2/1) シルト (土器細片発見に含む)
  2. 黒褐色 (10YR3/2) シルト～粘土
  3. 黑褐色 (10YR2/2) シルト～粘土
  4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
  5. 黑褐色 (10YR3/2) シルト
  6. 5 同じ
  7. 黄褐色 (10YR3/3) シルト
  8. 黑褐色 (10YR2/3) シルト (地山ブロック含む)
  9. にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト
  10. にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト (地山ブロック含む)
- 風倒木 b-b'
1. 黒色 (10YR1.7/1) シルト (0.5 cm以下の小礫含む)
  2. 黒色 (10YR2/1) シルト (0.5 cm以下の小礫含む)
  3. 黒色 (10YR1.7/1) シルト
  4. 黑褐色 (10YR2/2) シルト
  5. 黑褐色 (10YR3/2) シルト
  6. 暗褐色 (10YR4/1) シルト～黒褐色 (10YR3/1) シルト (2 cm以下的小礫、中礫多く含む)
  7. 黒色 (10YR2/1) シルト (1.5 cm以下の小礫、中礫わずかに含む)
  8. 黒色 (10YR1.7/1) シルト (3 cm以下の小礫、中礫わずかに含む)
  9. 黒色 (10YR2/1) シルトに地山の浅黄色粘土～シルト (5Y7/7) ブロックを多く含む

第49図 風倒木痕 断面図 (1:40)



第50図 出土遺物（1：4）

ズリを施し、体部中位には鈍いながらカキメ調整が施される。6は器台の脚端部で、推定底径35.9cm、4cm上方に段をつくり、その直下に波状文を施す。これらの須恵器は、杯や高杯の特徴から、おおむね桜井谷2-2・3型式のものが大半を占めると考えられる。

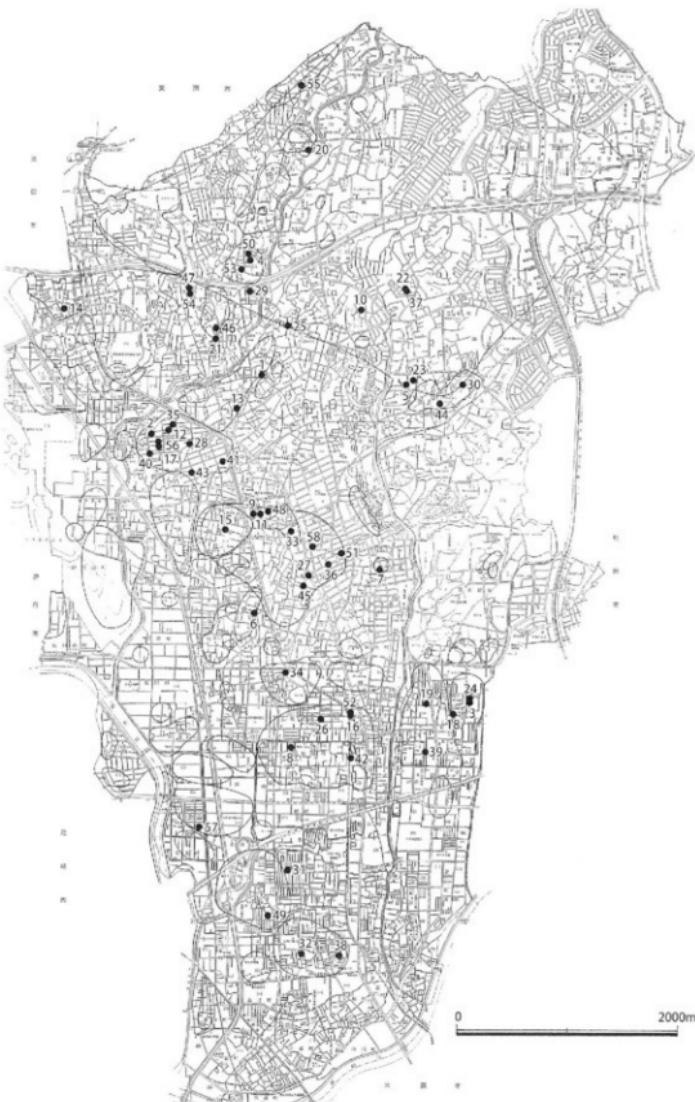
## 3.まとめ

今回の調査区は、検出遺構の希薄さや包含層の状況から、集落範囲の中でも日常生活領域の縁辺部付近に位置する可能性が高い。とくに弥生土器と須恵器が混在する包含層の形成については、調査区内の微地形、クロボク様の土質、地山面上の無数の亀裂などから、おそらく調査区の東側には四所（浅い谷）が存在し、周囲から土器を含む泥土の供給を受け、かつ植物の繁茂や乾燥を繰り返しながら、徐々に形成されたものと推定される。

また、今回、きわめて限定的とはいえ聚穴住居の一部を検出できたことは、従前から知られる弥生時代後期～終末期の集落範囲を明らかにする上で重要な成果である。そして、出土土器に中期の土器が相当数含まれる点も、当該期集落の存在を裏付けている。さらに、6世紀前～中頃の須恵器の出土は古墳時代後期集落の広がりを示している。上記微地形の解釈とともに、本町遺跡の実態をより詳細に究明する上で、今後とも周辺部の調査を注意深く実施していく必要があろう。



49	鳥山造跡	宮内省第3丁目30-15	20421122	個人住宅建設	38.36	無	普工	築田
50	内田造跡	福島町3丁目29-12	20421123	個人住宅建設	47.00	有	普工	築田
51	板谷吉彌作	新潟市西区7丁目91-6	20421123	個人住宅建設	36.00	無	普工	築田
52	船橋造跡	羽高郡美千丁目214-9	20421123	個人住宅建設	40.69	無	普工	築田
53	内田造跡	福島町3丁目2-1	20421106	個人住宅建設	26.17	無	普工	築田
54	北刀根山造跡	刀根山元町88	20421206	個人住宅建設	149.45	有	普工	築田
55	大波塙三彌作	永美町3丁目47-17	20421213	個人住宅建設	127.02	無	普工	築田
56	手免造跡	三河町3丁目24-1,2	20421213	個人住宅建設	93.39	有	本業資(好先頭次)	築田
57	上津島造跡	上津島2丁目146-6	20421223	個人住宅建設	36.15	無	普工	築田
58	板谷吉彌作	中塙223丁目155-1	20421227	個人住宅建設	48.70	無	普工	築田



第51図 確認調査地点位置図

### 2012－01 本町遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）1 月 12 日

調査場所：豊中市本町 9 丁目 60 ～ 1,3

調査対象面積：47.79 m<sup>2</sup>

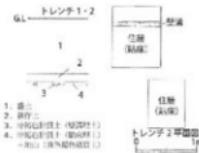
調査の方法：重機によりトレント 2か所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：地表下 105 cm において住居址、壁溝等の遺構を検出した。

調査後の処置：再立会後、慎重工事を指示。



第 52 図 トレント掘削状況



第 53 図 トレント断面図

### 2012－02 新免遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）1 月 19 日

調査場所：豊中市玉井町 3 丁目 153 ～ 11

調査対象面積：53.00 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレント 1か所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 180 cm）内において、明確な造構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 54 図 トレント掘削状況



第 55 図 トレント断面図

### 2012－03 北条遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）1 月 19 日

調査場所：豊中市北条町 4 丁目 1881 ～ 3

調査対象面積：55.89 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレント 1か所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 180 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 56 図 トレント掘削状況



第 57 図 トレント断面図

### 2012－04 内田遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）2 月 2 日

調査場所：豊中市山桜の町 3 丁目 37 ～ 8

調査対象面積：32.76 m<sup>2</sup>

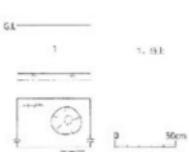
調査の方法：重機によりトレント 1か所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：地表下 40 cm において基盤層を検出し、その上面で遺構を確認した。

調査後の処置：建物基礎は遺構検査面に迷しないため、再立会後、慎重工事を指示。



第 58 図 トレント掘削状況



第 59 図 トレント断面図

### 2012-05 桜井谷窯跡群

調査日：平成 24 年（2012 年）3 月 15 日

調査場所：豊中市熊野町 4 丁目 36-25

調査対象面積：33.40 m<sup>2</sup>

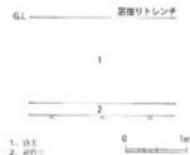
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 160 cm において基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 60 図 トレンチ掘削状況



第 61 図 トレンチ断面図

### 2012-06 曽根遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）3 月 22 日

調査場所：豊中市曾根西町 3 丁目 17-5

調査対象面積：59.37 m<sup>2</sup>

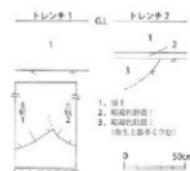
調査の方法：重機によりトレント 2 か所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：トレント 1 において地表下 40 cm で基盤層を、トレント 2 において上土 2 基を検出した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。  
(曾根遺跡第 12 次調査)



第 62 図 トレンチ掘削状況



第 63 図 トレンチ断面図

### 2012-07 長興寺遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）3 月 22 日

調査場所：豊中市長興寺北 2 丁目

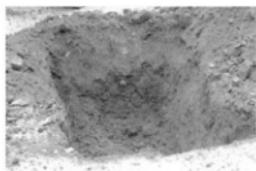
27-1, 28-2

調査対象面積：46.98 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレント 1 か所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 170 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 64 図 トレンチ掘削状況



第 65 図 トレンチ断面図

### 2012-08 穂穂遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）3 月 22 日

調査場所：豊中市履道西町 3 丁目 789-6

調査対象面積：83.54 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレント 1 か所を掘削し、トレント内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 170 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 66 図 トレンチ掘削状況



第 67 図 トレンチ断面図

### 2012-09 桜塚古墳群

調査日：平成24年（2012年）3月22日

調査場所：豊中市岡町65-2

調査対象面積：99.65 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下30cmにおいて基盤層を検出しが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第68図 トレンチ掘削状況



第69図 トレンチ断面図

### 2012-10 桜井谷窯跡群

調査日：平成24年（2012年）4月26日

調査場所：豊中市上野東3丁目  
95-2の一部

調査対象面積：66.57 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ4か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下80～120cm）において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第70図 トレンチ掘削状況



第71図 トレンチ断面図

### 2012-11 桜塚古墳群

調査日：平成24年（2012年）4月26日

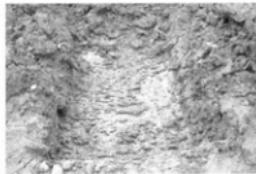
調査場所：豊中市岡町34-1.2, 34の一部

調査対象面積：128.86 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下20cm）において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第72図 トレンチ掘削状況



第73図 トレンチ断面図

### 2012-12 新免遺跡

調査日：平成24年（2012年）5月2日

調査場所：豊中市玉井町2丁目184の一部

調査対象面積：54.00 m<sup>2</sup>

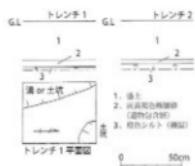
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下32cmにおいて遺物包含層を、同35cmで遺構面を検出した。

調査後の処置：建物基礎の設計変更により、再立会後、慎重工事を指示。



第74図 トレンチ掘削状況



第75図 トレンチ断面図

### 2012-13 本町遺跡

調査日：平成24年（2012年）5月17日

調査場所：豊中市本町3丁目333-2、336

調査対象面積：58.80 m<sup>2</sup>

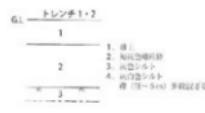
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下55～60cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第76図 トレンチ掘削状況



第77図 トレンチ断面図

### 2012-14 蛍池北遺跡

調査日：平成24年（2012年）5月17日

調査場所：豊中市蛍池北町1丁目59-7

調査対象面積：47.00 m<sup>2</sup>

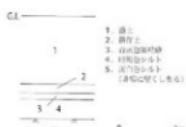
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下160～165cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第78図 トレンチ掘削状況



第79図 トレンチ断面図

### 2012-15 岡町北遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成24年（2012年）6月7日

調査場所：豊中市岡町北1丁目49-5

調査対象面積：35.91 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下30cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第80図 トレンチ掘削状況



第81図 トレンチ断面図

### 2012-16 穂積遺跡

調査日：平成24年（2012年）6月7日

調査場所：豊中市服部穂町1丁目214-10

調査対象面積：45.74 m<sup>2</sup>

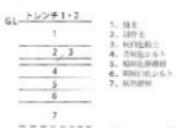
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下170cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第82図 トレンチ掘削状況



第83図 トレンチ断面図

## 2012－17 新免遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）6 月 7 日

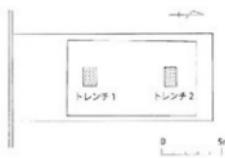
調査場所：豊中市玉井町 3 丁目 39

調査対象面積：67.50 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 42・48 cmにおいて、黒褐色粘質土層（遺構埋土か）を検出した。

調査後の処置：建物基礎は黒褐色粘質土層に達しないため、再立会後、慎重工事を指示。



第 84 図 トレンチ配置図



第 85 図 トレンチ断面図

## 2012－18 小曾根遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）6 月 14 日

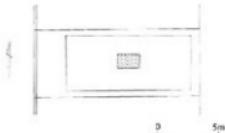
調査場所：豊中市北条町 3 丁目 129－15

調査対象面積：31.01 m<sup>2</sup>

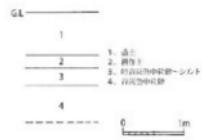
調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 180 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 86 図 トレンチ配置図



第 87 図 トレンチ断面図

## 2012－19 小曾根遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）6 月 28 日

調査場所：豊中市北条町 1 丁目 57－4

調査対象面積：67.90 m<sup>2</sup>

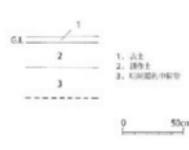
調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 50 cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 88 図 トレンチ配置図



第 89 図 トレンチ断面図

## 2012－20 野畠春日町遺跡・野畠春日町古墳群

調査日：平成 24 年（2012 年）6 月 28 日

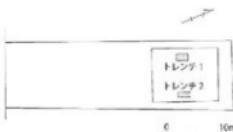
調査場所：豊中市春日町 3 丁目 133 の一部

調査対象面積：99.37 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ 1 の地表下 30 cmにおいて焼土塊を検出した。

調査後の処置：建物基礎は焼土塊に達しないため、確認調査後、慎重工事を指示。



第 90 図 トレンチ配置図



第 91 図 トレンチ断面図

## 2012-21 柴原遺跡

調査日：平成24年（2012年）7月12日

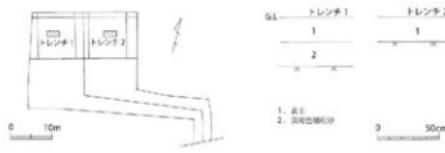
調査場所：豊中市刀根山2丁目168-8他

調査対象面積：182.18 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下20・40 cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第92図 トレンチ配置図

第93図 トレンチ断面図

## 2012-22 桜井谷窯跡群

調査日：平成24年（2012年）7月26日

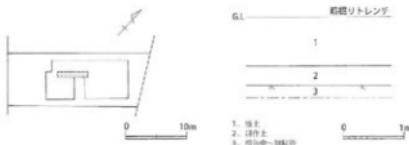
調査場所：豊中市東豊中町1丁目60-17

調査対象面積：78.93 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下110 cmにおいて基盤層を検出したが、窯跡関連の遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第94図 トレンチ配置図

第95図 トレンチ断面図

## 2012-23 桜井谷窯跡群

調査日：平成24年（2012年）7月26日

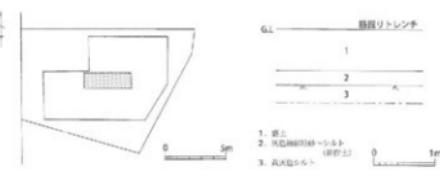
調査場所：豊中市堀野町4丁目40-2.3

調査対象面積：51.71 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下90 cmにおいて基盤層を検出したが、窯跡関連の遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第96図 トレンチ配置図

第97図 トレンチ断面図

## 2012-24 北条遺跡

調査日：平成24年（2012年）8月2日

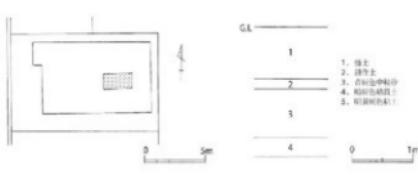
調査場所：豊中市北条町3丁目1881-3

調査対象面積：54.00 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下210 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第98図 トレンチ配置図

第99図 トレンチ断面図

## 2012-25 桜井谷窯跡群

調査日：平成24年（2012年）8月9日

調査場所：豊中市上野西2丁目402

調査対象面積：75.53 m<sup>2</sup>

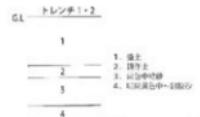
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下130cm）において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第100図 トレンチ掘削状況



第101図 トレンチ断面図

## 2012-26 穂積遺跡

調査日：平成24年（2012年）8月9日

調査場所：豊中市服部豊町2丁目77-7

調査対象面積：65.52 m<sup>2</sup>

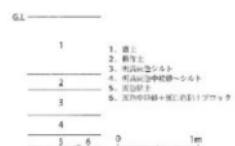
調査の方法：重機によりトレンチ1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下170cm）において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第102図 トレンチ掘削状況



第103図 トレンチ断面図

## 2012-27 桜塚古墳群

調査日：平成24年（2012年）8月16日

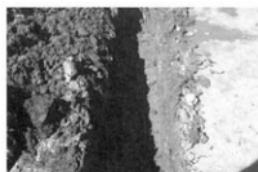
調査場所：豊中市南桜塚1丁目1-1の一部

調査対象面積：72.87 m<sup>2</sup>

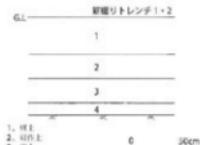
調査の方法：重機により範囲内トレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下80cmにおいて基盤層を検出しが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第104図 トレンチ掘削状況



第105図 トレンチ断面図

## 2012-28 新免遺跡

調査日：平成24年（2012年）8月23日

調査場所：豊中市玉井町2丁目87-1

調査対象面積：64.80 m<sup>2</sup>

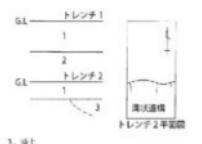
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ2において地表下30～50cmで状況遺構を検出した。

調査後の処置：建物基礎の設計変更により、再立会後、慎重工事を指示。



第106図 トレンチ掘削状況



第107図 トレンチ断面図















### 2012－57 上津島遺跡

調査日：平成 24 年（2012 年）12 月 20 日

調査場所：豊中市上津島 2 丁目 146－6

調査対象面積：36.45 m<sup>2</sup>

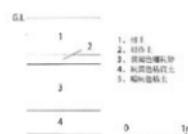
調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 190 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 164 図 トレンチ掘削状況



第 165 図 トレンチ断面図

### 2012－58 桜塚古墳群

調査日：平成 24 年（2012 年）12 月 27 日

調査場所：豊中市中桜塚 3 丁目 155－1

調査対象面積：48.70 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋削りトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 20 cm において基盤層を検出ましたが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 166 図 トレンチ掘削状況



第 167 図 トレンチ断面図





第168図 確認調査地点位置図

### 2013-01 穂積遺跡

調査日：平成25年（2013年）1月10日

調査場所：豊中市服部寺町2丁目742-49

調査対象面積：61.00 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンド1か所を掘削し、トレンド内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下180cm）において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第169図 トレンド掘削状況



第170図 トレンド断面図

### 2013-02 岡町遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成25年（2013年）1月24日

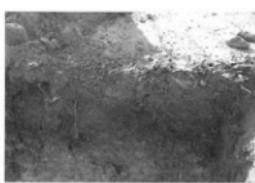
調査場所：豊中市中桜塚2丁目89-1,2

調査対象面積：95.42 m<sup>2</sup>

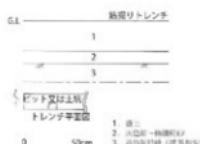
調査の方法：重機により掘削しトレンド1か所を掘削し、トレンド内を精査した。

調査の概要：地表下35cmにおいて基盤層を検出し、その上面で遺構（土坑又はピット）を確認した。

調査後の処置：建物基礎は遺構面に達しないため、再立会後、慎重工事を指示。



第171図 トレンド掘削状況



第172図 トレンド断面図

### 2013-03 本町遺跡

調査日：平成25年（2013年）2月21日

調査場所：豊中市本町9丁目

170-3の一部、170-4

調査対象面積：47.82 m<sup>2</sup>

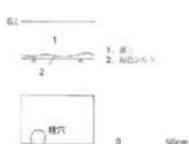
調査の方法：重機によりトレンド1か所を掘削し、トレンド内を精査した。

調査の概要：地表下30cmにおいて柱穴1基を検出した。

調査後の処置：建物基礎の設計変更により、再立会後、慎重工事を指示。



第173図 トレンド掘削状況



第174図 トレンド断面図

### 2013-04 新免遺跡

調査日：平成25年（2013年）2月28日

調査場所：豊中市立花町1丁目

149-4他3箇

調査対象面積：81.15 m<sup>2</sup>

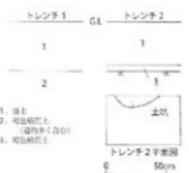
調査の方法：重機によりトレンド2か所を掘削し、トレンド内を精査した。

調査の概要：トレンド2において地表下40cmで遺構面を検出した。

調査後の処置：建物基礎の設計変更により、再立会後、慎重工事を指示。



第175図 トレンド掘削状況



第176図 トレンド断面図

### 2013－05 曽根遺跡

調査日：平成25年（2013年）2月28日

調査場所：豊中市曾根西町3丁目21-30

調査対象面積：57.35 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ3か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下50cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第177図 トレンチ掘削状況



第178図 トレンチ断面図

### 2013－06 熊野田遺跡

調査日：平成25年（2013年）3月14日

調査場所：豊中市熊野町4丁目29-6

調査対象面積：85.60 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下140cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第179図 トレンチ掘削状況



第180図 トレンチ断面図

### 2013－07 桜谷窯跡群

調査日：平成25年（2013年）3月14日

調査場所：豊中市東豊中町3丁目147

調査対象面積：77.69 m<sup>2</sup>

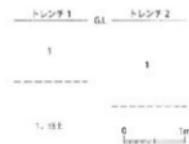
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下100-140cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第181図 トレンチ掘削状況



第182図 トレンチ断面図

### 2013－08 桜塚古墳群

調査日：平成25年（2013年）3月28日

調査場所：豊中市中桜塚2丁目77-2,4

調査対象面積：33.95 m<sup>2</sup>

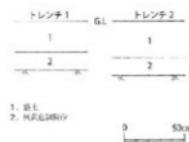
調査の方法：重機によりトレンチ2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下40・45cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第183図 トレンチ掘削状況



第184図 トレンチ断面図

### 2013-09 山ノ上遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）3 月 28 日

調査場所：豊中市宝山町 79-4

調査対象面積：53.97 m<sup>2</sup>

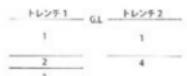
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 30・40 cmにおいて遺物包含層を検出した。

調査後の処置：建物基礎は遺物包含層に達しないため、再立会後、慎重工事を指示。



第 185 図 トレンチ掘削状況



第 186 図 トレンチ断面図

### 2013-10 桜井谷窯跡群

調査日：平成 25 年（2013 年）5 月 9 日

調査場所：豊中市東櫛中町 1 丁目 142-2

調査対象面積：78.36 m<sup>2</sup>

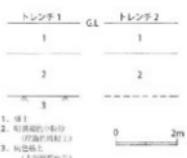
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 240 cm）において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 187 図 トレンチ掘削状況



第 188 図 トレンチ断面図

### 2013-11 本町遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）5 月 9 日

調査場所：豊中市本町 4 丁目 89-2

調査対象面積：35.40 m<sup>2</sup>

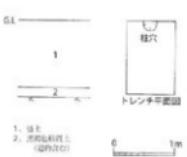
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 110 cmにおいて遺物包含層を、同 125 cmにおいて基盤層を検出し、その上面で柱穴を確認した。

調査後の処置：建物基礎の設計変更により、再立会後、慎重工事を指示。



第 189 図 トレンチ掘削状況



第 190 図 トレンチ断面図

### 2013-12 太鼓塚古墳群

調査日：平成 25 年（2013 年）5 月 30 日

調査場所：豊中市永楽荘 2 丁目 262-2

調査対象面積：49.24 m<sup>2</sup>

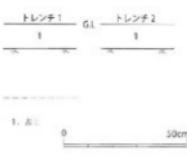
調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 10 cmにおいて基盤層を検出しがたが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 191 図 トレンチ掘削状況



第 192 図 トレンチ断面図

### 2013－13 新免遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）6 月 6 日

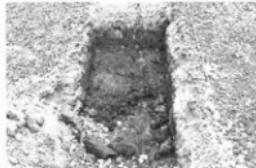
調査場所：豊中市玉井町 2 丁目 87－5

調査対象面積：59.20 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により前掘りトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 45 cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 193 図 トレンチ掘削状況



第 194 図 トレンチ断面図

### 2013－14 岡町北遺跡・桜塚古墳群

調査日：平成 25 年（2013 年）6 月 13 日

調査場所：豊中市岡町北 1 丁目  
51－4 の一部

調査対象面積：51.12 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により前掘りトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 40 cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 195 図 トレンチ掘削状況



第 196 図 トレンチ断面図

### 2013－15 本町遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）6 月 20 日

調査場所：豊中市本町 4 丁目 70－4 の一部

調査対象面積：46.99 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 55 cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 197 図 トレンチ掘削状況



第 198 図 トレンチ断面図

### 2013－16 下原窯跡群

調査日：平成 25 年（2013 年）6 月 20 日

調査場所：豊中市中桜塚 5 丁目 9－15

調査対象面積：30.00 m<sup>2</sup>

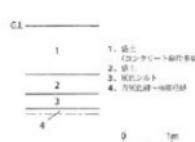
調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 180 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 199 図 トレンチ掘削状況



第 200 国 トレンチ断面図



## 2013－21 小曾根遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）7 月 25 日

調査場所：豊中市北条町 1 丁目 43－13

調査対象面積：83.71 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 160 cm）において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 209 図 トレンチ掘削状況



第 210 図 トレンチ断面図

## 2013－22 穂積遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）8 月 8 日

調査場所：豊中市服部南町 3 丁目 15－4

調査対象面積：44.51 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 80 cm において遺物包含層を検出した。

調査後の処置：建物基礎は遺物包含層に達しないため、再立会後、慎重工事を指示。



第 211 図 トレンチ掘削状況



第 212 図 トレンチ断面図

## 2013－23 曽根遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）9 月 5 日

調査場所：豊中市曾根西町 3 丁目 193

調査対象面積：78.10 m<sup>2</sup>

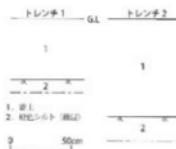
調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 50～80 cm において基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 213 図 トレンチ掘削状況



第 214 図 トレンチ断面図

## 2013－24 熊野田遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）9 月 12 日

調査場所：豊中市熊野町 3 丁目 73－16

調査対象面積：33.13 m<sup>2</sup>

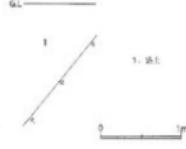
調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 40～150 cm にかけて基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 215 図 トレンチ掘削状況



第 216 図 トレンチ断面図

### 2013-25 庄内遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）9 月 12 日

調査場所：豊中市庄内西町 5 丁目  
51-10,11 の各一部

調査対象面積：70.25 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 220 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 217 図 トレンチ掘削状況



第 218 図 トレンチ断面図

### 2013-26 山ノ上遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）9 月 26 日

調査場所：豊中市立花町 2 丁目  
117, 117-2 の各一部

調査対象面積：84.68 m<sup>2</sup>

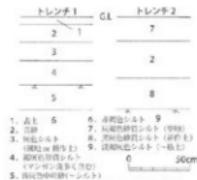
調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 55-75 cmにおいて基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査直後、着工を指示。



第 219 図 トレンチ配置図



第 220 図 トレンチ断面図

### 2013-27 穂積遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）10 月 3 日

調査場所：豊中市服部南町 3 丁目 46-18

調査対象面積：49.68 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 130 cm）内において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 221 図 トレンチ掘削状況



第 222 図 トレンチ断面図

### 2013-28 本町遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）10 月 10 日

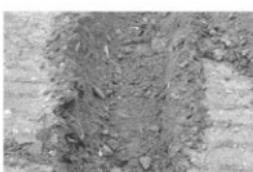
調査場所：豊中市本町 9 丁目 24-3

調査対象面積：33.54 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 30 cm）内において、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 223 図 トレンチ掘削状況



第 224 図 トレンチ断面図

### 2013－29 新免遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）10 月 10 日

調査場所：豊中市玉井町 2 丁目 184-5

調査対象面積：95.30 m<sup>2</sup>

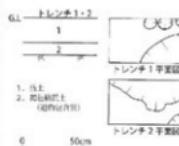
調査の方法：重機によりトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 20 cmにおいて遺物包含層を、同 30 cmにおいて遺構を検出した。

調査後の処置：協議後、発掘調査を行う。  
（新免遺跡第 71 次調査）



第 225 図 トレンチ掘削状況



第 226 図 トレンチ断面図

### 2013－30 太鼓塚古墳群

調査日：平成 25 年（2013 年）10 月 17 日

調査場所：豊中市永楽荘 3 丁目 84-8, 9

調査対象面積：63.31 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 2か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 20 cmにおいて基盤層を検出したが、明確な遺物・遺構等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 227 図 トレンチ掘削状況



第 228 図 トレンチ断面図

### 2013－31 桜井谷窯跡群

調査日：平成 25 年（2013 年）10 月 31 日

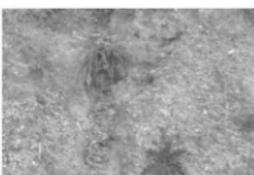
調査場所：豊中市上野東 3 丁目 534-1

調査対象面積：96.23 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機により筋掘りトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 90 cmにおいて基盤層を検出したが、黒跡関連の遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 229 図 トレンチ掘削状況



第 230 図 トレンチ断面図

### 2013－32 豊島北遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）11 月 7 日

調査場所：豊中市曾根南町 1 丁目 87-13 の一部、88-9

調査対象面積：54.60 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 1か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 135 cmにおいて土器細片を含む灰色粘土層を検出したが、下層は暗灰色粘土層（河川跡か）のみであった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 231 図 トレンチ掘削状況



第 232 図 トレンチ断面図

### 2013-33 島田遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）11 月 28 日

調査場所：豊中市庄内栄町 3 丁目 44-26

調査対象面積：30.76 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：掘削深度（地表下 200 cm）において、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 233 図 トレンチ掘削状況



第 234 図 トレンチ断面図

### 2013-34 桜井谷窯跡群

調査日：平成 25 年（2013 年）12 月 5 日

調査場所：豊中市上野東 3 丁目 534-2

調査対象面積：82.16 m<sup>2</sup>

調査の方法：重機によりトレンチ 2 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：トレンチ 2 において地表下 40 cm で基盤層を検出したが、遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：確認調査後、着工を指示。



第 235 図 トレンチ掘削状況



第 236 図 トレンチ断面図

### 2013-35 新免遺跡

調査日：平成 25 年（2013 年）12 月 26 日

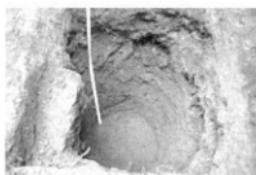
調査場所：豊中市玉井町 2 丁目 211-2

調査対象面積：42.37 m<sup>2</sup>

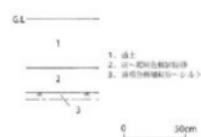
調査の方法：重機によりトレンチ 1 か所を掘削し、トレンチ内を精査した。

調査の概要：地表下 60 cm において基盤層を検出したが、明確な遺構・遺物等は確認されなかった。

調査後の処置：再立会後、慎重工事を指示。



第 237 図 トレンチ掘削状況



第 238 図 トレンチ断面図



# 写 真 図 版

図版1 内田遺跡第10次調査



(1) 遺構検出状況（南から）



(2) 遺構完掘状況（南から）

図版2 内田遺跡第10次調査



(1) 積穴住居1・2 完掘状況（西から）



(2) 積穴住居2 床面遺物出土状況

図版3 内田遺跡第10次調査



(1) 挖立柱建物1完掘状況（北から）



(2) 土坑2土器出土状況（北西から）

図版4 内田遺跡第10次調査

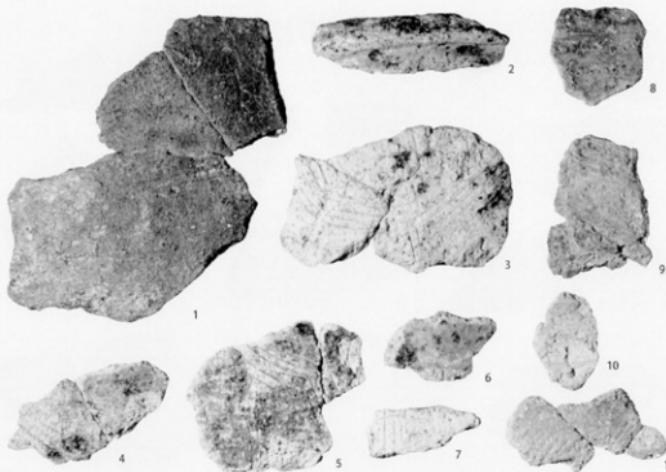


(1) 土坑4完掘状況（北から）

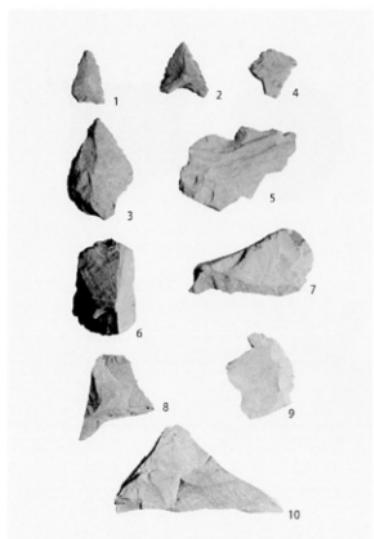


(2) 土坑4縄文土器出土状況（北から）

図版5 内田遺跡第10次調査 出土遺物



(1) 土坑4・5出土縄文土器（第7図）

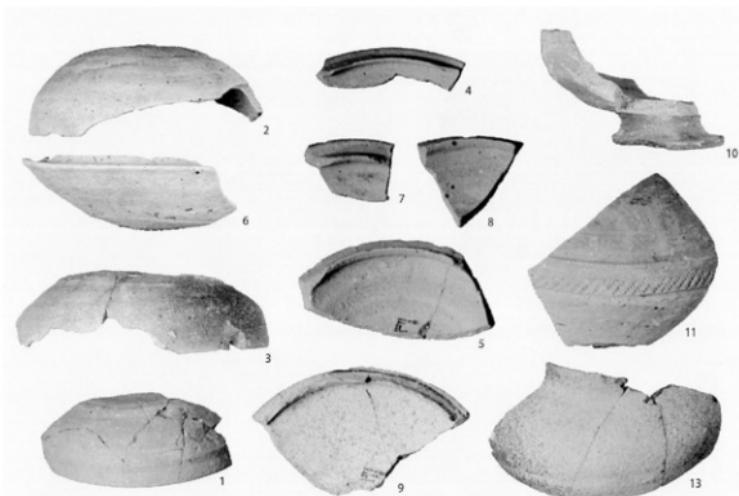


(2) 出土石器（第8図）

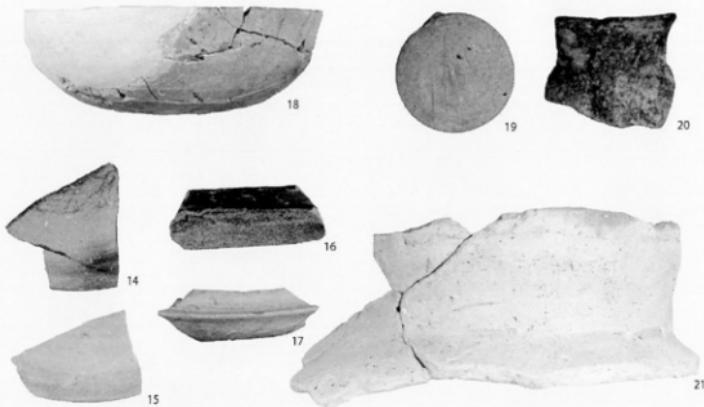


(3) 出土石器（裏面）（第8図）

図版6 内田遺跡第10次調査 出土遺物



(1) 窓穴住居1出土遺物（第10図）



(2) 窓穴住居2出土遺物（第10図）

図版7 内田遺跡第10次調査 出土遺物

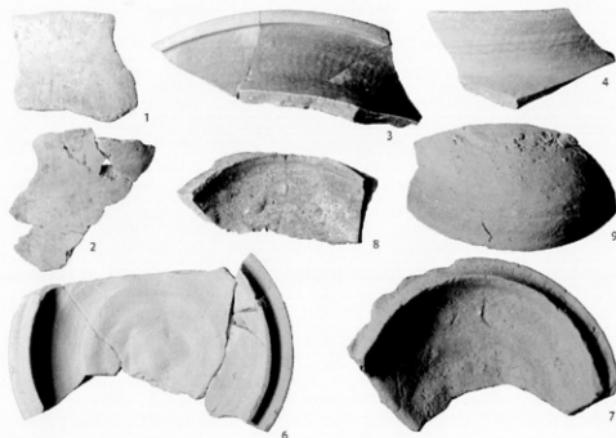


(1) 窒穴住居1出土遺物（第10図）

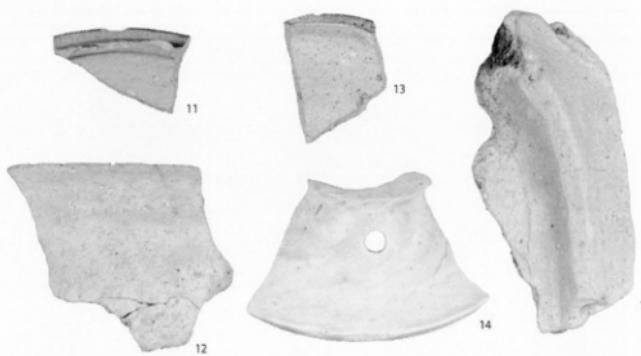


(2) 土坑2出土遺物（第13図）

図版8 内田遺跡第10次調査 出土遺物

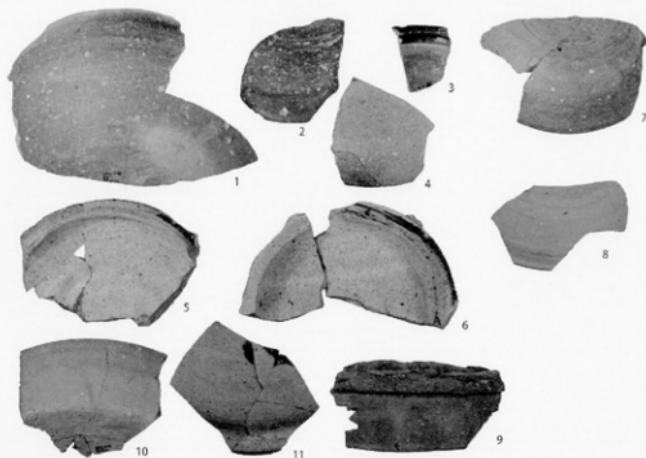


(1) 土坑2出土遺物（第13図）

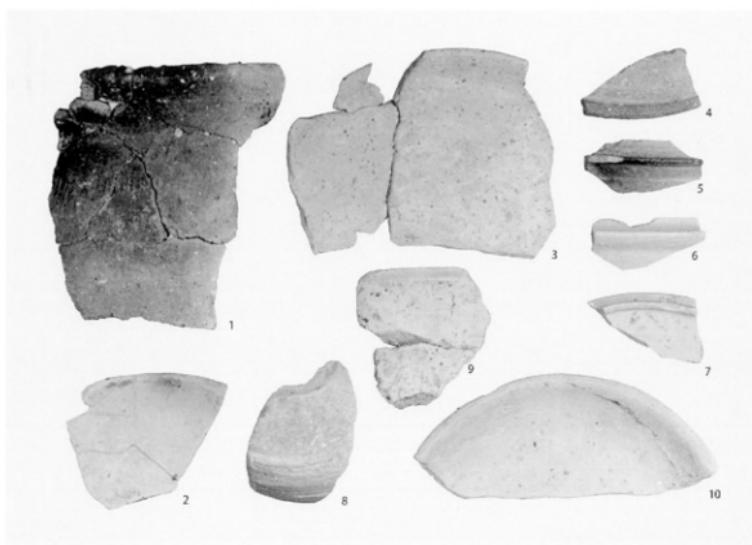


(2) その他土坑等出土遺物（第11・13図）

図版9 内田遺跡第10次調査 出土遺物



(1) 溝出土遺物 (第14図)

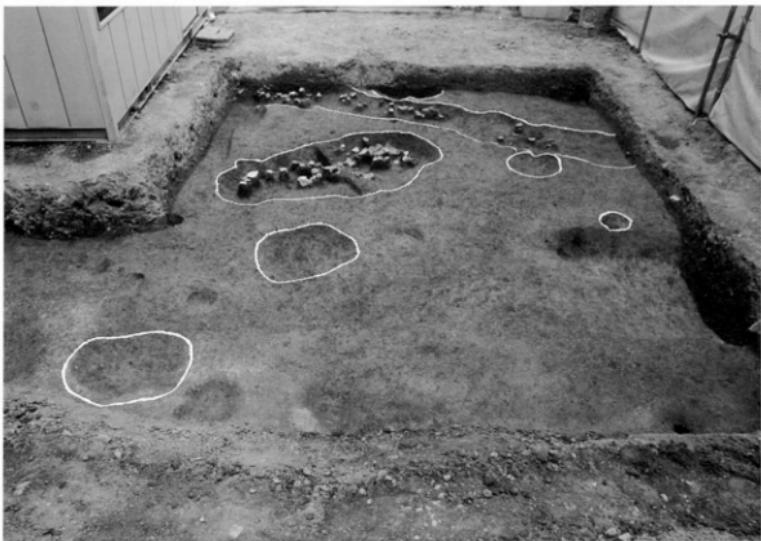


(2) SP出土遺物 (第15図)

図版 10 曽根遺跡第 12 次調査



(1) 北半部遺構検出状況（南から）



(2) 北半部完掘状況（南から）

図版 11 曽根遺跡第 12 次調査



(1) 南半部遺構検出状況（北から）



(2) 南半部完掘状況（北から）

図版 12 曽根遺跡第 12 次調査

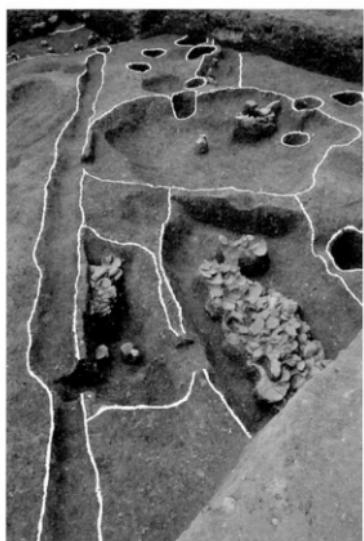


(1) 溝1 遺物出土状況（西から）

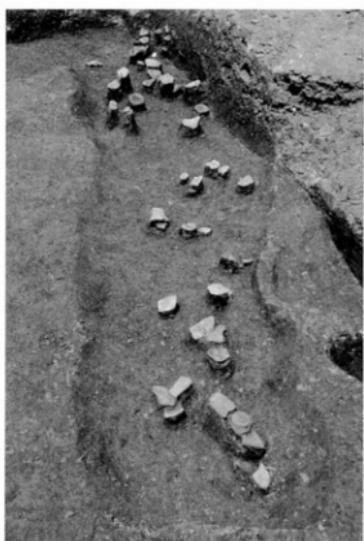


(2) 溝2 遺物出土状況（北から）

図版 13 曾根遺跡第 12 次調査



(1) 溝 2・3 と土坑 1・2 (西から)



(2) 溝 4 遺物出土状況 (東から)



(3) 土坑 1 遺物出土状況 (北から)

図版 14 曽根遺跡第 12 次調査



(1) 土坑2遺物出土状況（西から）



(2) 土坑3遺物出土状況（南から）

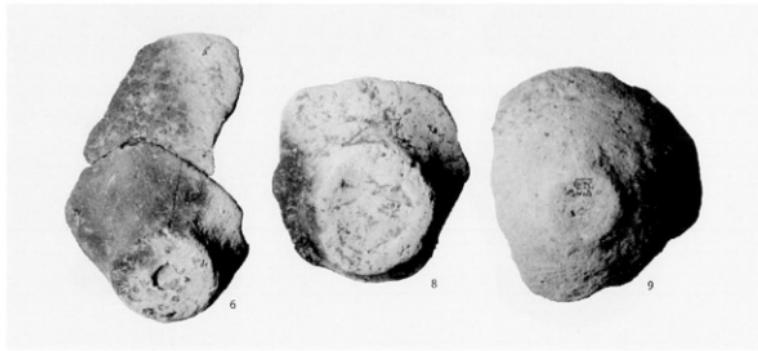
図版 15 曽根遺跡第12次調査 出土遺物



(1) 溝2出土遺物 (第24図)



(2) 溝2出土遺物 (第24図)



(3) 溝2出土遺物 (第24図)

図版 16 曽根遺跡第 12 次調査 出土遺物



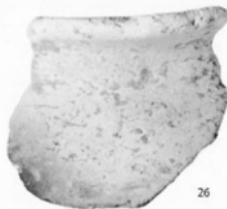
(1) 溝2出土遺物（第24図）



(2) 溝2出土遺物（第24図）



(3) 溝4出土遺物（第24図）



(4) 土坑2と溝1・4出土遺物（第24図）

図版 17 曾根遺跡第 12 次調査 出土遺物



(1) 土坑 1 出土遺物 (第 24 図)



(2) 土坑 3 出土遺物 (第 24 図)

図版 18 新免遺跡第 65 次調査



(1) 東半部完掘状況（北から）

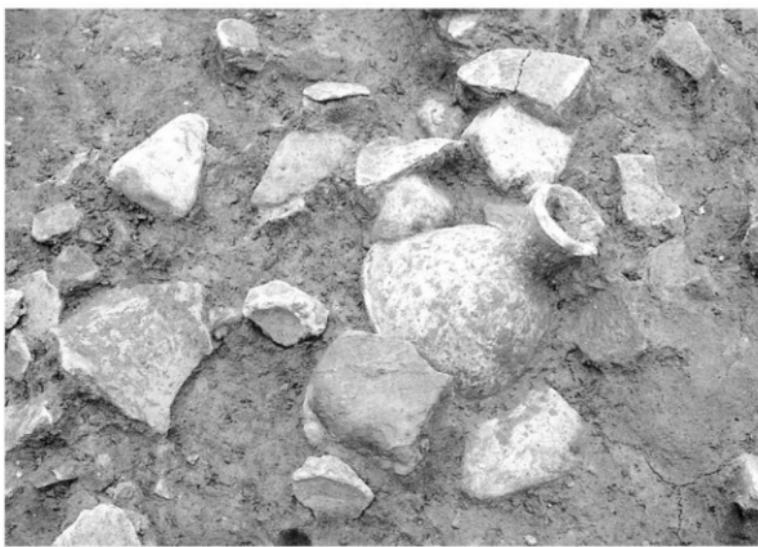


(2) 西半部完掘状況（南から）

図版 19 新免遺跡第 65 次調査



(1) 土坑 11 完掘状況（北から）

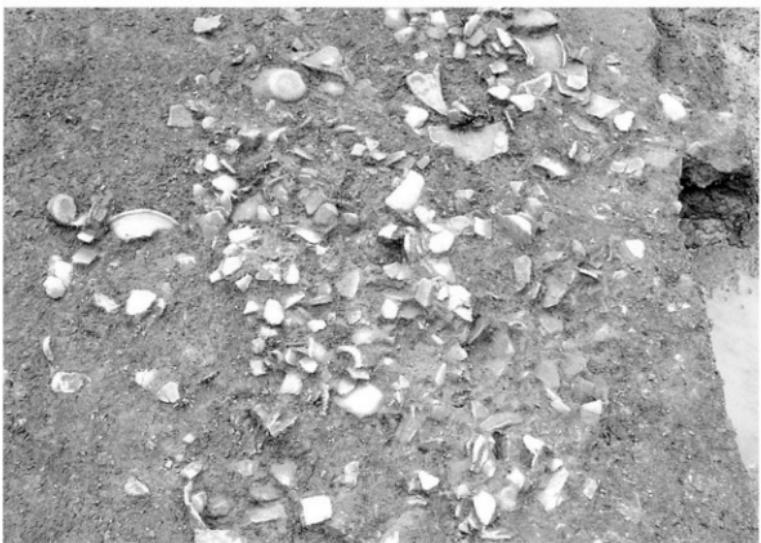


(2) 土坑 11 遺物出土状況（北から）

図版 20 新免遺跡第 65 次調査



(1) 土坑 11 断面拡大（南から）



(2) 土坑 17 遺物出土状況（南から）

図版 21 新免遺跡第 65 次調査



(1) 縦穴住居 11 完掘状況（北から）



(2) 土坑 20 完掘状況（西から）

図版 22 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物



(1) 土坑 11 出土遺物（第 31 図）



(2) 土坑 11 出土遺物（第 31 図）

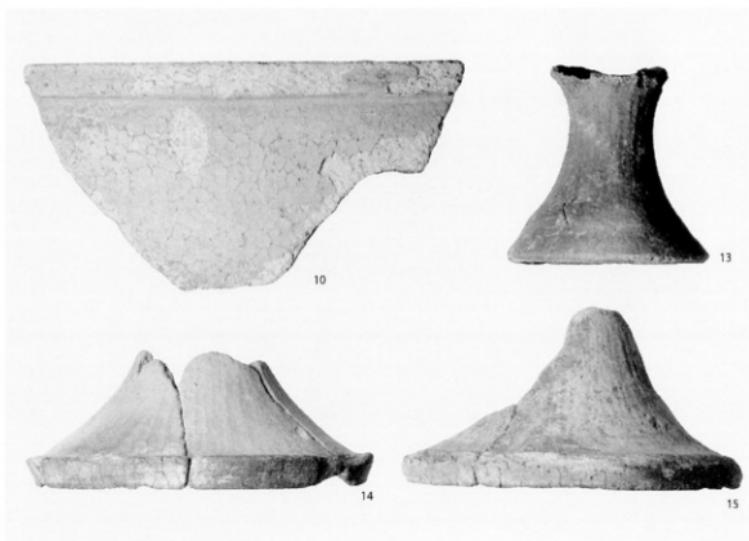


(1) 土坑 11 出土遺物 (第 31 図)



(2) 土坑 11 出土遺物 (第 31 図)

図版 24 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物



(1) 土坑 11 出土遺物 (第 31 図)



(2) 土坑 17 出土遺物 (第 32 図)

図版 25 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物

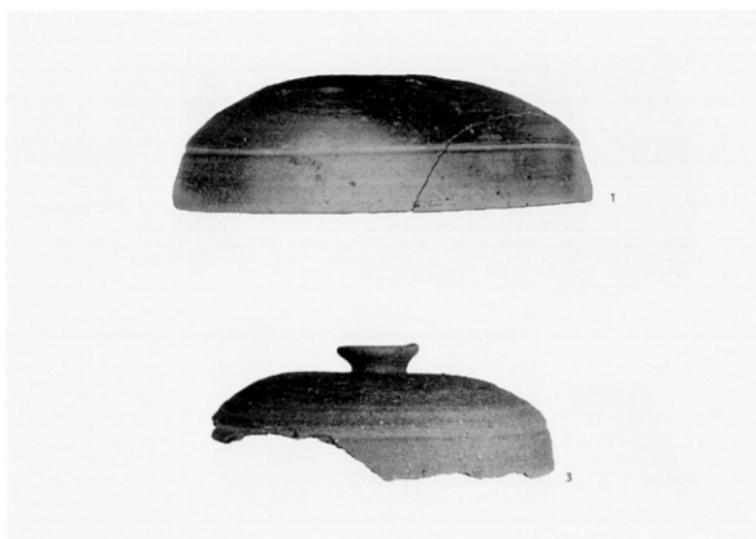


(1) 土坑 17 出土遺物（第 32 図）

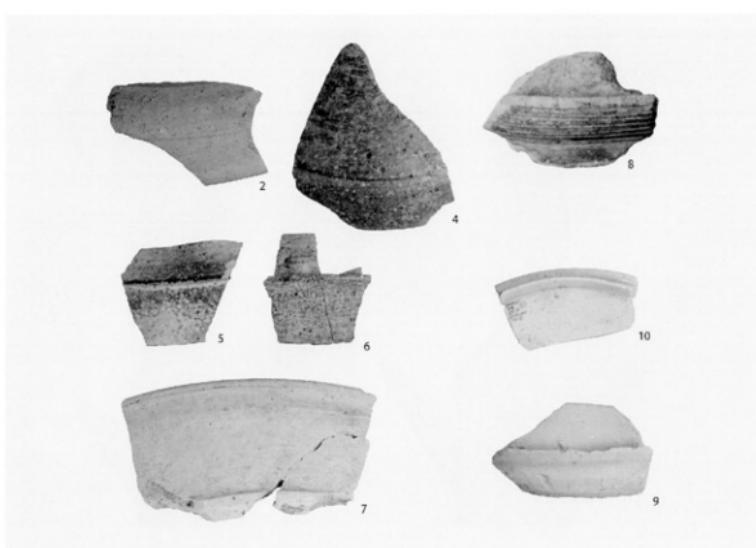


(2) 土坑 17 出土遺物（第 32 図）

図版 26 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物

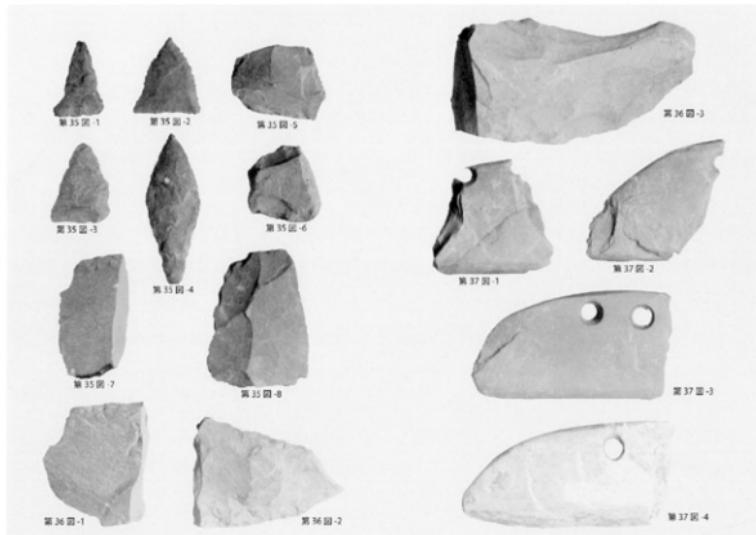


(1) 壁穴住居 11 出土遺物（第 34 図）

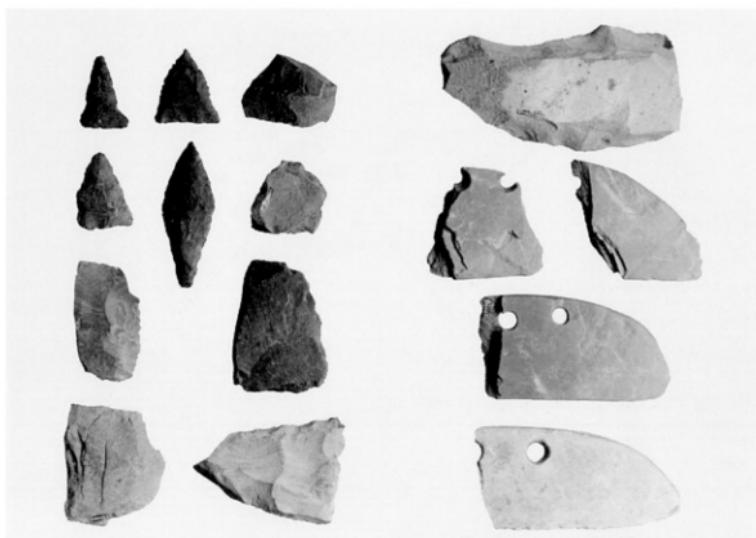


(2) 壁穴住居 11 出土遺物（第 34 図）

図版 27 新免遺跡第 65 次調査 出土遺物



(1) 出土石器（第 35 ~ 37 図）

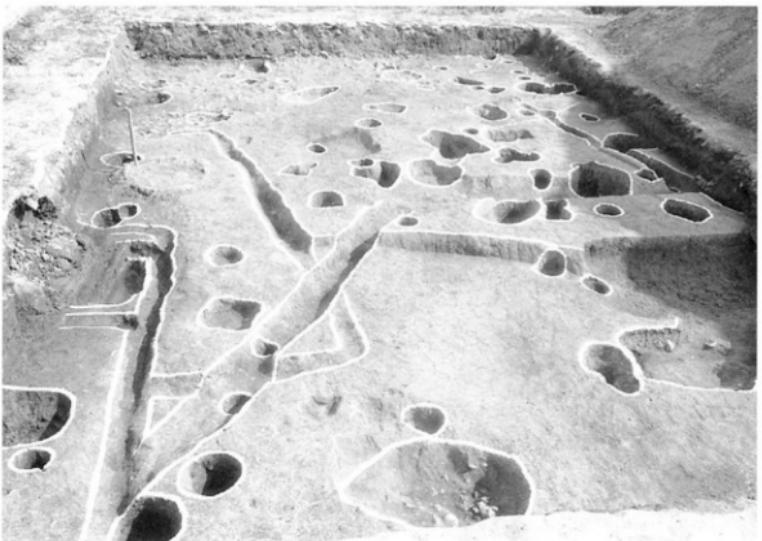


(2) 出土石器（裏面）（第 35 ~ 37 図）

図版 28 新免遺跡第 66 次調査



(1) 西半部遺構検出状況（南から）



(2) 西半部完掘状況（南から）

図版 29 新免遺跡第 66 次調査



(1) 東半部遺構検出状況（西から）



(2) 東半部完掘状況（西から）

図版 30 新免遺跡第 66 次調査



(1) 穴住居 2 床面遺物出土状況（西から）



(2) 穴住居 2 炉完掘状況（東から）

図版 31 新免遺跡第 66 次調査 出土遺物

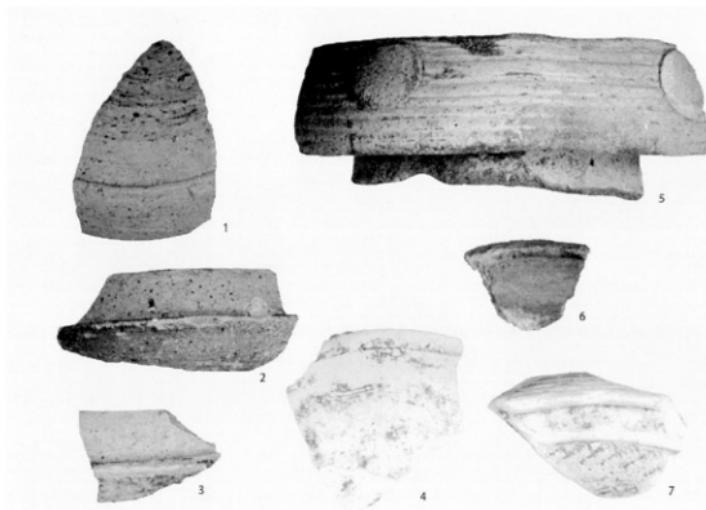


(1) 積穴住居 1・2 出土遺物 (第 41 図)

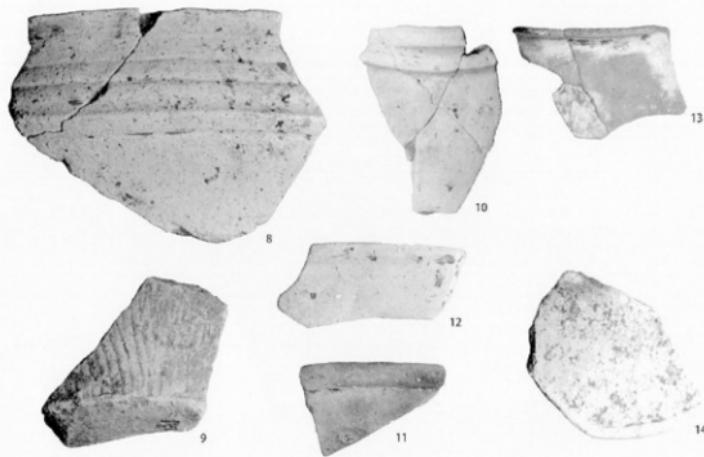


(2) 積穴住居 2 出土遺物 (第 41 図)

図版 32 新免遺跡第 66 次調査 出土遺物

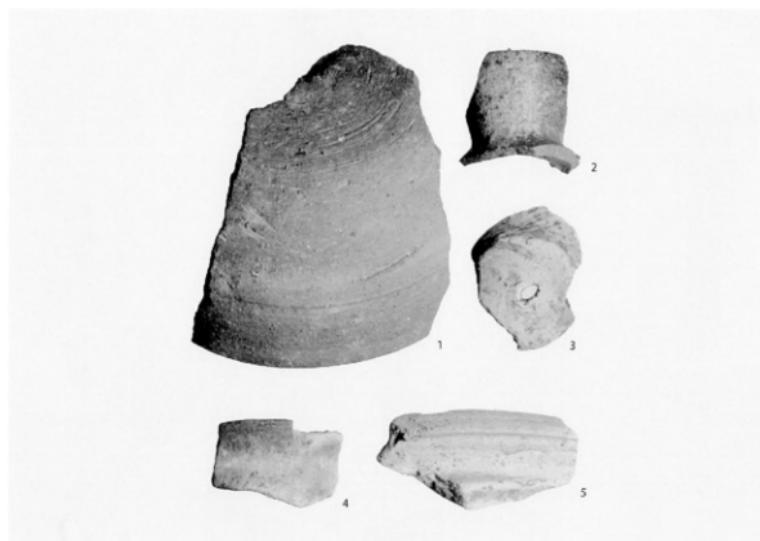


(1) SP 出土遺物（第 43 図）

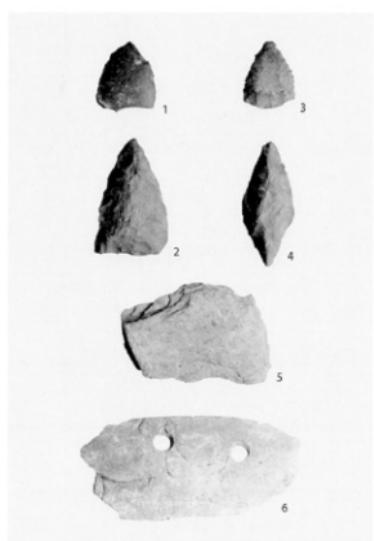


(2) SP 出土遺物（第 43 図）

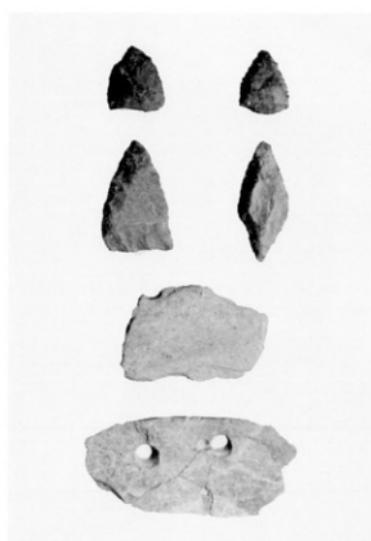
図版 33 新免遺跡第 66 次調査 出土遺物



(1) 土坑出土遺物（第 42 図）

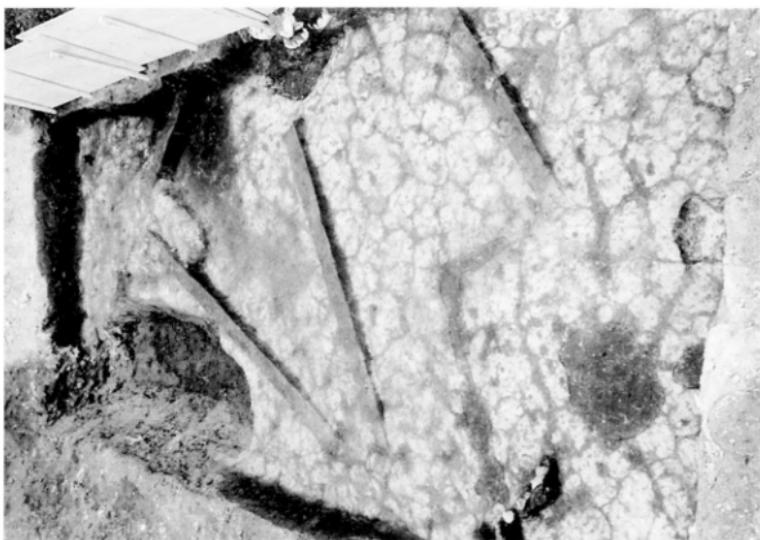


(2) 出土石器（第 44 図）



(3) 出土石器（裏面）（第 44 図）

図版 34 本町遺跡第 39 次調査

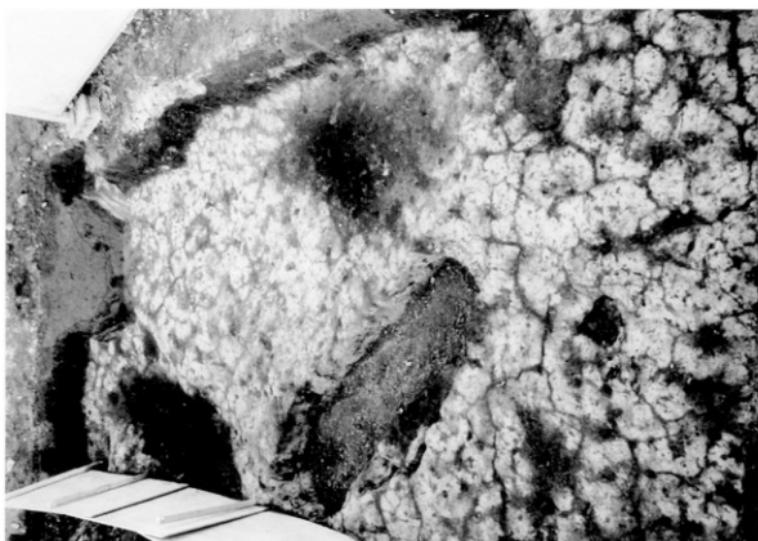


(1) 西区遺構検出状況（南から）



(2) 西区遺構完掘状況（南から）

図版 35 本町遺跡第 39 次調査

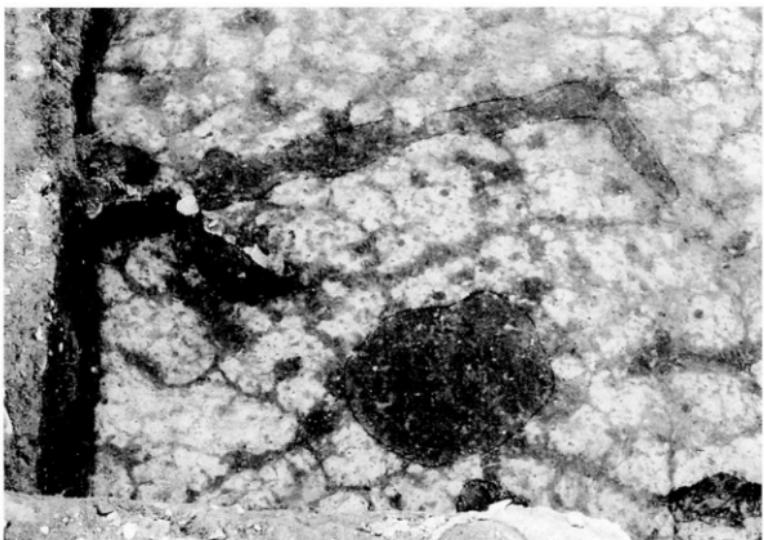


(1) 東区遺構検出状況（南から）

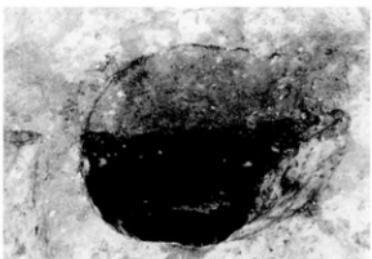


(2) 東区遺構完掘状況（南から）

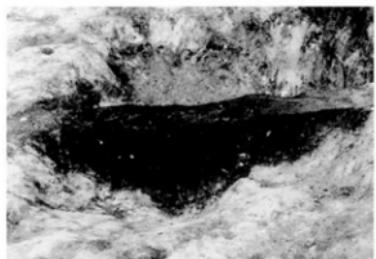
図版 36 本町遺跡第 39 次調査



(1) 縦穴住居検出状況（南から）



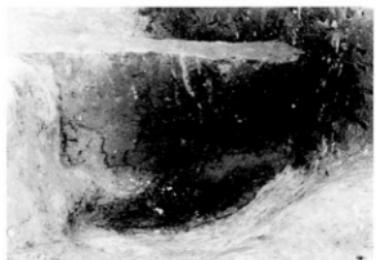
(2) SP-3 断面



(3) 上坑断面

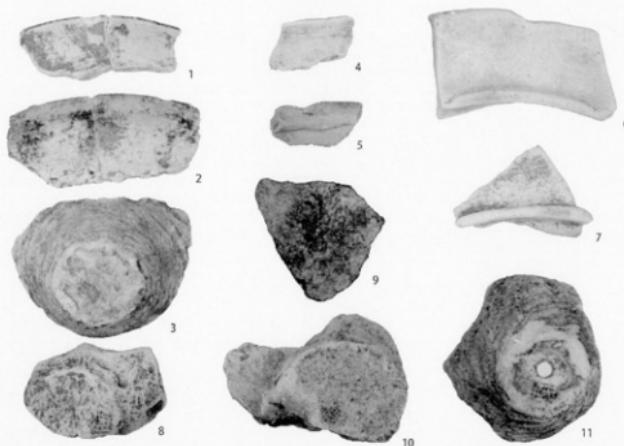


(4) 風倒木痕 (a-a' 断面)

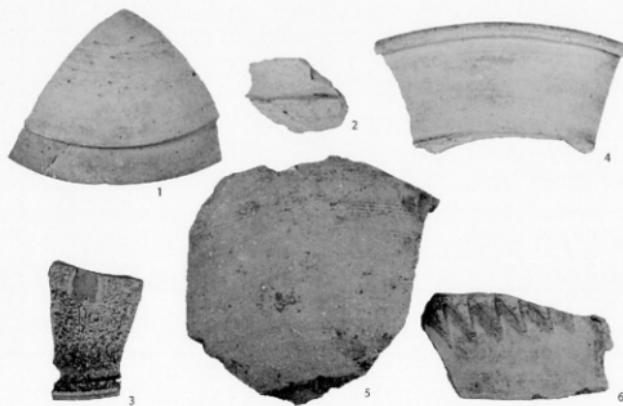


(5) 風倒木痕 (b-b' 断面)

図版 37 本町遺跡第 39 次調査 出土遺物



(1) 穹穴住居出土遺物 (第 48 図)



(2) 風倒木痕出土遺物 (第 50 図)

報告書抄録

ふりがな	とよなかし まいぞうぶんかざい はっくつちょうさ がいよう					
書名	豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成24・25年度(2012・2013年度)					
シリーズ名	豊中市文化財調査報告					
シリーズ番号	第66集					
編著者	陣内高志・脇部聰志・清水篤・浅田尚子					
編集機関	豊中市教育委員会(市町村コード27208)					
所在地	〒561-8501 大阪府豊中市中桜塚3丁目1-1 TEL06-6858-2581					
発行年月日	平成26年(2014年)3月31日					
所取遺跡	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
内田遺跡 第10次	桜の町3丁目 75-1-76	34°47'52"	135°28'03"	2011.12.12 ~ 2012.02.12	327 m <sup>2</sup>	共同住宅建築
曾根遺跡 第12次	曾根西町3丁目 17-5	34°46'12"	135°28'03"	2012.05.07 ~ 2012.05.31	59.37 m <sup>2</sup>	個人住宅建築
新免遺跡 第65次	玉井町3丁目 46	34°47'00"	135°27'30"	2012.05.21 ~ 2012.06.30	70.5 m <sup>2</sup>	個人住宅建築
新免遺跡 第66次	玉井町3丁目 24-1・2	34°47'01"	135°28'03"	2013.06.03 ~ 2013.08.10	123 m <sup>2</sup>	個人住宅建築
本町遺跡 第39次	本町2丁目 108の一部	34°47'11"	135°27'45"	2012.11.01 ~ 2012.12.04	37.4 m <sup>2</sup>	個人住宅建築

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内田遺跡 第10次	集落跡	古墳~平安	溝・土坑・ 竪穴住居	绳文土器 土師器・須恵器	绳文中期の土坑、古墳時代後期の 集落周辺遺構を検出。
曾根遺跡 第12次	集落跡	弥生~雞倉	柱穴・溝・土坑	弥生土器	弥生時代後期の集落周辺遺構 を検出
新免遺跡 第65次	集落跡・古墳群	绳文~雞倉	溝・土坑・ 竪穴住居	弥生土器・須恵器	弥生時代中期・古墳時代後期の 集落周辺遺構を検出
新免遺跡 第66次	集落跡・古墳群	绳文~雞倉	柱穴・土坑・ 竪穴住居	弥生土器・土師器 ・須恵器	弥生時代後期~古墳時代前期・古 墳時代後期の集落周辺遺構を検出
本町遺跡 第39次	集落跡	弥生~近世	竪穴住居・風倒 木痕	弥生土器・ 須恵器	弥生時代後期~終末期の集落周辺 遺構を検出

---

豊中市文化財報告 第66集  
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要  
平成24・25年度（2012・2013年度）  
発行：豊中市教育委員会  
豊中市中桜塚3丁目1-1  
平成26年（2014年）3月31日  
印刷：株式会社きたがわぶりんと

---

